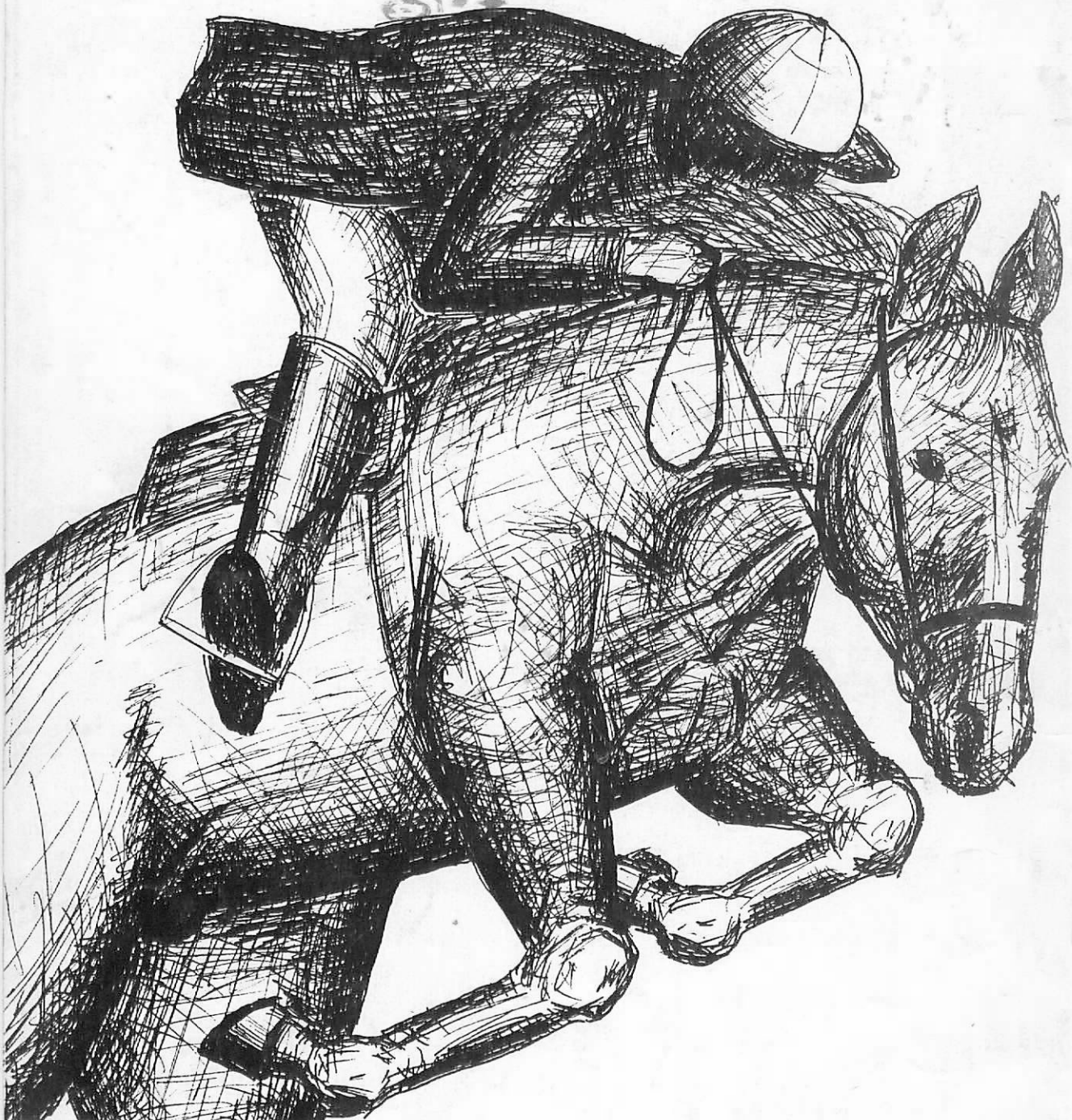


部報

巨馬
空溪

昭和53年度



No. **24**

北大馬術部

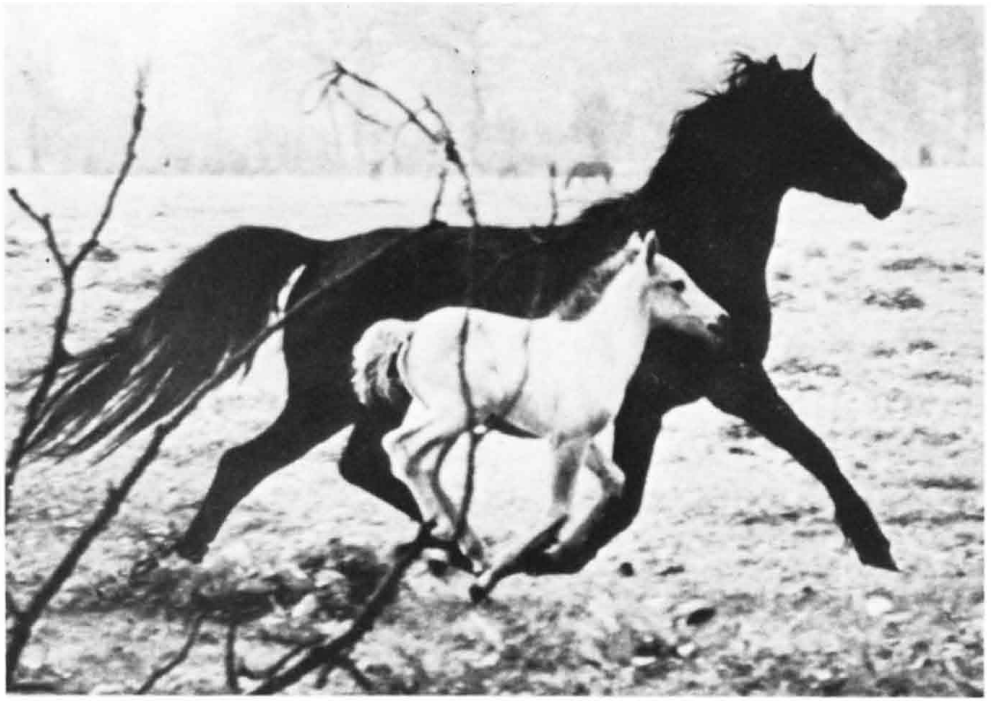
北大馬術部讃歌

作詩 三浦清一郎
作曲 滝沢南海雄

はるきたれば だいちひかーる
しろがねのえんさん ゆめほうほうたり
たからかにいま ぞいななけわれ
らしんめのほまーれあり
ほまーれあり ほく だい ほく だい お
お わがほこう われらしんめの
ほま ーれ あり

北大馬術部讃歌

- 一、
春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢々々たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり
- 二、
時来たれば 旗をかざせ
青雲の旅路に 意気軒昂たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり
- 三、
雲流れて 旅路遙か
青春の孤杖 泥濘はばめど
凜然と 進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり
- 北大！ 北大！ おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり



まだ明けやらぬ大地を

君よ奔れ

闇をつらぬく光となって

朝の凍てつく空気の中を

君よ飛べ

風を追いぬく光となって

君の青春に終わりはない

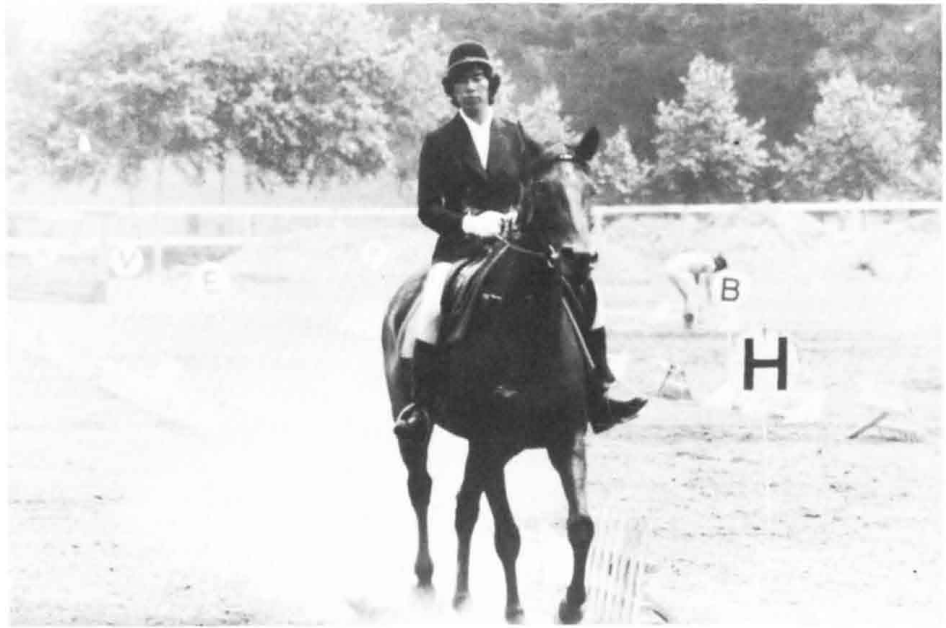
胸を流れる赤い血が熱い限り



ドンホッパー号と中畠兄（全日学）



北楽院号と三好兄（北日学）



羊蹄号と木村姉（北日学）



遠乗会（石狩浜に向って）



ハイエイム号離廐式



1年目日高合宿

巻 頭 言

部長 小池 寿 男

雪の少ない新年を迎えた。三〇年ぶりの少雪とか、昨冬の多雪にくらべれば通学には大変有難い札幌の正月である。

しかし、長期予報では、降雪量は例年程度とか、これからまた雪の多くなる季節を迎えるのかと思うとちよつと憂鬱になる。

昨年は午年とて飛躍を期待したが、結果的には不本意に終わった。部馬をみても、ハイエムの故障による離厩をはじめとして、故障馬が続出した。熱心な練習を希望する部員は、ついいらいらした気持をつづけざるを得ず、見ていてもかわいそうであった。

馬の運動器の故障は回復に時間がかかる。それを知りながらも、部員の馬に乗りたいたいと云う切実な気持を考え、つい充分に回復していないのに使用を許してしまう。これがかえって次の故障を生じ、結果的にはマイナスとなったようである。さいわいにもドンホッパー号は年間を通じてほぼ平均した力を発揮した。競技には運・不運もあるが、やはり何と云っても馬と部員のコンディショニングづくりが重要であろう。個々の馬の状態を詳細に検討したうえでの年間を通じての飼育管理計画が必要ではないだろうか。

馬の故障の発生も年によって差がある。昨年は鞍傷や腱・筋の故障が多かったが、一昨年は骨痛の発生が多かったなど、異った様相を示した。通年して各馬の状態を見ていると、四月頃迄に故障のもとがあるようだ。従来から冬の長い北海道では馬の故障はこの間の飼育管理の失敗によることが多いことが知られている。

特に昨年一年間の部馬の体調をふりかえてみると、このような北海道の特殊性を示しているように思われる。したがって、今年一月から四月までの冬期間の管理に留意し、それぞれの馬の状況に合った管理をし、能力を充分に発揮出来るような基礎体力を作った上で、今年のシーズンにのぞめるようにしたいものである。

(昭和五十四年一月)

開眼

「開眼」と云う言葉がある。読んで字の如く眼を開くと云うことと眼を見える様にする事の二つの意味がある。つまり能動的な意味と他動的な意味をもっている。物事を修業・修練するとき血のにじむ様な努力の中に、何かの機会に急に眼が開いてあたりが明るくなった様に何事かを会得して、急速な進歩を遂げる場合、これは勿論前者の場合である。一方自らの努力は勿論の事、人の助言、何事かの刺激によってそれこそ「ハタ」と思い当る事があり、それ以後己れの思うがまゝに目標に向って進む事が出来る様になったと云った場合、これは後者の場合をさすものである。物事修練は永い間の迷い、沈滞そして開眼のくりかえしであってこれがスランプと云われ、スランプを脱したと云う事であろう。馬乗りの道も勿論この二つの繰返しである。

我々の様に昔から貸与馬だけで馬を習ってきた者は（敢へて馬術などと云わず馬を習うと云うが）それこそいろいろな馬に乗り、いろいろな経験を積むうちに自然とコツを飲み込み「アッ、このことを云う人だな」「アッ、この扶助なんだ」と感得し、スランプを脱した方々が多いと思う。

最近の自馬による練習を見ていると自分に与えられた馬に漫然と乗っているだけで、自分の扶助に馬がどの様に鋭敏に反応するかを察知して少しでも馬を己れの意のままに動かそうと云う意慾に欠けている様に思う。いわば馬に乗せられているだけで馬を動

監督 岡田光夫

かしていないと云ったら、懸命に努力している諸君にすまないと思うが、少くともいろいろな方法を試みると云った努力が必要でないかと思われる。試行錯誤と云うことはいろいろなことを試みてあやまりを重ねながらしだいに進歩して行く事なのである。決定的なあやまりでなければ馬は決してこわれるものでないといいたい。

昨年六月に開かれた第十三回北海道自馬大会で、永く私の心に残る様な事が起った。それをこの機会に紹介したい。

中障害飛越競技、又は総合馬術競技で優秀な成績を修めた名馬名騎手十七組によって選抜障害飛越競技が行なわれた時の事である。五頭の馬が無減点で勝ち残り、パラージュを行なう事になった。第一回目で勝負がつかず、第二回目になった。パラージュも二回も行なう事になると観衆もその雰囲気のみこまれ、かたずを飲んで競技の経過の中に引き込まれていた。この中に我が中島選手とドンホッパーがいた。二回目ともなると障害の高さも一米五〇になる。中島君にとっては恐らく生れてはじめての一米五〇障害であったろうし、ドンホッパーにとってもシーズン早々の六月では無理な一米五〇であったろう。私も「一つやってみろ」と云う気持と「人馬の危険を考えたら棄権した方がよいのではないか」と云う複雑な気持で審判席に坐っていた。中島君は敢然として、生まれてはじめての一米五〇の高さに挑んだ。見事にクリヤ



一、観衆の「ホーッ」と云うどよめきの中にさっそうとしてゴールした中島君とドンホッパーの姿が目にとやきつけられた。この試合以来この人馬のコンビの活躍は全道大会、北日本大会、全日本、全日本学生大会で目覚ましいものがあつた。私はあの瞬間に中島君の開眼があつたと信じている。
最後に諸君たちに云いたい「眼を開け」、そして試合を見ていただくだけで眼が開ける様な見方をしなさいと。

創造の輪をひろげる

日特建設株式会社

取締役支店長 小池 栄一

本社 東京都中央区銀座8丁目14番14号
☎ (03) 542-9111 (大代)

札幌支店 札幌市中央区南13条西11丁目1251番地
☎ (011) 561-5326 (代)

旭川営業所 旭川市2条通り9丁目 士別信金ビル
☎ 22-1416 (代)

苫小牧営業所 苫小牧市新中野町3丁目11番地19号
☎ 34-4210 (代)

函館営業所 函館市五稜郭町1番13号 協栄生命ビル
☎ (0138) 55-5654

馬術と太秦先生

第六代部長 半沢道郎

初めに昭和四十九年に北大馬術部創立四十年記念写真集の発刊に際して先生が寄せられた文の前半の部分を原文のまま載せます。

「私が、馬乗りを始めたのは大正九年夏のこと、東大一年の時である。当時学生で乗馬をやっていたのは、学習院、東大、京大くらいのものであったが、東大では自馬などもっていなかった。青山にあった陸軍大学校は参謀要員将校の教育機関で、その将校学生の乗馬練習用として百数十頭の馬が飼育されていた。ところが夏になると、これらの将校が各連隊に配属され、実地の勉強をやる。その間百数十頭の乗馬は失業状態となり、何十名の馬丁だけでは運動にも事を欠くことになるので、一つ大学生にさせてみたらというのが東大馬術部の由来らしい。だから練習はこの夏休み約一カ月の乗馬演習が主であったけれども、他の期間も陸大の都合のつく限り日曜、祭日等に乘せてもらい、時には多摩川の二子渡しあたりえ遠乗もやったものである。

大学を出ると習志野の騎兵第十五連隊に入隊して文字通り馬と寝食を共にし、兵役を終った後も東大の研究室にいた関係から、陸大の乗馬演習はずっと続けていた。

札幌に来たのは昭和五年の春であるが、北大に理学部ができるから行ってみないかと恩師にすすめられた時、参りましようと思事をした私の頭の中には、北海道へ行ったら大いに乗れるだろうという考えがあったことは否めない。ところが来てみると、付近

に乗馬隊はなし、民間の乗馬熱もあまり盛んではないので、いささかがっかりしたのであった。

新しい理学部化学科の学生は僅か一五名であったが、その中には現学長の丹羽さんや、わが馬術部の半沢さんの顔も見えた。当時のこととていずれも金ボタンの制服姿で、よくわが家へも遊びにみえたが、これが半沢さんとのそもそもの馴初めである。半沢さんの話は当然馬のことに及び、その年の三月北大にも馬術部のできたことを半沢さんを通じて始めて知ったのであった。

当時は獣医学部というのはなく、農学部が畜産学科で、獣医学の教育が行なわれていたのだが、その畜産学科の必修科目として「馬及馬匹調教実習」というのがあり、そのために十頭程の乗馬が繋畜されていた。馬術部員は月寒の歩兵第二十五連隊にお願いして練習をしていたのであるが、なかには畜産の馬に乗るものもいた。

半沢さんからこんな話を聞き、それはということで早速長靴を新調、何とかわが欲求不満を解消することができたのであった。

昭和十四年三月黒沢先生の後任として、私が第四代の部長に推薦され、以来定年退職するまで二十三年間この席を汚したのである。……以下省略……」

これで先生が乗馬を始められた頃のことや北大に來られて馬に乗り始められた頃の様子を窺うことができますが、私は昭和二

年に北大予科に入学、翌三年一月に大正十三年からありました北大乗馬会に入会、昭和五年に北大乗馬会を解散して当時の北大文武会の中に新しく馬術部を創立し、部員として活動して居り、新しくできた理学部化学科に進んで先生の教えを受けることになりました。爾来馬術部OBとして部長のお手伝いをし、先生が部長を辞された翌年から定年退職まで十年間第六代部長を勤めたのであります。父が農学部で勤務していたことをいいことにして農場の畜産学科の演習用馬によく乗せて貰っていましたので、太秦先生をお誘いして一緒に乗馬を楽しんだのです。

先生が部長になられました昭和十四年の馬術部の主任は西村君でありました。翌年が馬術部創立十周年に当りますので、先生のご指導の下に西村君が主となって「北大馬術部十年誌」が発刊されました。巻頭に太秦先生は「十年誌発行に際して」と題して一文を寄せられましたが、その中に先生が部長になられました年に第十六回全国高等学校対抗馬術競技会に北大予科が優勝、第十一回全日本学生選手権大会に菅間君（故人）が優勝したことを非常に喜ばれ、馬術部創立満十年、ご自分が馬に乗り始めてから満二十年に当る年に部長としてこのような名譽を享受し得たことは、自分の乗馬二十年史を飾る上からも何よりのこととして感激したことを記して居られます。

定年退職されるまで二十三年（実に先生の北大ご在職期間の三分の二）を部長として北大馬術部を育てられ多くの部員を教導されました。その間北大乗馬同好会会長、札幌OBライディング倶楽部、札幌馬スキー倶楽部の会員となられ、数々の競技に出場されました。

戦前は旭川で第七師団主催の北海道乗馬大会が毎年催されていた

ましたが、先生は北大OBチームのメンバーとして障害飛越競技に出場されました。私と組まれた時は私の経路違反で切角の先生のご奮闘も空しく優勝を逸しましたが、西村君、山本君（昭和十五年有機、故人）と組まれた時は、見事優勝を獲得されました。その後戦争時代に入ってその大会も中止されましたので、優勝旗はずっと理学部の先生の教授室に残り、今では私が預かって農学部の室にまだ置いてあります。

昭和二十九年夏札幌に第九回国体が開催されることになって、その前年準備のため、北海道乗馬連盟が結成されたのであります。先生はその理事となられ、貸与馬競技用の二十頭の乗馬の準備などに尽力され、国体には役員として活動されました。国体終了後準備した馬の中から六頭を北大馬術部の練習用馬として払下げを受け、北大に繋養するよう運動されて、多年の念願でありました自馬繋畜の夢を実現されました。

昭和三十七年北大を去られるまで、北海道乗馬連盟の理事、副会長を勤められ、函館の工業高等専門学校の初代校長になられてからも、北大馬術部後援会の会長を引受けられて、部の活動を援助されました。私は先生のご退官を記念する意味で部に「太秦杯」を寄贈して頂くことをお願いしたのであります。先生は快諾され、北海道の学生は基本である馬場馬術に対する関心が浅く練習も不足であるから馬場馬術を含む競技種目の優勝者に対するチャレンジカップとするようにと大きいカップを贈って下さいました。北大では毎年五月に太秦杯記念馬術大会を催しています。昨年は先生が自ら優勝者にカップを手渡されましたが、今年はお出になられませんでした。函館では函館乗馬倶楽部を創設されて会長となられ、函館競馬場でご自分もよく乗られました。高専に馬術部

をつくられて部長となられ、また北海道高等学校馬術連盟の初代の会長を引き受けられて、最後まで高校生の馬術振興に尽されました。また函館競馬場で市民乗馬教室を主催され、自ら講師となつて初心者の方の指導に当られました。

札幌に戻られてから札幌乗馬会の会員となられ、在札の古い馬仲間との交友を楽しまれ、何度か会合に出席されましたが、乗馬をされたのは唯一回でありました。

先生は約六十年馬に親しまれ、馬術に関係されました。特に北海道の馬術界、中でも学生馬術の振興に尽されたご功績は誠に大きいのであります。財団法人日本馬術連盟では昭和四十五年度に日本馬術連盟功労者として先生を表彰しています。

先生はご自分の教授室にご自分の障害飛越の馬上の勇姿の写真を飾って居られましたが、斗南病院の病室にも同じ写真を飾って居られ、お苦しみの中にも暫し馬上にあるお心持で自ら慰めて居られたことと拝察して居りました。亡くなられた日にお宅に参上し、お別れをして参りましたが、ご長男がお棺の中に馬の置物を入られたと言つて居られました。馬上の天国ならぬ本当の天国で天馬に跨つて居られる凜然たる先生の勇姿を想像し乍ら、長年のご恩寵に対し心からお礼を申し上げ、ご冥福を祈つて拙文の筆を擱きます。

ウマの事なら何から何までホース・ニュース

馬



正確な情報、的確なアドバイスを提供します。

期待をこめて (元主将から)

一昨年までの上り調子を、維持することもできず、昨年、全日学では惨めに敗退した。

熱い期待と声援を寄せられた諸先輩、関係者の皆様には、言訳の言葉ありません。また今後も、一層の暖い愛情を北大馬術部に注いでやって下さい。

『問題は、現実の中にこそ存在する』

高邁な理想は重要である。否定はしない。しかし、それを純粋化するのには机上の作業。理想は現実から昇化されたものかも知れないが、馬場の中のものにとり、むしろ現実の中に留まっている問題こそ切実である。

行為を全て理想への道筋に体系的に組み込めることも必要だが、逆に、そのために教条にしばられるべきではない。

現実、まさに自分達の手で試し、納得しながら解決する他に道はない。

『団体の意志』

毎年、どこからか三十名程の若者が集まり、一諸に苦勞し、泣き、笑う。ただ馬のためにと汗にまみれ、泥にまみれる。

行動が目的ではない。少くとも当事者にとって現実の目標があり、行動は過程であるはずだ。

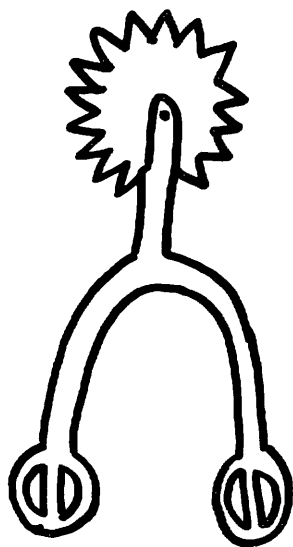
馬を媒介にする限り、個々、様々の目的は、より高い次元で統合され、協力して実現されるべきだ。それが団体の意義である。

卒部生代表 三好功悦

個人は、団体の意志を形作り、自ら守備範囲を開拓し、切磋琢磨しながら実現する。決して、位置を与えられ、組み込まれるのではない。当然のことであるが、一度考え直してもらいたい。

そして、もう一つ、

馬も、施設も、まさにその為の手段であり、現役部員の責任と管理に置かれるべきものであることを、強く自覚してもらいたい。



目 次

○ 巻頭言	……………部長	小 池 寿 男	
○ 開 眼	……………監督	岡 田 光 夫	
○ 馬術と太秦先生	……………第六代部長	半 沢 道 郎	
○ 期待をこめて	……………元主将	三 好 功 悦	
○ 役員報告			
主将	……………三年目	西 川 理 一	1
主務	……………三年目	国 枝 保 幸	2
馬匹	……………三年目	島 村 努	3
会計	……………三年目	吉 田 円	4
記録	……………二年目	篠 田 聖 児	6
国体観戦記	……………二年目	高 橋 均	16
第30回全日本馬術大会観戦記	……………二年目	石 黒 直 秀	17
第21回全日本学生馬術大会	……………四年目	三 好 功 悦	19
"		中 島 孝 幸	
○ 調教報告			
スターライト号	……………三年目	成 田 慎 二	23
羊蹄号	……………四年目	木 村 憲 子	25
疾風号	……………三年目	島 村 努	29
天龍山号	……………四年目	三 好 功 悦	34
ドンホッパー号	……………四年目	中 島 孝 幸	37
北燕号	……………三年目	西 川 理 一	39
北楽院号	……………四年目	三 好 功 悦	41
北姫号	……………三年目	国 枝 保 幸	44
北将号	……………昭和53年度卒	矢 田 明	47

北離号	三年目	島村 努	48
○ 離席報告			
ハイエーム号	昭和53年度卒	山本 裕介	54
○ 水産学部馬術部活動報告	漁業学科三年	大目 憲一	55
○ 先輩寄稿			
馬術部ベナントについて	昭和28年卒	斉藤 善一	57
○ 卒部にあたって			
思うこと		三好 功悦	58
雑感		中島 孝幸	59
去り際の思い		木村 憲子	60
○ 自己紹介・他己紹介			66
○ 名簿			86

住所 北19西4
電話 742-0634

コーヒー・カレー・スパゲティ

COFFEE SHOP
オニオン

役員報告

主将

学生馬術について

西川理一

一昨年の全日学での個人優勝、団体二位から昨年の全日学での敗退、特に個人優勝、団体二位の立て役者スターライトと疾風の失権という苦しい、前途多難な幕明けで僕の主将課業は始まった。しかしながら、新しい馬配を決定した後、人馬の調子は多かれ少なかれ上向いていると思う。今年はず去年の汚名を挽回したいと思う。ここでは、学生馬術ということについて僕の考えを少し述べることにする。

北大馬術部というのは主将の僕が言うのも変だが、変ったクラブだと思ふ。岡田監督以外コーチと名がつく人が一人も存在せず、学生自らが自分たちの為に自分たち主体でクラブを運営し、馬を養い、調教し、下級生を教え、自らをも律しているからである。これは勿論表面的な事で、実際には札幌在住のOBの方々から来ていろいろと面倒を見ていただいているのだが、それでもやはり他の大学やクラブに比べて変わっていると思う。

それと、馬術というものに関して馬場馬術はやらないと決めておられるのも他大学から見ればおかしなことだと思ふ。

前者に関して、はっきりいって学生がほとんど全てをやるとい

うのは何年もやってきたことだが、それだけ体力的にも精神的にもより疲れるし、個々の人間にも負担は大きい。しかしその反面、結果はどうであれ自分らでやったということはそれだけで意義深いことだと思ふ。しかし誤ってならないことは、クラブというものは自分たち学生だけでやっていけないということ。OBの方々や多くの馬乗りの人達に素直に教えを乞い、その人たちの話に耳を傾けることのできるものが本当に自分でやっていけるのだと思ふ。かたくなに自らの殻に閉じ込めることは自分の身を小さくするだけで、成長はあり得ない。やらなければならぬのは殻を破ることである。もちろん主体性を失い他人に頼るだけになることも慎まなければならぬ。ほくらはロボットじゃないのだから、自らの頭で考え、自らの体を動かすことに意義があるのだ。

後者に関して自然馬術と馬場馬術は相反するものである。とカプリリーは言う。未熟な人間にとってわずか四年間で馬を調教しながら中障碍を満点で帰ることに、賞典馬場を完璧に踏むことはなかなか容易ではないし、いかにすぐれた乗り手でも、大障碍とグランプリ馬場馬術を同一馬で満足に乗りこなすこともまた難しいことだと思ふ。(もちろん人馬を変えれば話は別だが)ほくらが大学に入って初めて馬に乗るものがほとんどだから、それでそれなりの結果を得ようとする場合、異質な目標を欲張って持つよりも障碍なら障碍、馬場なら馬場でやる方が得策なのは自明の理である。二兎を追うものは一兎も得ず。障碍に関して僕らにとつて問題なのは総合の調教審査で、現に学生の大会でも北大は全般的にかなり落ちる。これをどうするか。今までは試合直前にやるだけだった。方法としては馬の口や腰を痛めない程度に練習する

か、練習馬をもうけるか、部以外の所の馬に乗せてもらうかだと思ふ。しかし、どちらにせよもっと練習しなければいけない。

最後に学生自らが馬を新馬のうちから調教するという事に関して、未熟な者が馬を調教することには限度が自ずと生じて来ると思ふが、可能性はやり方次第で大きくなると思ふ。諸先輩が言われたことだが、自らが謙虚にかつ自信をもって馬に接し、無理、困難、束縛を排し、易から難へ、ていねいかつ大且にやれば決して馬を調教するというのは出来ないことではない。それといつどんな時でも馬を愛し、馬の立場に立って考え、馬の気持ちがわかれば良い結果は必ず生まれると思ふ。

愛馬精神からこそ人馬一体が生まれる。

主 務

国 枝 保 幸

主務の仕事というものは煩わしいというのが、数カ月勤めた新米主務の感想である。処理すべき仕事の多い事多い事。皆つまらぬ書類だとか、電話連絡、学生部通い、歴代の主務の方々よくぞ頑張られたものだと感心するばかり。引き継ぎの際、細かい仕事に早くなれ、大きな目で部をとらえ、部の為に働らこうという初心もどこえやら、サラリーマンの如き生活にヘキヘキとする毎日である。

それでも不思議な物で、部内から我が怠慢さをつつかれ、外からは未熟さ故に叱られつつ、重かった腰も軽くなり、世間の雨風

にもなれたようだというより失敗に対して凶々しくなったのでしようか。

さて、机の書類から目を離し、目を大きく見開いて部を見渡すとき、まず目につくのはアルバイトです。年間百五十万。さらに乾草に化けた労働力を考え合わせると二百万近くを稼いでいることになる。誰か一人犠牲にして、就職させ、貢いでくれないだろうか。そうすれば学校さぼってバイトをせずすむ。中央競馬はまだいい。夏休みだから。しかし道管は平日授業を一人平均四回は没るし、秋は遠征でつぶれ、雪祭は試験前、部員総会で文句がでるのも当然である。そんなわけで春休みにアンケート調査のバイトをやった。不評。がもうかった。これで道管バイトの負担は軽くなるはず。部員諸君、君達の汗と血が馬を肥やすのだ！頑張ってくれ。

アルバイトはこのような状態でこれが限界といったところ、それでは支出を減らせばという事になる。がこれはさらに難しい。大きな支出を考えると、飼料代として燕麦、フスマを学生部を通してホクレンから購入、約10ヶ月分程援助がある。安く上げるなら乾草代をどうにかするしかない。何処に良い話があればお世話下さい。お願い致します。次に鉄代、これは太田さんの御好意で御値段差置きありがとうございます。後はどうにも削りようがない。部報等で後援会より援助いただき、同好会からも馬具等の援助をいただいている。助かります。又、東京OB会の方々には今年も、遠征に際し現役の為に会を開いていただきました。部報が製本して出せるのも、新しい鞍が買えるのもこのお蔭と感謝している次第です。

OBの方々に現役から何もお返しできず申し訳なく思っており

ますが、部員一同一生懸命やっております。又今年も甘えさせてください。

こう考えると支出は減らすのは並大抵の事ではないように思えます。節約しかない、余計な支出をなくすことです。毎年、なにかと事故等による支出が必ずあります。このような事が今後行らぬよう部員諸兄の責任ある行動を望む次第です。

自分の中に閉じこもりがちで実行力に欠ける点で主務という役目に全くそぐわぬ性格を有し、世間知らずの怠慢な奴で、皆様に多大の御迷惑をおかけしておりますし、これからもその予定で主務として一年間一生懸命やっていくつもりですので何とぞ御指導、御支援の程、宜しくお願い致します。

馬 匹

島 村 努

昨年引き続き馬匹になりました。前号の部報で、私は、私の役目として、まず第一に、故障馬を出さぬように、特に、人為的ミスによるケガをさせないということをおげました。それにもかかわらず、一月に、馬場に放しておいた北楽院が他馬に蹴られて骨折するという大事故を起こしてしまいました。骨折部位は、レントゲン写真の結果、左後肢第四中足骨完全骨折ということが判明し、二ヶ月位たたないと後遺症が残るかどうかわからず、また騎乗できるのは六月以後という小池先生の診断でした。北楽院自

身に対し、また入厩の際にお世話して下さいました春田さん、大切に調教して下さいました、平野さん、本城さん、三好さん、そして、彼の活躍を見守って下さっている先輩の方々には、何とお詫びしてよいのかわかりません。二年前、北隼の死を体験し、もう二度とこんなことは起こすまいと誓った筈の私たちに気のゆるみがあったことを深く反省しています。現在、部の方針としては、北楽院の能力、そして人為的ミスということを考えた上、彼の回復を待つことにしています。今のところ、北楽院は、体重をかけることができ、また跛行するものの、歩行はできます。ただ、折れた骨がわずかにずれていることが心配です。

五十三年度は、大きな故障が相次いでしまいました。五月には、疾風号骨軟症、八月、北日本大会（帯広）での、ハイエイム号腫断裂、北楽院号左後肢、半腱半膜様筋断裂、そして一月の骨折、十月から現在に至る疾風号右前肢腱炎です。

疾風号は、毎年骨軟症にかかるので、注意し対処したのですが、一ヶ月間、運動らしい運動ができませんでした。今年は、二月からビタミン剤、Ca剤を、十分投与すると共に、飼料の改善を行い、できる限りのことをしています。腱炎の方は、十月に発病し、全日学で悪化、その後裸蹄にして二ヶ月半馬休にしました。少しづつ運動を開始していますが、完治後も、運動量を再検討せねばなりません。

ハイエイム号は、以前より、右前肢浅屈腱炎を起こしており、様子をみながら騎乗していましたが、試合直前の準備運動中に腫断裂を起こし、水野さんの協力を得て、副木をあてて蹄葉炎を防ぎました。しかし、障害馬として使うことはできず、岩手県の遠野へ繁殖牝馬として離厩しました。

北楽院号は、北日本大会の中障第一走行中に右後肢半腱半膜様筋を断裂しました。冬期間は特に、準備運動を充分に行なうと共に、マッサージを行ないながら騎乗していました。しかし、前述の如く、骨折させてしまい、騎乗は、六月頃からになる見込みです。

各馬体状況(五十四年 二月)

スターライト……………右後肢腱鞘炎

羊蹄・北姫・北燕・北離・北将……………異常なし

疾風……………右前肢繫靭帯炎・馬休

天龍山……………右前肢繫靭帯炎良好

ドンホッパー……………両前肢管骨瘤、熱があれば雪冷

北楽院……………左後肢第四中足骨骨折・馬休

馬匹の仕事としては、前年度と同様です。小池先生をはじめ、獣医学部外科教室の諸先生方、薬品、その他馬体管理の面でお世話になっている水野兄、本城兄、装蹄師の太田さん、これから、よろしくお願い致します。

会 計

吉 田 円

いつも赤字、赤字と困っている馬術部ですが、今年は馬が十頭しかないこともあって、昨年度繰越してもらった黒字分をそのまま残せそうだと予想しています。できればもっとバイトを減ら

S 5 4 . 1 ~ S 5 4 . 8 の収支予想

収 入	支 出
部費・入部金・滞納金 40万	飼 糧 40万
アルバイト 100万 (中央競馬・雪祭・アンケート)	蹄 鉄 73万
補助金 10万	馬具・備品 22万
その他 12万	薬 品 15万
計 162万	遠征(日高・十和田・帯広) 60万
12月現在手元 168万	文化(部報含む) 30万
計 330万	その他 50万
	計 290万

したいと思っておりますが、古くなった馬具に補充が必要なことや、遠征費がかなりかかりそうなこと、OB会からの補助が途絶えていることなどから、バイトの収入にかなり頼らなければならぬ状態です。今後は、せめて学業に差障りない範囲に抑えられるようにしていけたらと思います。何卒御援助のほど、宜しくお願い致します。

決 算 報 告

S 5 3 ・ 1 ~ S 5 3 ・ 1 2

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1 0	1 1	1 2	計
収 入													
部費・入部金	11,159	67,261	37,511	84,423	137,695	160,672	37,619	36,310	44,897	156,498	25,191	27,485	826,721
アルバイト	0	234,500	0	0	94,700	0	93,000	30,000	618,920	375,200	128,600	0	1,574,920
補助金	152,800	0	0	0	0	134,450	16,000	47,000	1,618,000	0	7,500	94,000	2,069,750
その他	53,230	14,205	69,530	12,500	14,000	199,520	152,000	43,291	136,597	13,500	41,069	44,720	794,162
計	217,189	315,966	107,041	96,923	246,395	494,642	298,619	156,601	2,418,414	545,198	202,360	166,205	5,265,553
支 出													
飼 糧	0	0	15,600	209,500	46,990	26,950	0	0	6,250	22,500	770,000	0	1,097,790
蹄 鉄	0	0	200,000	0	0	120,000	0	0	280,000	200,000	0	203,000	1,003,000
馬具・備品	112,000	0	31,750	7,875	2,410	50,310	10,145	8,200	26,590	17,940	24,500	10,830	302,550
薬 品	0	900	31,326	2,356	1,800	22,050	3,995	45,270	39,668	12,180	0	21,990	181,535
遠 征	0	7,000	0	0	0	0	5,000	122,200	31,600	1,800	292,900	0	460,500
文 化	5,079	3,920	11,068	6,310	5,513	71,528	178,480	31,189	2,200	46,816	4,590	22,202	388,895
記録・事務	4,670	5,820	12,700	70,636	4,670	18,128	1,362	5,735	19,797	15,718	2,000	9,025	170,261
その他	5,530	6,650	9,300	4,150	4,404	24,560	55,170	72,085	81,586	3,660	6,934	5,368	279,397
計	127,279	24,290	311,744	300,827	65,787	333,526	254,152	284,679	487,691	320,614	1,100,924	272,415	3,883,928

記 録

篠 田 聖 児

昭和五十三年度行事報告

- | | | | |
|----------|-----------------------|------------|-----------------------------------|
| 2月11~12日 | 七大戦(於東京馬事公苑) | 7月26・27日 | 馬運車積(帯広へ) |
| 26日 | 対畜大戦(於畜大) | 8月3~9日 | 第14回北日本学生馬術大会兼全日学予選
(於帯畜大) |
| 3月12日 | 対東北大学定期戦(於北大) | 19~20日 | 第25回北海道体育大会兼国体予選 |
| 16日 | 追出しコンバ(於雪印パーラー) | 22日 | 帰札 |
| 4月3~10日 | 雪割り合宿(新2・4年目) | 8月30~9月6日 | 強化合宿(2・3年目) |
| 18~23日 | 馬術講習会 | 9月22日 | 役員交代コンバ |
| 5月3日 | 第6回太秦杯・半沢杯記念馬術大会(於北大) | 9月30~10月1日 | 第3回北海道地区公認馬術大会兼全日本予選
(於岩見沢競馬場) |
| 13日 | 新歓コンバ(於中央食堂) | 10月8日 | 杜行会 |
| 21日 | 遠乗会(石狩浜) | 10~20日 | 第33回国民体育大会(於長野県) |
| 6月3~4日 | 学祭 | 11月3~5日 | 第30回全日本馬術大会(於東京馬事公苑) |
| 10~11日 | 第13回北海道自馬馬術大会(於札幌競馬場) | 7日 | 貸車積み(全日学へ) |
| 7月18~23日 | 青草合宿(3・4年目) | 11~20日 | 第21回全日本学生三大馬術大会
(於東京馬事公苑) |
| 21~28日 | 日高合宿(1年目) | 12月10日 | 激励会(於豊平館) |
| | | 23~28日 | 第1次冬季合宿 |
| | | 1月2日 | 初乗り(北海道神宮へ) |
| | | 4~9日 | 第2次冬季合宿 |

昭和 5 3 年度戦績報告

- 対畜大戦 (2月26日 於畜大)
 - ・ シニアの部 北大勝 (中島, 木村, 三好, 成田)
 - ・ ジュニアの部 北大負 (中島, 吉田, 高橋, 松岡)

- 対東北大学戦 (3月12日 於北大)
 - ・ 1年目戦 負 石黒, 篠田, 水野
 - ・ 2年目戦 負 成田, 国枝, 島村
 - ・ 3年目戦 勝 木村, 三好, 中島

- 第6回太秦杯、半沢杯記念馬術大会 (5月3日 於北大)
 - ・ 複合 (太秦杯)

				馬場減点	障害減点
1位	布施	北星乗ク	ゼファー	- 5 9	0
2位	大坂	"	テレサ	- 7 3 $\frac{2}{3}$	0
3位	中島	北大 (4)	ドンホッパー	- 7 7 $\frac{1}{3}$	- 1 0
4位	西川	北大 (3)	北 燕	- 8 0 $\frac{1}{3}$	- 1 0

 - ・ 中障害飛越競技 (半沢杯)

				減 点
1位	中島	北大 (4)	ドンホッパー	0
2位	広川	岩見沢乗ク	隆 孝	0
3位	佐藤	フロンティア乗ク	チャンピオンシップ	- 4

 - ・ 小障害

				減 点
1位	投石	岩見沢乗ク	隆 孝	0
2位	関田	"	"	0
3位	喜多	フロンティア乗ク	ノーザンクロス	0
5位	高橋	北大 (2)	ドンホッパー	0
9位	成田	北大 (3)	スターライト	0
12位	三好	北大 (4)	北 楽 院	0
	木村	北大 (4)	羊 蹄	- 6. 5
	棄権 中島	北大 (3)	ハイエイム	

○ 第13回北海道自馬馬術大会 (6月10・11日 於札幌競馬場)

● 総合馬場馬術				得点
1位	布施	北星乗ク	ゼファー	261
2位	国島	帯畜大(3)	柏勝	260
3位	吉崎	フロンティア乗ク	スターフロンティア	259
	島村	北大(3)	疾風	180
	三好	北大(4)	天龍山	176

● 中障A				減点
1位	布施	北星乗ク	ゼファー	0 (バラージュ 満点)
2位	成田	北大(3)	スターライト	0 (" -4)
3位	谷	北星乗ク	テレサ	0 (" -4)
	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	-16

● 初心者障害				減点
1位	松尾	フロンティア乗ク	ノーザンクロス	0
2位	松尾	フロンティア乗ク	スターフロンティア	0
3位	朝妻	札幌競馬場	ウルチャン	0
	北畑	北大(2)	ドン・ホッパー	-4

● パルクール				タイム
1位	斉藤	旭川乗ク	アサヒクイン	74"6
2位	三枝	帯畜大	月光	74"8
3位	国島	帯畜大	柏勝	75"3
6位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	76"4

● 選抜障害				減点
1位	谷	北星乗ク	テレサ	0 (バラージュ 3回-4)
2位	吉崎	フロンティア乗ク	スターフロンティア	0 (" -19)
3位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	0 (バラージュ 2回-12)
"	荻野	札幌競馬場	ウルチャン	0 (" ")

				減点
• 中障B				
1位	竹下	帯畜大	柏 誓	0 (バラージュ 満点)
2位	大清水	"	柏 美	0 (" ")
3位	佐々木	フロンティア乗ク	チャンピオンシップ	0 (" -4)
7位	三好	北大(4)	北楽院	0 (" -16)
	島村	北大(3)	疾 風	-4
失権	木村	北大(4)	羊 蹄	
失権	中島	北大(3)	ハイエイム	
失権	三好	北大(4)	天龍山	

○ 第14回北日本学生馬術大会 (8月3~9日 於帯畜大)

				第一走行減点	第二走行
• 中障害					
1位	小野寺	帯畜大(4)	柏 栄	0	0
2位	成田	北大(3)	スターライト	-8	0
3位	風間	北里大(4)	トレント	-20	-8
4位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	-8	-23.25
8位	西川	北大(3)	北 燕	-33.25	-25.25
10位	三好	北大(4)	北楽院	-32	-40
12位	島村	北大(3)	疾 風	失権	-28.25
失権	吉田	北大(3)	北 美		
失権	三好	北大(4)	天龍山		
棄権	中島	北大(3)	ハイエイム		

				調教	耐久	余力	総減点
• 総合							
1位	藤原	帯畜大(4)	拍 勝	-139 ½	0	-10	-149 ½
2位	三枝	帯畜大(3)	月 光	-160 ⅔	0	-20	-180 ⅔
3位	石原	東北大(4)	金 太 郎	-166 ½	-20	-10	-196 ½
4位	島村	北大(3)	疾 風	-172 ⅓	-20	-10	-202 ⅓
6位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	-174 ⅓	-60	-20	-254 ⅓
9位	西川	北大(3)	北 燕	-164 ⅓	-116.8	-20	-301 ⅓
失権	吉田	北大(3)	北 美	-181 ⅔	-140	失権	
失権	三好	北大(4)	天龍山	-163 ⅔	失権	-70	
失権	木村	北大(4)	羊 蹄	-167 ⅓	失権	失権	

• B障害				減点
1位	麻野	北星大(3)	ブラックボニー	- 7 (バラージュ - 4)
2位	高橋	北大(2)	ドン・ホッパー	- 7 (バラージュ - 4)
3位	佐藤	帯畜大(2)	月光	- 8
失権	国枝	北大(3)	北燕	
失権	石黒	北大(2)	疾風	
失権	松岡	北大(2)	スターライト	

• 選手権

男子	1位	国島	帯畜大(3)
	2位	皆川	福島大(3)
	3位	大清水	帯畜大(3)
		中畠	北大(4)
		成田	北大(3)
女子	1位	小野寺	帯畜大(4)
	2位	吉田	北大(3)
	3位	風間	北里大(4)
		木村	北大(4)

団体成績

中障害	2位
総合	2位
3種目総合	3位

<全日学への出場権利獲得馬>

- 障害
 - スターライト
 - ドン・ホッパー
 - 北燕
 - 北楽院
 - 疾風
- 総合
 - ドン・ホッパー
 - 北燕
 - 疾風

○ 第25回北海道体育大会

兼第33回国民体育大会馬術競技会北海道地区予選 (8月19・20日 於帯畜大)

成年総合				調教	耐久	余力	合計
1位	国島	帯畜大(3)	大雪	-140%	-6	-30	-176%
2位	藤原	帯畜大(4)	柏勝	-134%	-37%	-10	-181 $\frac{11}{30}$
3位	三枝	帯畜大(3)	月光	-149%	-20%	-20	-190%
8位	島村	北大(3)	疾風	-180%	-38%	-70	-289 $\frac{2}{15}$
失権	木村	北大(4)	羊蹄	-172%	失権		

小障害				減点
1位	松浦	北星乗ク	テレサ	0
2位	水野	北大(2)	スターライト	0
#	田村	十勝柏友会	チューミーザ	0
8位	山川	北大	北姫	-3
	矢田	北大	北将	-11

・ 壮年馬場

1位	小野	フロンティア乗ク	ドント
5位	半沢	北大同好会	ドン・ホッパー
8位	岡田	北大同好会	天龍山

成年障害				減点
1位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	-4
2位	島村	北大(3)	疾風	-5.75
3位	谷	北星乗ク	テレサ	-6
4位	成田	北大(3)	スターライト	-8
#	長屋	北星乗ク	シャンケ	-8
#	吉崎	フロンティア乗ク	スターフロンティア	-8

<国体への出場権利獲得人馬>

ドン・ホッパー 中島(4)
予備馬 疾風 島村(3)

○ 第3回日本馬術連盟公認北海道地区馬術大会 (9月30・10月1日 於岩見沢競馬場)

複合		調教		障害		計
1位	菅波	帯畜大(4)	柏 栄	-100 $\frac{5}{6}$	-14	-114 $\frac{5}{6}$
2位	萩野	札幌競馬場	ウルチャン	-91	-32.75	-123 $\frac{3}{4}$
3位	広川	岩見沢乗ク	隆 孝	-102 $\frac{5}{6}$	-30	-132 $\frac{5}{6}$
	西川	北大(3)	北 燕		-26	
失権	木村	北大(4)	羊 蹄			失 権

小障害				減 点
1位	大久保	碧雲乗ク	サラトガ	0
2位	橋本	酪農大(1)	騾 臣	0
3位	綾部	帯畜大(2)	月 光	0
5位	篠田	北大(2)	ドン・ホッパー	0
	北畑	北大(2)	北 燕	-18
棄権	国枝	北大(3)	北 姫	途中棄権

パルクール・ド・ジャス				減点(秒)
1位	広川	岩見沢乗ク	隆 孝	134
2位	鷺田	碧雲乗ク	サラトガ	147
3位	萩野	札幌競馬場	ウルチャン	154
7位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	204

標準中障害				減 点
1位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	0
2位	菅浪	帯畜大(4)	柏 栄	-0.5
3位	勝	酪農大(3)	騾 鷺	-8
失権	成田	北大(3)	スターライト	

大障害B				減 点
1位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	-0.25
2位	広川	岩見沢乗ク	隆 孝	-4
3位	布施	北星乗ク	ゼファー	-8

・ 関門飛越				タイム
1位	折橋	北大(1)	北燕	1'11"0
2位	渡辺	十勝柏友会	清駟	1'11"2
3位	井上(淳)	北大(1)	北燕	1'15"4

<全日本への出場権利獲得人馬>

ドン・ホッパー 中島(4)

- 第14回全日本学生馬術選手権大会 (9月29～10月1日 於東京馬事公苑)

女子 吉田 北大(3) 参加

- 第33回国民体育大会 (10月16日～19日 於長野馬術競技場)

・ 成年障害				減点
1位	金子	長野	千曲	0 (パラージュ 満点)
2位	今井	静岡	スモールタイム	0 (# #)
3位	吉村	福井	ベンハー	0 (# #)
14位	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	-4

・ 国体		減点
1位	長野	0
2位	茨木	0
3位	宮崎	-4
6位	北海道	-8.5 (中島 ドン・ホッパー、谷 テレサ)

・ 成年六段				cm
1位	吉本	福岡	テルヨシ	
1位	池	茨城	アレキサンダー	
1位	小柳	長野	アズマ	
	中島	北大(4)	ドン・ホッパー	160cm

○ 第30回全日本馬術大会 (11月3日～5日 於東京馬事公苑)

			減点
1位	宮崎 栄喜	トカチライデン	0 (パラージュ 満点)
2位	広田 祥二	クラッカージャック	0 (" ")
3位	金子 政夫	千 曲	0 (" ")
7位	中島 孝幸(北大)	ドン・ホッパー	0 (" ")

			タイム
1位	宮崎 栄喜	ファーストカッシュ	84"4
2位	上野 明秀	スズ・ドクター	88"2
3位	豊田 一夫	ハナコ	90"5
9位	中島 孝幸(北大)	ドン・ホッパー	103"3

			減点
1位	諸岡 徹	ムネヒサ	0
3位	中島 孝幸(北大)	ドン・ホッパー	0

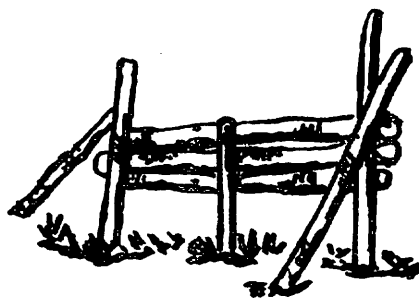
○ 第21回全日本学生馬術三大競技大会

			第1走行	第2走行	総減点
1位	上野 日大(4)	スズドクター	0	0	0 (パラージュ 満点)
2位	古賀 日大(4)	ジャンヌダーク	0	0	0 (" -3)
3位	藤田 福井工大(4)	第二九頭竜	0	0	0 (" -11)
5位	中島 北大(4)	ドン・ホッパー	-4	0	-4
48位	西川 北大(3)	北 燕	-23.5	-16	-39.5
49位	三好 北大(4)	北 楽院	-12	-28	-40
失権	島村 北大(3)	疾 風	失権	失権	
失権	成田 北大(3)	スターライト	失権	失権	

・ 障害団付

1位	日 大	2位	京都産業大学	3位	関西大学
8位	北海道大学				

• 総合			調教	耐久	余力	総減点	
1位	諸岡(徹)	日大(3)	ムネヒサ	-144 $\frac{2}{3}$	0	0	-144 $\frac{2}{3}$
2位	諸岡(慶)	日大(4)	志都桜	-154	-5.8	-10	-169.8
3位	小林	専修大(3)	専照	-149	-6	-20	-175
10位	中畠	北大(4)	ドン・ホッパー	-204 $\frac{2}{3}$	0	0	-204 $\frac{2}{3}$
29位	西川	北大(3)	北燕	-215 $\frac{1}{3}$	-212.4	-10	-437 $\frac{14}{15}$



国体観戦記

10月16〜19日 於長野馬術競技場

ドン・ホッパー 中 島 孝 幸 (4)

高 橋 均

信濃の国、長野の国体会場に馬運車が落ち着いたのは、まだ朝の気配が感じられない三時過ぎだった。札幌から実に三十数時間、ドン・ホッパーと畜大の大雪の二頭にとって、わらとほろにまみれた不快な生活を送り、やっと馬にとっても、我々人間にとっても、不安定な揺れる狭い箱から解放されようとした。しかし、時間的に早かった為、会場の係の人たちはまだ寝ていて、その人たちが起きてくるまで、しばらくの間、そのままの状態だった。

朝もすっかり明け、入厩手続きもすませ、広島県について北海道のこの二頭は、二番目にこの国体の為に作られた仮設の馬房に入った。この国体会場は、長野駅の南二キロメートル程に位置し、犀川の河原に作られ、広々として気持ちのいい所である。信州だけあって、ほぼ四方を山に囲まれ、秋の日ざしに少し暑ささえ感じた。ドン・ホッパーや大雪の寒さを増す北海道の気候にあわせようのびてきた冬毛も、ここへ来て逆に、夏毛にもどるのではないかと思われた。しかし、日中こそ暖かいが、朝晩の冷え込みは山だけに結構きびしく、北海道を除く各都府県の馬房の前にはシートでおおいかけ、寒さを防いでいた。その点、北海道勢はこの寒さはたいしたことはないということで、何も暖をとることはしなかった。実を


いうと、馬匹の我々が面倒くさがってやらなかったのである。沖繩を除く各地から、百三十頭余りの馬が一堂に集まると、なかなかぎやかなものである。必ずしも優秀な馬ばかりでなく、中には参加することに意義あり、として来た馬も少なからずいたであろう。

競技の方は、第一日目は成年障害と総合調教審査。二日目は総合耐久、三日目は同余力、最終の四日目が六段飛越競技だったが、ドンは成年障害で惜しいかな水壕で、わずかに着地板にふれ、減点四だった。六段では百五十五センチメートル完飛、百六十センチメートルでは、四つ目の百四十を落下してしまった。六段は出場頭数が多く、一度出てから次に出るまでの時間が長く、人馬共に疲れたようだった。この国体にはオリンピッククラスの人馬は参加していなかったし、また全日本で活躍している人馬がいても、ドンの準備などあまり見ることができなかったので残念だった。

国体での印象としては、馬術の試合ではほとんどいない観客が多かったことである。近くの小中学生や住民が動員されて盛りあげてくれたのだが、あのくらい観客がいると実に選手としても、はりあがあるのではないだろうか。一人の選手が入場するたび、ゴールするたびに拍手がおこる。小学生の集団などは、一回一回、障害をクリアすれば拍手と歓声、落下や拒否でもしようものならため息といった実ににぎやか(いい意味で)なのである。もっとも、この騒がしさでびびった馬もいたが……。やはりこのくらいの声援や拍手のもとで経路をまわれたら、実に気持ちのいいものだろう。でも馬術の場合は、静かに見るスポーツなのかな？

河原に作られた会場だけあって、ステイブルコースも土手の上から見えて、普通のステイブル競技では一部しか見れないのだが、ほとんどの障害を飛越通過するのが見ることができ楽しかった。そ

れにしても馬術は実に金のかかるものである。競技場も新たに作らねばならないし、良い高い馬も買わねばならない。今回は地元長野の匠勝という感じだったが、やはり馬術に関しては、国体はお祭りである。また、それでいいと思う。



百年の歴史は、また日本の生命保険業の歴史でもあります。

生命保険の草分け安田生命を、つづけてお引立てねがいます。

第2世紀へむかってステップ・バイ・ステップ

安田生命
●本社＝東京新宿駅西口正面

創業明治13年

第30回全日本馬術大会

11月3～5 於東京馬事公苑
ドン・ホッパー 中 島 孝 幸 (4)

石 黒 直 秀

11月の3・4・5日の3日間、馬事公苑に於いて第30回全日本馬術大会が開かれた。

普通ならこの大会は選手と馬匹以外は札幌で練習のため観戦できないところなのだが、ちょっとした用事があったり東京に来ていたの、馬匹に追われる事もなく一般観客のようにゆっくり観戦でき、なかなか楽しい思いをした。

いや、さすがに全日本だけあって学生の試合とはちょっと違う。ちょっと違うというのは中障害とか、パルクールBとかのことであって大障害とかグランプリとかになるとちょっとでは済まない。えらい違いである。なにしろ馬が人の頭の上を飛びかかり、速歩をしても前に進まなかったりするのである。

グランプリ競技を初めて目にしたが、いや啞然としてしまった。ため息が出るばかりだ。はあ、なるほどこれが噂に聞くパッサージュか、あつこれが歩毎の踏歩変換ってやつかあ、馬が踊ってるじゃあないか………てなものである。

大障害Aも鮮烈に記憶に残っている。高さ150固定障害や160のオクサーはさすがに迫力がある。しかも飛んでく馬も、どこかで開いた事のある有名な馬ばかりであつてはもう胸が高なつてしまふ。

馬も学生の馬とは馬格が違う。あのドンが貧相に見えてしまった仕方がない。大障Aで優勝したフィンクなどは地響きをたてて駆けて行く。ミスターコートとかフロリアンとか本当に魅力たっぷり馬ばかりでよだれが出そうになる。

さて試合の方であるが、今年は杉谷乗馬クラブの人馬が全て棄権することになってしまい、杉谷さんも小畑さんも見られず、マンハッタン、メリーメリー、アミーゴ等有名な馬が何頭も出場しなかった。残念である。杉谷さん、小畑さんが出ないとなるともう竹田選手のみ一人舞台みたいなので、予想通り大障A・B共に竹田選手が優勝した。

我がらがドン・ホッパーと中島兄は中障害、バルクールB・コンソレーション競技と出場したのだが、中障7位、バルクール9位、そしてコンソレーションでは3位であった。特筆すべきはパラージュも合わせて5回走行中、一落もしなかった事である。一落もしないのに7位とか9位とかなのは不思議だがなにしろ他の馬がめちゃくちゃ速いのである。普段ドンはスライドが長いため、ゆっくり走っているように見えて結構早いタイムを出す。そのドンが必死に走っているから、こりゃかなり速いなと思ったのだが他の馬はさらに速いのである。ハイエイムが駆け回るような走行でしかも障害を落とさないといった感じである。パラージュの時やバルクール等では、もう目いっぱい走り回っているようで、あれでは障害をぶち壊していくだろうと思うのに、そこはやはり人間がうまいのか馬がそれでも落とさないようにできてくるのか満点で帰って来てしまう。障害を飛んだら十分詰めて、スムーズに回転して、向かったら伸ばして、突進しようとするのを詰めて………そういった事を頭に思い浮かべて想像していた走行とはかなり違っていて驚いた。

とにかく、そういったレベルの高い試合で、多くの外国産馬を含むレベルの高い馬達に混ざってドン・ホッパーが健闘している……さすがにドン・ホッパーだけあるなあとドンを頼もしく思う気持ちと、北大の誇る名馬ドンでさえおいそれと勝てないのかと悔しい気持ちとが交錯しておりました。

(なんか、全日本大会の模様を書くというより、観戦した感想文となってしまうた)

株式会社平田金物店

札幌市北区北十八条西四丁目

TEL 七四二一七六一六

FAX 七一一七五三六・九九五五

第21回全日本学生馬術大会

11月11〜20日

於東京馬事公苑

さよさよ、一年の総決算、我々の最大の目標とする全日学がやってきた。今回、北大からは、五人五頭の人馬を送り込んだ。

十一月十一日、各校の校旗がはためく中、我北大駿馬五頭は、堂々の行進といたいところだったが、貨車の到着が遅れて、開会式に間に合ったのは北燕だけ。全日本から入既していたドン・ホッパーとあわせて、二頭だけの寂しい行進となった。翌日から本格的に騎乗を始めたが、入厩が遅れたせいもあってか、各馬とも落着きがなく、イモを洗うように混雑する練習馬場で、皆、思うような練習ができない様子だった。その中で、ドン・ホッパーは、さすがに安定した踏み切りを見せ、絶好調をうかがわせていたのは唯一のなくさめであった。

さて、本番。十五日、障害第一走行。北大のトップは21番、北衆院。人馬共、初めての大舞台。騎手は下見で足がすくみ、馬も、浮足立っているが、障害に向ければ、注意深く飛越していく。第四垂直は、一、二、三のかけ声とびったり合りも、落下。第十竹柵、騎手が遅れて、落下。第十一トラケーン、騎座変をおこし、押せないながらも、速歩で通過。場内がどっと沸くのが耳に届く。第十三水濼、着水し、三落でゴール。減点十二。退場して、中島と成田が笑顔で駆け寄ってきて、初めて我に帰る。続いて、52番、疾風。馬が出ていない。彼独特の力強いダイナミックな飛越になっていない。第六、芝かまぼこ落下のあと、第八、トリプルで、破錠がやっつく

る、b、拒止の後、二回目、bを飛越後、なんと落馬。三回目、跨ぐようにして、ようやくと通過。その後も、調子に乗りきれず、最終。十四番の斜め三段で、惜しくも失権。三番手は、76番、北燕。矢田兄の時には、ついにやってこれなかった、馬事公苑にも、なにかと怪我の多い人馬（とくに人間）だが、実にあっけらかんと、やってきた。西川は、三年目ながらも、どこか人を食った雰囲気を持って騎乗、（本人の言とはかなり異なるのだが。）第三、ツイタテ三段、拒止。第四、第八a、c、落下、第十一、拒止ながらも帰ってくる。減点二三・五。とにかくよく帰ってきてくれた。御苦労さん、ツバメ君。

そしていよいよ、四番手、94番には、前年度優勝のスターライト。観客の注目は、いやが応でも集まる。しかし、成田はやはり三年目。直前の岩見沢での失権のショックもあってか、かなり堅くなっている模様。馬も障害に向かってからの伸びがない。第七、八a、十の拒止で、失権。観客は、大きくどよめく。北大の面々は意気消沈。天国と地獄を見たような気がした。

こうなると、どうしても皆の期待が集まるのは、中島騎乗のドン・ホッパー。団体、全日本を通して、減点は水濼着水だけという、好成績。しかし、その水濼に夢は消え去ったのだが。出場番号、103番。踏み切りも、びたり合り。誘導も正確だ。イケル。第十一まで無過失。しかし、水濼はクリヤーしたかに見えたが、無情にも落下の旗が上がる。どうやら後肢のしかも片足が入ったらしい。残念！結局、減点四。一日目を終って、満点馬は六頭。中島は十位。北大は八位と全くの不振だった。

気をとりなおして二日目。疾風、スターライトとも、泥沼から抜けだせず、失権。人馬とも精彩がない。50番、北燕。馬を、よく前

に出している。四落でゴール。69番、北楽院。準備運動では、信じられないぐらい、調子が良い。しかし、結果は七落。前日とは違って、馬が障害を気にしないで飛越していくことが裏目で、雑な走行になってしまった。

上位陣は、テレビ中継にあわせて、一休みした後の午後から、我がドン・ホッパーは、95番。前日に、一落以下が十二人。その中でも、二日目に落下して、けっこう脱落していくものが多い。満点なら、まだ可能性はある。皆、固唾をのんで見守った。流れるような走行で満点。タイムもいい。あとは他力本願。しかし、ジャンヌダーク（日大）、第二九頭竜（福井工大）、スズドクター（日大）が、満点を出して、三位入賞は逸し、結局五位。団体も八位に終わった。年々レベルの向上には、目を見はるものがあり、特に日大の団体、二日間で減点を食ったのは、ムネヒサ一頭だけの減点十三・二五には、恐れ入った。

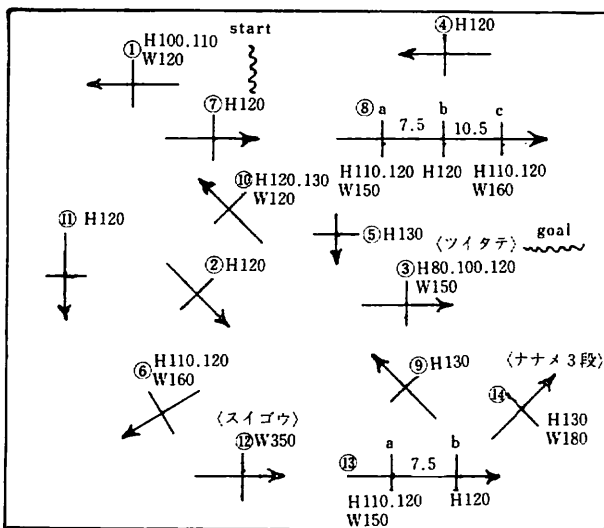
さて、ひき続き、十八日からは、総合馬術が開始された。北大からは、疾風、北燕、ドン・ホッパーの三頭が、出場の予定であったが、疾風が肢の故障により欠場。結局、北燕、ドン・ホッパーの二頭の出場となり、残念ながら、団体を組むことはできなかった。しかし、その為にかえて、西川、中島両君とも、のびのびと試合に臨む様子を感じとれた。十八日、馬場。両選手とも、不慣れな感じがあり、ありありと感じられる演技で、参加約七十頭の中で、下から十頭に入る成績であった。それでも、障害で本領を発揮せんと、十九日の野外走行に臨む。北燕の西川は、水壕中で転倒しながらも、よく健闘してゴール。ドン・ホッパーの中島は、落ち着いた走行をみせ、減点ゼロ。翌日の余力も、両馬とも、無難な走行で、結局、ドン・ホッパーが、十位にたかろうじて入賞することができた。一位は、

日大のムネヒサ。耐久、余力とも満点であったのは、ムネヒサとドン・ホッパーだけであったが、馬場の成績だけで、一位と十位の差となったのは象徴的であった。

さて、二十日の閉会式の後、東京OB会の皆さんが、懇親会を開いて下さいました。試合の期間中から、何人もの方々が激励に来て下さったのには、大変、力づけられていましたが、成績が、もう一つだったので、申し訳ない気持ちがありました。失礼ながら、この場を借りてお礼を陳し上げると共に、今後伴、なお一層の御声援をお願いいたします。

文責 K・M & T・N

中 障 害 経 路 図



七 帝 戦 於京都大学

西川 理一(3) 高橋 均(2)
島村 努(3)

西 川 理 一

京都大学で行なわれた七帝戦において、最初ほくらは二課を予戦でやるというので、これにかなり反対しました。不断まるでやっていないことを予戦でやるなんて最初から五、六位が決定しているようなものだと思っただからです。しかし、まあ何事も経験だと思っただけにしました。京都へ行く前に、一応三人でフロンティア乗馬クラブで谷口さんに二課目を一日だけ見てもらいましたが、経路違反をしないためにやったようなものでした。フェリーで京都に着いた日、時間があったので清水寺へ行き、のんびりとおみくじをひいてみたところ、僕と高橋が大吉で、島村が凶と出て、馬場が大のながての島村はいやいな顔をしていました。

一日目、予戦リーグ。僕らはまず名古屋大学とあたり、二年目の高橋がなんと相手に五十点の大差をつけ、総計六八九VS六六六で驚いたことに勝ってしまったのです。東大には負けはしたものの、これで敗者復活戦に出れることになり、僕と島村は高橋に感謝しきり、次の日の試合にそなえました。

二日目、敗者復活戦ではAリーグで二位になった去年の優勝校、東北大とあたりました。メンバーは北日本同士ということで顔見知りの奴ばかり、割と落ち着いて試合に臨めましたが、障碍ということと、せっかくながかりこんできたチャンスだということ、なんとか勝って決勝リーグに出たいとこへきて急に欲が出てきました。

試合は島村と高橋が無過失、向こうの二人が各々一落下でいけそうだったところ、僕がブケファロスという馬でひっかけられ、二落しましたが、東北の最後の奴も一落し、とうとう決勝リーグにも出れるようになりました。人間というのは現金なもので、ここまできたら優勝も夢じゃないと思ひ、三人でなんとかやりたいなあと思ひました。

しかし、最初に当った京大戦で秀驪という馬で島村が三反抗失権し、向こうの主将久岡が帰ってきたので大差で負けました。第二試合の京大VS東大では両校一人ずつ経路違反を出し、結局東大が勝ち、最後の試合で東大が勝てば優勝するというところで、京大は北大に何とか勝たせたいと北大を応援するという場面もありました。僕らも予戦では負けているので、障碍ではなんとか勝ってやろうと最後の試合に臨みました。結果は東大にまた経路違反があり、大差で北大が勝って、三校が一勝一敗だったので、北大は食い数で京大に負け、東大とは食い数は同じだったので、満点の数で劣り、結局三位になりました。

しかしまあ、六位のつもりで来て、優勝戦線に参加ができたし。六校中一番多く試合が出来、それに、なんと僕が最優秀選手に選ばれたり、貸与馬とはいえ、参加した価値がそれなりにあったんじゃないかと思ひました。



成人病保険のバイオニア

協栄生命株

北海道団体支社

札幌市中央区北大通り西九丁目
TEL二六一・二三四一

医薬品卸



ホシ伊藤株式会社

本店 札幌市南八条西十四丁目一三九七番地
支店 帯広・釧路・北見・函館・旭川・滝川
室蘭・苫小牧・岩見沢

春は空、夏は緑、秋は海
冬は銀世界

フロンティア乗馬クラブ

支配人 谷口 健一

馬場 厚田村しっぷ165-3 01336-6-3858

営業所 北区北6条西6丁目 フロンティア
711-9427

馬と風と広い自然

調教報告

スターライト号調教報告

牝 ア・ア 栗毛

昭和41年4月4日

沙流郡門別町産

父 トモスベ

母 銘乾

体重 496 Kg

成 田 慎 二

まず初めに、騎手の技術の未熟・精神的弱さから、昨年不本意な成績だった事を口惜しいと思いと共に、応援・アドバイス等をして下さった長屋さんを始めとするOBの方々にお詫び申し上げます。そして何よりも、彼女自身一生懸命やったにもかかわらず『汚名』をさせられ、何の弁解もできずにいるスターライトには心からすまなく思っています。

さて、この一年間を振り返ってみると、初めに感じた事は、馬がかつてに走る事です。常歩の時には、停止・発進・歩度伸縮・回転等、素直にかつスムーズな移行ができるのですが、速歩になると発進と同時にパッと走られてしまい、沈静した速歩というのは冬期間ほとんどできませんでした。原因としては、足場が悪い事もありま

すが、騎手の拳の堅さと、バランスの悪さからくる不安定な騎座も大きな要因です。興奮させない様に静かに乗ろうとするため、尻を完全に浮かして前傾過度になり、かえって馬をあせらせる事になってしまいました。

春になると、速歩では中間速歩の維持ぐらいまでできる様になったのですが、脚を静かに使う様にしていたため、脚にだんだん鈍感になり、騎手は脚をただ動かしているだけで馬はかつてに動いている状態でした。試合のシーズンも直前という事で何とか障害を飛べる段階にしなければと騎手があせり、目先の事しか考えられなかったのは、大失敗でした。障害が入ってくると、向けた途端に突進していき、また駈歩では突っ走られ自分の思いどおりにはいきませんでした。できるだけ丁寧に乗ろうとして、馬との衝突を回避し、騎手が馬に気おくれしていたため、だんだん馬がわがままになってきました。長屋さんが騎乗して素直に動くのだから、自分が乗って馬が言う事をきかないのを怒るのは、馬に八当りするに過ぎないと思

い、運動は、自分のできる範囲で簡単な事に限りました。この結果運動が単調になり、馬をイライラさせ、緊張の持続という事がむしろかしくなってきました。

試合シーズンになると新たな問題が次々とでてきました。結果は戦績の頁をご参照していただくとしてここでは省略させていただきます。試合になって、初めて準備運動のむずかしさを痛切に感じました。準備馬場に入る前に曳き馬、外乗りを一時間行っただけですが、準備馬場に入った途端馬が変わってしまいました。ある程度の興奮は予想していたのですが、とにかく常歩にならないのは困りました。休めにしたらすぐ走られてしまう、沈静運動をやるうとしても走られ、とても試合に望む状態にはできませんでした。半沢杯、

道自馬は、初めだから、試合になつたら先聲のスターライトにまかせようという開きなかりができましたが、それ以後の試合では、何とかしようと思つてもできない事が試合の時、馬への不信感となり馬にしてみれば、頼るべき騎手が上でオタオタしているのです、なおさら不安になるという人馬間の信頼関係が全くなかつた事が、失敗した原因であり、試合にも悔いが残りました。そして推進不足。これはどの試合においても、そうであり、経路走行中は走りまわり、障害前でつまるパターンで、スターライト本来の流れる様な走行は全くできませんでした。これは、試合以外では、興奮するため駈歩をほとんどやらなかつたという練習不足によって、スピード感覚が悪い事。スタート前に走られて、回転の事だけを考え、脚をおろすかにして手綱だけを引いていた事。特に目の前の障害を飛ぶ前に、次の障害の誘導のための減脚の事を考えていたのは、人間の試合に對する甘さ以外の何ものでもないと思います。一個一個障害を確実に飛ばせるという基本的な事の重大性を再認識しました。この事を考えたのは公認大会でした。この試合の時には、準備運動の時興奮して走られっぱなしだったので待機馬場では、とにかく落ち着かせる事だけを考え、常歩と停止を徹底的にやりました。落ち着かせる事はできたのですが、試合に向けて緊張をつくるというのではなく、馬をボケさせただけだったので、入場するといつものパターンでした。ところが、第四の衝立三段に向かった時、つまるというより、直前で止まる様な感じになり慌てて拍車を入れ、飛んだと思つた次の瞬間ガツンという衝撃と共に馬転してしまいました。馬がロウソク飛びをして中のある衝立の真上に落ちたのでした。夢中で飛び乗つたのですが途中で跛行しているのに気がつき、次の障害への注意が散漫になり何となくきられてしまいました。後の障害は全て馬が

恐がっているのを拍車で飛ばせた感じで、特に水濂は一度止まつたのを無理矢理水の中に入れて通過しました。そして第十二障害のダブルのBのカマボコバーで2拒止して失権。薬にしては、あまりにもショックが大き過ぎるものでした。全日学まであと一カ月半しかなく、あせりや不安・責任が大きいのしかかつてきました。跛行はなおるだろうか、障害を恐がっているのをどうするか、準備運動はできるだろうか等。結局、この問題を全てかかえたまま東京へ行く事になりました。

馬事公苑に馬が着いたのは、10日で開会式の直前でした。長い貨車積で肢が腫れていたのと、着いたばかりで興奮気味だったので、スターライトだけ開会式に出ないでかこうと思つていたのですが、周囲の馬が次々といなくなつていくと興奮は絶頂に達し、馬房の中でぐるぐる回つては立ち止まっていななき、返事がないとわかるとまた歩き回るといった状態で、馬房の中の僕には見向きもしくなく、不安が増大しました。試合までの練習は、他大学と合同だったのでさながら試合の準備馬場にいる様でほとんど練習らしいものはできず、とにかくこういう雰囲気慣らそうとしました。うまくいきませんでした。色々な不安、他大学の前年度優勝したスターライトへの視線、そういったものから逃げだしたいという気持ちを酒の力でかろうじて追いやり試合への心の準備をしました。第一走行は、一発やっつてやろうと思ひ、とにかく馬を前にだしまくってひっかけられてでも帰つてこよう、それだけを考えました。少し大きめに回り、めいっばいだしてスタート。第一第二通過。第三はあの衝立。多少つまり気味で通過、第四、第五と進むにつれ、だんだん歩度が落ちてきました。第六のレンガは回転しきれずに斜めに向けて拒止。観客席からワーッと声が聞こえたけれども、あがらずにわりと冷静

に向けなおしてなんとか通過。直線上にすぐ第七のトリプルがありだしきれずに二拒止目。もう後がないと思ひ、とにかく脚を使う事だけを考へ通過。第七、第八とスピードに乗りながら通過。左へ鋭角回転して第九へ向かおうとして向けきれずに拒止、失権。悔しいという気持ちと、もう一日あるんだという気持ちが入りまじって、何も考へる事ができませんでした。二日目は長屋さんが応援にかけつけてこられて、精神的に少し楽になり、鞭を持って試合に望む事になりました。馬なりに出さずにゆっくりとしたペースで回り、障害前で強くおすというアドバイスをいたたいたのですが、馬が手の内に入りきらずに、昨日飛んだはずの第四の白箱で三拒止失権。

スターライトに乗ったこの一年間、一体自分は何をやったのだろう。とにかくできない事だらけで、失敗も多かつたし、様々な体験もしました。昨年の苦渋をかみしめ、経験を生かして最後の一年を頑張ろうと思ひます。

羊蹄号調教報告

牝 ア・ア 鹿毛

昭和42年3月4日生

音更町十勝種畜牧場産

父 サラ ハマテッソ

母 ア・ア 久亭

体重 472 Kg

羊蹄との一年をふりかえって

木 村 憲 子

昨年の一月、羊蹄のチーフと決まってから、もう一年三カ月もの月日が経ってしまいました。羊蹄との一年を顧みるとは、頭のボケにもさることながら、哀しく辛いことですが、今後羊蹄に跨る人にならずかながらも参考になればと思ひ、ペンを取りました。一年間の羊蹄との失敗の記録の中、教えて戴いたこと、乗って見て感じたことを書いていこうと思ひます。

羊子との試合は、半沢杯・小障をもって始まりました。結果は、第二オクサー一反抗とタイムオーバーによる減点でしたが、北大の馬場で行なわれた試合であり、ゴールしたことはうれしかったのですが、問題を多く残された思ひでした。それ以前に行なわれた部内での四回の経路走行で、それまで以上に羊蹄を理解できなくなりました。六月十日、十一日の道自馬の初心者・中障Bに出しましたが、

いずれも失権。七月二十三日、フロンティア乗馬クラブでの二・五キロのクロスカントリーでは、一拒止。八月六・七日の北日本学生馬術大会の総合の耐久審査で、第十七障害乾壕飛び込み閉鎖で三反抗失権。八月十八日・十九日の道体、総合耐久審査で第六障害トラケーンで三拒止失権。九月三十日、十月一日の公認大会の複合で、障害で第二障害で失権。数々の失権を繰り返してしまつたことは、クラブに対して、そして羊子に済まないという気持ちで一杯です。試合上の技術が不足していたことはもちろんですが、それまでの練習について反省することが多々あります。羊子に乗れば乗る程わからなくなつてしまつたというのが本音で、騎手の迷い、疑問がそのまま試合に現れました。その反省に基づいて少し書いていこうと思つます。

先づ、私の一番の課題は、羊子の口への追従であり、軽い接触でした。巻き込む状態を最も恐れました。最初のうちは、悪い拳で逆鞭を持ち、貧弱な脚での推進を持って、頭頭の伸展を求めました。しかし、それでは不十分な推進で下げさせようとするので、彼女は拳に不信を持つばかりでした。羊子との初めての経路走行は、馬に疾走され、飛越で騎手が右に傾くという悪癖のため、回転が、不充分になり、その後の障害で拒止されました。二回目の経路走行は、飛越後すぐ押えることよつて、帰つて来ることができずました。しかし、その後の反省は、無理に押えつるのではなく、脚でスムーズに減脚することでした。馬口とは軽い接触を保ちながら、障害への落ち着いたアプローチであり、飛越後の減脚でした。半沢杯二週間前の経路走行では、計画性の欠如と障害練習の不足、騎坐不安定、脚不足により、ダブル（ドラムバー・ツイタテ二段）にて三反抗。一週間前の経路走行は、騎手のミスにより一卷乗。そして半

沢杯の小障にて、一反抗とタイムオーバー。ここまで馬口は、騎手との踏け引きの場であつたと思つます。道自馬の失権以後、不十分な推進で強く受けようとして、結局、馬をイラツさせるだけに終わりました。そういった反省に基づき、馬口とは軽く接触してやることに心懸けました。馬口との軽い接触を保ちながら、動きを軽快にさせてやることでした。その上での運動課題を行ない、その中でレベルを上げていくべきだと思つました。先づ、彼女の口への軽い追従が先決だと思つました。彼女の障害反抗は、騎手の技術不足はもちろんですが、障害への恐怖感と障害判断力の不足にあると思つます。彼女の場合、障害前後で疾走する癖があるわけですが、これを押える技術以前に、不断の練習でより多くの障害を判断させること。つまり種々の低障害を通過させることに繋ります。それが、軽い接触でできるように、気長に騎手は馬と共に練習すべきだと思つます。急激な口への jerk を嫌うわけですから、脚が伴わずして飛越後すぐ彼女をおさえることは、避けるべきです。スムーズな減却、歩度伸縮の練習だけでなく、障害への恐怖心の除去と判断力をつけることを考えるべきです。私は、試合への焦りが先行し、この練習を怠つたことにより、彼女へ最も悪い影響を与えたと反省してあります。

声による命令、舌鼓は、馬口との軽い接触での制御に大いに役立つものですから、調馬索・曳馬で、自分の声に慣らすべく努めるとよいと思つます。羊子の場合、声・口笛に敏感ですから、扶助了解の前段階として利用すべきです。リッターワリーの調馬索の項に述べられているように、馬は言葉を理解するのではなく、抑揚を覚えるのですから、曖昧な号令ではなく、人間の方も常に一定した号令を出してやらなくてはなりません。はっきりと調子を分けてやり、よりわ

かりやすくしてやると良いです。練習中の調馬索は時間的には無理ですが、曳馬中の五分でもよいですから、徹底した練習を行なって下さい。これは、馬上に於いても言えるのですが、妥協はいけいからです。そして、従った時には思い切り褒めてやり、必ず餌を!

馬上に於いても声の効果はかなりなものとあります。もともと悍の高い馬であり、騎手も馬と一緒に興奮することが多々ありました。そうなっている時は概して身体も硬くなっており、馬口との連絡であるところの拳が固まってしまい、馬を尚のこと興奮させ、騎坐も崩れ更に助長してしまふことがあります。そういう時にこそ、声をかけてやり、馬を落ち着かせ、かつ騎手も我にかえらなくてはなりません。「声をかけてやりなさい。」とよく注意されましたが、その時騎手は馬に対して焦り立つのではなく、先づ自分を落ち着かせなくてはならないことを後にようやく知りました。また、馬上においても寛容さを常に持つていなければならぬことを教えてくれたのも羊子です。馬はある意味で私のような未熟な騎手の先生でありますが、精神的には子供であることを頭に入れ、その時々自分の課したことと馬の状態を顧みて検討すべきだと思えます。夏に畜大へ行って、本棚にあった部報の一文に、「馬を三才の幼児だと思いなさい。」とありましたが、将にその通りだと思えます。騎手は大人の判断をしなくてはなりません。

羊蹄に跨ってから、軽い扶助で動かすことと、それに対して騎手は裏切らないこと、柔かく乗ることと思えました。どうしても脚力に自信がなかったこともその理由の一つでした。そう考えていても、やはり無駄な脚が多く、単純明確な脚でなくてはならないことを指摘されました。膝での明確な脚を心懸け、その補助手段として舌鼓、声の命令を使いました。しかし、馬を動かすことにはかり気を取ら

れ、それを受けるべき柔らかな拳を重要視しなかったことは、馬との連係を捨てていたに等しいと思えます。馬が動いても、柔かく受けてやり、常に確認をすることが必要です。昨年の部報にも書かれていますように、常に馬が騎手の脚で動いているかどうか、確認しなくてはなりません。発進・停止・減脚・伸縮・脚の確認が必要で、そのためにも、扶助である脚は明確でなくてはなりません。脚と共に、重要なのはバランスであり、彼女の回転の悪さは騎手のバランスが崩れているためがほとんどでした。脚による回転を徹底しなくてはなりません。それが常歩・速歩・駈歩でスムーズにでき、かつ障害を織り込んで出来るようになってはなりません。そして、試合でこそ、それを実現させることが必要です。試合になると馬も興奮しますが、それ以上に興奮しているのが騎手ですから、特に注意しなくてはなりません。試合に限らず、障害に向けると勝手に出ていくところがありますが、そういう時にこそ、騎手は自分の脚で推進しなくてはなりません。如何なる低障害でも自分の脚で推進してから飛越させること。私の場合、それ以上のレベルになると、まだ無理のように思われました。騎手が異常に障害を意識することによって、推進しているのではなく、身体全体がブレーキとなって働いてしまいました。

効果的な脚と強い脚の練習は、街乗で気をつけてするようにしました。冬場は特に一日の鞍数も少なかったもので、街乗を多めにしました。彼女は大型トラックに弱いのですが、トラック・除雪車等に接する機会を作るようにしました。単にトラックへの恐怖感を取り除くだけでなく、他の物件の馴致を馬との信頼感を作り出すことと共にできるだけ多く見せ通させるようにしました。障害になるもの

だけでなく、馬が避ける様子を見せた時は、必ず近づかせることが大切だと思います。それも障害馴致につながるからです。また雪が融けてからも、水と乾草はできるだけ毎日通過させることが必要です。乾草はどんな小さなものでも見せ通過させるようにしました。そういう時に、騎手は、馬を大人だと思わないようにする必要があります。野外で走ることも、彼女のスピード感に慣れるために大切なことだと思います。それも出来るだけ、場所を変えることを考えるようにした方がよいと思われまます。

一年ほど羊子に跨って、いろいろな方にアドバイスされたことを自分なりに考え、述べてきました。最後に馬体について若干気づいたことを記しておきます。

私が引き継いだ時点では、前年夏に右前膝に剝離骨折を負ったこともあり、患部に腫れが残り、運動量を控えなくてはなりません。三月ぐらいまでは、その日の運動量によって若干腫れることもありましたが、その後、試合シーズンに入ってその古傷に悩まされることはありませんでした。三月の中旬、深屈腱炎を起こし、二週間ほど運動を控えましたが、それ以降大きな怪我もすることなく手入には手のかからない馬だったので、その他に気を付けて欲しいことがありますので若干書いておきます。

二月、前年夏に入れた乾草がなくなり、悪い乾草に替ったところ、ほとんど乾草を食べなくなりました。また、乾草だけでなく他の濃厚飼料も残す日が二カ月間続きました。この時は、運動量を増やすことによって食欲旺盛になるかもしれないと助言され、肢の様子をみながら運動量を増してみたり、飼付用の水を入れなかつたり、乾草の量を減らしたりしましたが一進一退の状態が続き、青草の生えるころには、ほとんど回復したように思います。今、思うに、食欲

不振、乾草の好き嫌いだけでなく、神経的な原因によるものがあると思われまます。交替してからしばらくは、羊子と私の間は、練習中、曳馬・手入中、じっくりいっていませんでしたから、それが彼女にストレスを起こさせていたのではないかと思えます。また、慣れない土地の飼食が非常に悪いことからみても、興奮・ストレスが飼食に結びついていることがいえます。彼女の身体の調子、気分が飼食に如実に表われること、そしてそれが神経的原因によるところが多分にあることだと思えます。彼女の食欲不振或いは下痢の症状が現れたら、練習方法・曳馬・その他、検討してみる必要があると思えます。

彼女は、綱巻き・そっばする可能性の非常に高い馬なのですが、昨夏の帯広遠征中に、仮廐の狭い馬房の中で、両後肢・眉間に大小多数の傷を負わせてしまいました。投草前にねていたらしいのですが、立ち上ろうとして馬房を仕切っている二本の横木の下の方に前肢をひっかけたらしく、上の横木に頭がつかえたのか、驚いて、横木を折って暴れたらしいのです。こういった事故は、羊子だけに限らずどんな馬でもあり得ることなのです。こういった事故から推して、馬房の広さ、上下の横木の位置と間隔を事前にもっと考えてやるべきであって、人間の不注意と反省をいたしました。三日後に総合を控えた日でもあり、もっと大きな怪我をしていたら、取り返しのつかないところでした。馬の取り扱いにただ慣れていただけであって、それが高慢な取り扱いになり、実際に馬のことを考えていなかったことを事実をもってつきつけられたようで、羊子に対して済まなく、自分自身恥しい思いました。

羊子のごときは、岡田監督、小栗先輩、矢田兄にいろいろ助言を戴き、本当にありがとうございます。それに報いることができない

かったこと、本当に申し訳けなく思っております。
私の失敗を二度と繰り返さぬように、これからの人たちに頑張っ
ていただきたいと願っています。

最後に、

羊子、ありがとう。

疾風号調教報告

騙 ア・ア 栗毛

昭和45年5月31日生

沙流郡門別町美原産

父 ア・ア オーバーマイン

母 ア・ア ミストビハヤ

体重 522 Kg

島 村 努

昨年一月より、本城兄の後を継いで僕が疾風に乗ることになりました。疾風は本城兄が4年目の時に大きく飛躍し、全日学でも相当な成績を収めました。その後を継ぐ僕としては、まず本城兄に追いつき、そしてそれを発展させようと思いました。しかし、結局、騎手の技術の未熟さから追いつくこともできませんでした。彼に教わったことはたくさんあっても、彼に教えたことはあったのだろうか。教えようとしたことは確かだけれど邪魔ばかりしていたようで何と

も申し訳けない気持ちでいっぱいです。今年も彼に乗ることになり、今年こそは、彼の力を充分発揮させなければならぬと思っております。

この一年間、彼に乗ってきて感じたことは、①甘えん坊であるが甘えを許さなければ非常に素直な馬である、②カッとなりやすい性質であり、馬の気持ちを常に考えてやらないとイライラさせてからでは運動できない(どんな馬でもそうだろうが)。③速歩の歩様は非常に大きくゆったりとしていて部内でも最高である。④踏切りが不安定であり、ある程度のスピードをもって、三カンポ前から追い込まないといふ飛びをしない。⑤手の内からはずれて勝手に走られた場合は、すぐに逃避、拒止につながる。ということでした。そして反省せざるを得ないのは、僕の技術の悪さと馬体管理の悪さです。自分の騎坐を反省してみると、障害随伴の時に膝が上がり浮いており、おおいかぶさるようになって、馬がスムーズに飛越する時はよいが、つまったり、バカ飛びしたりした時にはバランスをくずし落馬しやすい、ということでした。また、柔軟な随伴ができず、体が硬くなって、やはり、つまったり、バカ飛びした時には、先飛びが遅れたりしてしまふ。ということでした。その他、欠点はたくさんありますが、今まで、できなくて一番苦しんできたのはこの点であります。珍しい障害、初めての障害に出合い、何が起るか分からない試合において、踏切があわなかったり、躊躇したりすることをさせないようにはすることは勿論ですが、万一そのようになった場合に、どんな飛びに対してもついていける柔軟かつ堅固な騎坐にしなければなりません。馬体については、毎年起こる骨軟症で半沢杯棄権、秋にケイ靱帯炎を起こしての公認大会棄権、全日学総合棄権、そして二月までは全く騎乗できない状態でした。彼はもともと足の丈夫

な馬ではなく、もっと運動量を考えてやるべきだったのです。結局運動できない時期を多く作ってしまい調教の面で大きな影響を及ぼしてしまいました。三月下旬になり、下の状態がややよくなるのを待って、やっと速歩をやり始めた次第です。

一年間を振り返ってみます。乗っていくにあたり、まず本城兄に注意されたことは、とにかく甘やかさないということでした。徹底した懲戒と愛撫。明確な要求と絶対的な服従、そして巾の動きを妨害しないことでした。

一月、二月は、前に出せない毎日でした。常歩ではチヨコチヨコと小さな歩様で歩き、速歩は疾風独特の肩を大きく上げる伸長速歩が出せず、タラタラした、あるいは、ピョコタン、ピョコタンとした速歩になってしまいました。これは騎手のこぶしの悪さ、脚の弱さ、要求の甘さに起因していたと思います。そこで、①整列前の曳馬で鞭を使ってでもしっかりと歩かせる。②最初に外乗へ15分位行つて必死に脚を使い前へ出す。③外での興奮を利用して、大きな動きの速歩をする。④要求を徹底的にし、出なければ拍車、順鞭を用いてでも出す。⑤出たら、こぶしに充分注意して逆鞭で頭頸を伸展低下させる。という具合にやっていきました。最初は逆鞭にも不慣れで、こぶしで邪魔したり、疾風の動きにも不慣れでなかなかうまく行きませんでした。二月後半には伸展した速歩をすることができるようになり、肩の大きな動きに感動さえしました。停止も最初ねばられることが多かったのですが、これも脚不足が原因の一つになっていたらしく、前に出すことができるようになると、口笛を併用して脚を使ってこぶしを止めることによりよくなり、速歩からの停止もスムーズにできるようになりました。障害の方は、速歩が伸ばせるようになってからは、速歩飛越は楽になったのですが、駆歩

にすると、すぐ興奮させてしまい、手の内からはずれて、障害につっこむようになり踏切りも安定せず、うまくいきませんでした。また一月三十一日には雪祭の大通り会場へ行きましたが、ひどく興奮し馴致不足を痛感しました。どんな所でも平静を保ち、騎手の要求に対し注意を向けさせなければ試合場に行っても勝てません。それ以後は毎日違ったいろいろな場所へ行くようにしました。

東北戦を前にしてやはり最大の問題は障害への落ちついたアプローチでした。そこで、障害の前にバーを置いたり、すき間のない障害にし、高さよりも幅をつけた飛びやすい障害にするとともに、あせらすような乱暴な脚を使わないようにしました。数をこなしていくうちにつっこむようなことはなくなりしました。また疾風はごく騎手の感情を敏感に受けとめ、本城兄も言っておられたのですが声に対しても敏感に反応しました。そこで、ほめたり、しかったりするの、ハミを一つはずさなくていいように声を利用しました。東北戦は初めての試合でした。騎手が遅れたり、誘導が雑だったにもかかわらず、結果的には満点だったのですが、前に出すことばかり考えていて、あせらせてしまい、伸縮がうまくいかずスムーズな走行とは全く言えない状態でした。

東北戦からの反省で、前後の口を柔くするために、ふだんから速歩、駆歩でハッキリした歩度の伸縮を行ない前後の口の柔軟性を求めるように心掛けました。しかし、今から思えば伸縮が中途半端だったように思います。

3月下旬は下が悪く、小さな細かい運動をていねいにやるようにしました。疾風はすでに扶助はほとんど知っており、あとは反応を高めることと、頭を上げさせないこと、ハミをはずさないことに注意しました。

4月中旬になり、いよいよ半沢杯に向けての経路回りをしました。半沢杯では複合に出場するつもりでした。一回目の経路回りでは、やはり出しきれず、満点であったものの障害前でつまってしまい伸縮が思うように行かず、出せないことにより騎手が馬上であれば結果となってしまいました。また、回転での外方脚というものをこの時は意識していませんでしたが、この後使ってみて効果があるのにびっくりしました。試合が近くなるにつれて障害のレベルも上げて行き、2回目の経路回りでは、とにかく出して、回転、飛越後につめること、そして障害的で体を起こして出すということに注意してやりました。しかしつめる所できちんと脚を使っつめておらず、飛びにくいオクサー、カマボコのダブルで一拒止されてしまう結果となりました。この次の週に急に、ちょこちょこしか歩かず、腰がフラつき、すぐつまづき、また後退させようとすると頭を上げて反抗し、そのうち跛行し始めるようになり、骨軟症と診断されました。結局半沢杯は棄権しました。

骨軟症は5月半ばには回復し始め、石狩浜への遠乗会にも馴致の目的で途中から引き返すという事で参加しました。一頭だけで引き返すので、どうなるかと思いましたが、別にどうということもなく信頼感を深めました。いよいよ道自馬に向けて徐々に運動量を増やし、恵迪裏の療、馬場内の障害も骨軟症を気にしながらやってきました。疾風は古馬ですから障害の程度を上げていくのにはそう苦労はしなかったのですが、数をこなすことができず、飛越は首が硬直し硬い飛びで、アプローチがややつかかる感じがありました。そこで障害前が必要以上に押さず、3カンポ前から押すようにしました。しかし、これは後で考えてみれば手の内にはいっているかどうか問題であり、それなしではこのやり方をしてうまくいく筈

がありません。試合にその結果があらわれてしまいました。

道自馬では骨軟症の影響もあって無理をせずに中障Bと総合馬場に出場することにしました。総合馬場は一日目であり、これから総合に出場するのに経験を積む意味で出場しました。ただ経路を回るだけで精一杯で姿勢まで注意を向けることができず、馬を興奮させて行なう(競馬場)障害の試合でした。天候は最悪の雨。試合前に思ったことは障害前では体を起こし強く受けて3カンポ前から押し飛んだらつめる。回転では体を起こして脚を使っつめる。スタート前には思いきった伸縮を行う。ということでした。しかし、実際に入場してみると、興奮し、手の内からはずれてつめることができず、障害間で走られ障害前でつまって飛ぶという最悪の走行でした。結果は一落下だけだったものの試合前に考えていたことは何一つできませんでした。

道自馬が終わってその反省から北日学に向かうに当たって次の様な練習方針をたてました。①経路走行に慣れ、疾風のペースを早くつかむため経路回りを多く取り入れる。②一日の内一回必ず強く受けて強い緊張をもった時間を設ける。③思い切った歩度の伸縮を徹底して行う。④ステイブル、又、どんな所でも手の内に入れた走行ができるように野外障害を日常茶飯時とする。⑤一昨年のステイブルの反省から本城兄が去年行なったと同様に、長い直線上に障害を置いて飛越する練習を行う。⑥巾障害、連続障害(ダブル、トリプル、ウサギ飛び)を用いて首を使わせた大きな飛越をさせるようにする。⑦を行うことにより、その後、馬場に帰って連続障害又は経路走行を行うと手の内に入れやすく、思い切った歩度の伸縮も出来、強い緊張を作ることがやりやすいことがわかり非常に効果

的であり自信もつきました。歩度の伸縮が手の内にはいってうまく出来るようになると、十分に出してあげば、障害前で徐々に強く受け3カンポ前から押すことも容易になり、その結果踏切も一定し随伴も楽になりました。6月下旬より北大構内のステイプルコースをやり始め長い直線上の障害練習として農道にたたみを置いて秒読みを合図に発進し歩度伸縮しながら向かいましたが10m位前から逃避され、運悪く道のすぐわきにあった溝につっこみ横転してバラ線に引っかけ後肢と左眼角膜にかなりの傷を負わせてしまい7月4日まで馬休になってしまいました。もっと強く受け、速歩になるくらいまでつめて向ければよかったことを強く反省しました。この故障のために予定は遅れ回復後、肢を気にしながら急ピッチで練習量、障害の程度を上げていかざるを得ませんでした。しかし疾風の調子は非常によく、騎手の方も失敗を経験したため逃避されるようなことはありませんでした。しかし、輸送をひかえた一週間前にまた後肢にケガをしてしまいフロンティア乗馬クラブでの大会は棄権し、そのまま帯広へ向かいました。この間は馬の調子を下げないような運動は行なっていませんでした。

北日学での最初の出番は中障。今までの経験から野外で充分出しておいてから準備馬場の障害を飛越し調子は上々でした。道自馬の時の注意を再確認しスタートしたけれども、白樺三段で押しが足りず一拒止され、水壕で二逃避されて失権。水壕での二逃避は、その前の芝土塁通過後勝手に走られ、それに対する騎手の対処がなかったのが原因です。その他のペースとしては悪くなかったと思います。二走行目は障害間で絶対勝手にさせないようにし、水壕では強く受けて両脚ではさみ込み、つめて何とか逃避を防ぎました。中障では全日学の権利が取れず、総合がラストチャンスとなってしまいました

た。総合馬場は肢の故障から、時間的に思うように練習できず、まともぶっつけ本番という感じになってしまい騎手は前傾し脚を前につっぱり、馬は駈歩になると興奮してしまい、順位は最後の方でした。ただ上位と点はあまり開いておらずステイプルさえうまくいけば大丈夫だと思いました。ステイプルの準備運動では駈歩の思い切った歩度伸縮を行ない手の内に入れていきました。スタート地点へ行くとき疾風は興奮し始め不安を感じましたが、スタートしてから、第一、二、三が勝負だと思いました。特に直線上の障害は逃げられないように十分注意しました。第一、二、三を通過するともう波に乗り、第十七の閉鎖で騎手の気のゆるみから一拒止されたものの楽に帰ってこれました。タイム減点もありませんでした。この結果四位に浮上し、次の日の余力で一落し、順位は四位のままで全日学の権利を取り、ぼっとなりました。

続く道体も帯広でありその間に水壕を馴致しようとはしましたが全く近寄らず返っていやな印象を与えてしまいました。やはり試合が多くなってくると荒いこぶしのためか北日学の前ほどハミに出てこなくなっていました。

道大の最初の種目は総合。馬場はやはりうまくいかず、ステイプルは技術点は満点だったもののタイム減点をくらってしまいました。ステイプルは自信を持ちました。余力は全く前へ出ず、北日本時のような飛越をさせることができず、つまってしまい、芝土塁への誘導ミスから落馬をしてしまい9位に終わってしまいました。続く成年障害は140cmまであるので不安がありました。歩度の伸縮をはっきりさせること、絶対にハミをはずさず強く受けることを応援にわざわざ東京から来てくれた本城兄から注意され試合にのぞきました。本日に勇気づけられました。午前中の余力の時とは違って

動きもよく飛越も大きな飛越で、水壕も難なく通過し、結果は一落下とタイム減点で二位でした。このタイム減点というのは、騎手の騎坐の不安定さから、回転で馬がつまづいた時にバランスをくずした結果でした。これがなければ国体にも行けたかもしれないのに、結局予備馬となりました。

今回の帯広遠征では騎手の騎坐の不安定さ、随伴の悪さから、もっと上位に食いこめた機会をのがしてしまいました。また総合馬場も、本城兄が去年乗った時にはかなりの高得点を取ったにもかかわらず、僕の練習不足と技術の悪さからひどい結果でした。総合で上位にくいこむには馬場をもう少し何とかしなければなりません。

札幌に帰って来て少し休ませた後、今度は公認大会（岩見沢）へ向けて練習を開始しました。馬場内での障害を連続して飛越する時には必ず経路を決めて行ない、疾風の調子もよかったです。後で考えれば運動量が多すぎました。彼は試合直前に跛行してしまいました。これは馬体管理のまずさであり、チーフとして恥ずかしいことでした。結局右前肢ケイ靭帯炎で、公認大会は棄権、腱炎は長くかかり全日学まで影響を及ぼしてしまいました。

跛行してから10日間馬休にしてから、また乗り始めましたが駆歩障害飛越をするとすぐ跛行してしまい、常歩と少しの速歩で緊張を作るようにしました。しかし、僕の技術では常歩で強い緊張を作ることができず、だんだんボケて重くなり、少しわがままになってくるのを感じました。恵迪裏の壕なども常歩、直前からの速歩で飛ばしていましたが以前の様なスムーズさがなくなっていました。貨車積を2週間後にひかえた頃より、このままではダメだと思い、3日に一度位の割で駆歩連続障害を経路を決めて短時間のうちに行ないましたが、夏の時のようにハミに出ず、飛越もごちなく、次の

日には跛行するという状態でした。思い切って走らせたかったのですが肢が心配でできず、結局どっつかずの中途半端な状態でした。貨車積前に程度を下げた経路回りをしましたが満点だったものつまってばかりいて危なっかしい飛越でした。

貨車が東京に着いて右前肢を見てみると運動をしていなかったためか腫れが引いてスッキリしていました。馬事公苑での練習は狭い所で多くの馬が練習するため、ぶつかりそうになってばかりで馬も騎手の方へ注意を向けず次第にカッカしてきて、最初はハミにも出てきていたけれど悪い状態になって行き、もう一度いい状態に戻して止めようと思っっているうちに悪循環が重なってしまいました。欲ばりと焦りが失敗につながってしまったのです。

いよいよ中障害第一走行。馬場が広く障害間が長いため回転は⑩竹冊オクサーから⑩トラケーンがややきついくらいだけれどもその反面障害間で手の内からはずれて走られた場合は反抗を招くと思いい、その点を注意しようと思いました。準備運動の段階で全くだい飛びをせず、オクサーはつまって斜めに飛び、三カンボ前からの押しに對しても反応しませんでした。栗東より応援に駆けつけてくれた本城兄にもっと出すように言われ、鞭と拍車を使ってメチャクチャに出し、その後の飛びはややよくなったものの夏頃のアプローチのタイミングがつかめず不安がつりました。いよいよ本番、スタート前に大きくまわって、思いっきり伸ばしたけれども思うようにつめられずスタート。第一、二通過。第三ツイタテややつまって通過第五石垣もつまり気味。第六芝カマボコオクサーはかなり見て大きいくつまりやっとの思いで通過、第八トリブルのアドラムオクサーで三カンボ前から障害を見て、その時の騎手の扶助がきかず拒止。ここでハッキリした懲戒をしなかったのは失敗。二度目に向けた時は

a、bをやっと通過したけれども、騎手がついていけず落馬。三度目にようやく通過。第十竹柵オクサーも三カンポ前よりつまり拍車を入れて通過。第十二水壕はバシヤバシヤと入ってしまった。そして最終障害斜三段では騎手が最終ということ意識してしまい知らず知らずのうちに気を許してしまったと思います。飛びにくい障害ではなかったのにやや斜めに向けてしまい拒止。最終障害で失権という全く悔いの残る試合をしてしまいました。甘かったのです。随伴のタイミングもつかめず、馬への信頼感ありませんでした。いや、疾風の方こそ、飛越随伴のへたくそな騎手に対し信頼を持てなかったにちがひありません。障害前で馬が見た時に騎坐変を起こさない有効な脚を使えません。第二走行は、何としても帰って来ようと焦って馬をいたずらに出し、結局勝手にしてしまい、第六、第八a、第十と大きな障害で拒止され、第一走行の時よりも手前で失権してしまいました。第一走行を終えた時点で右前肢の熱と腫れがひどかったのですが、第二走行を終えた時点でもっと悪化し、夜通し数日間冷やしたのですがなかなかよくなりませんでした。横山さんや、馬事公苑の獣医に診てもらいましたが、これ以上使ったら廃用になる恐れもあるということでした。ましてステイブルに使うことは非常に危険だったので、総合で北大は団体を組めなくなってしまうのですが棄権しました。そして馬事公苑で鉄をはずしてもらい、帰札後二十日間は曳馬も禁止され、その後は二月までパドックに放しておきました。

ふり返ってみて、やはり騎手の障害随伴のまずさから馬が障害を見て飛んだ時についていけず失敗したことが多かったように思います。8ミリなどを見てみると前につんのめっており、立ち上がりすぎのため騎坐が浮いてしまっているように思います。馬が踏切のあ

ったいい飛びをして調子のいい時にはよいのですが障害を見た時に特に連続障害では破綻を生じてしまいました。

昨年は、僕の技術の未熟さと馬体管理の悪さから疾風やクラブに対し本当に申し訳のないことをしました。今年は自分の欠点を徹底的に直し、疾風の欠点も直してがんばるつもりであります。

天龍山号調欠報告

騙サラ 黒鹿毛

昭和43年3月6日生

浦河郡浦河町産

父 サラ ネヴァービート

母 サラ カンキヒメ

体重 554 Kg

三 好 功 悦

天龍山に関しては、本当にすまない思いで一杯である。未熟者の二頭乗りなど、やらない方がいいことがわかりきっていながら、そのツケを全て天龍山にまわしてしまった。

付き合った日数は短かいとはいえ、彼に關して何もわからないまま、クラブの成績には傷をつけ、また今後の見通しも明らかにすることもできずに、終ることになってしまった。

前任者の退部により、僕が乗り始めたのは昨年四月、もう試合シーズンも真近だった。乗ってみて気づいたことは、とにかく重いこと、頭を下げないこと、そして障害に向けるとアセルことであった。そこで、逆鞭を用いながら、頭頸の伸展低下を主眼にし、騎手は重さを覚悟し、なお決って練習をくずさないように、強く推進するということを心がけて練習を始めた。しかしこの時期、元来の両前肢の不安により、フル回転で練習できる日はあまりなかった。

暗闇で手探りの状態の時、水野先輩が来札され、騎乗して頂く。二年のブランクがありながら、確固たる騎座、柔かい拳、そして現役時代そのままのピンと伸びた背中。折から集まってきた諸先輩の中で、ふと一瞬立場を忘れて、一年生に戻ったような錯覚さえた。兄の乗った天龍山は、銜を真直ぐに引き、すばらしい前進氣勢を見せている。障害もつまることなく、アセルことなく飛越している。この時の天龍山を指針にして、以後騎乗することにする。

天龍山は、脚には鈍感、むしろ鈍重なところがある割に、銜に対しては非常に鋭敏であり、また周囲の変化などにも、神経質に気をちらすことがある。特に、鞭には異常に反応し、見せ鞭だけでも怖がって前に出ていく。しかし、逆鞭を頭上にかざさずに乗ると、頭を上げて銜から避て、出てゆかないということになった。これは、根本的には、柔軟な拳と強力、着実な脚により、銜に対する信頼を取り戻さねばならないことなのだ。僕はあえて逆鞭を使用し、馬が頭をあげられない状態の中で、できるだけ柔かく、軽く、口に接触し、また脚でこれを維持することにより解決しようと思った。ここで気をつけることは、常に強力に推進してはならない。結局、拳でぶら下がることになり、また逆鞭で頭を押し込めていくことになり、逆に銜への不信任を増すだけになるといったことだった。

五月初めの半沢杯では複合を予定していたが、一週間程前から前肢に跛行を感じ、乗り初めて日も浅いので、大事をとってあきらめ休ませた。

半沢杯後から、本格的に野外障害の馴致を始めた。ここで問題になったのは、二頭乗りによる時間配分だった。まだ、天龍山の様子がわからないので、できるだけ自分で馴致をしたかったが、Qを放っておく訳にもいかず、Qと一諸に出かけるか、他の部員にたのむ他なかった。道自馬後は、中畠に協力してもらい、野外馴致は彼にたよることになった。二頭乗りの並びはこの辺にも出てくるが、しかし、さすがステイブルの天ちゃん、野外では絶大な信頼が置け、大きな問題はなかった。

馬場内では手探りながらも、除々に銜に出てくるようになり、接触をだんだん強めることによって、大きな運動と力強い障害飛越を目指すようになってきた。しかし、大きな運動を要求すると、馬がアセリ出し、逆に歩様が小さくなってしまった。やはり、俄仕立てのコンビによるコンタクトの不一致、なによりも、どの馬にでも合わせられなければならない、拳、騎座の問題であった。

特に、速歩で障害に向くと、全く踏み切りが合わず、露骨につまってしまった。障害飛越に持ちこむ緊張感というものがわからなかった。そんな中で、駆歩飛越では、タイミングがとり易いこともあって、遠くからの踏み切りが得られることがわかり、前肢を心配しながらも、駆歩の低障害飛越を主に行うことにした。

時期尚早と思いつながらも、試合を考慮しながら、障害を大きくしていくとやはりボロが出た。箱障害が特にニガテだった。

六月中旬、札幌競馬場での道自馬。総合馬場と中障Bに出場。馬場は全くの一夜漬け。入場したとたん馬が頭をあげて、銜から避

北燕号調教報告

騾 サラ 鹿毛

昭和46年3月14日生

勇払郡鶴川町産

父 サラ マタドア

母 サラ リュウウエー

体重 565 Kg

三代目からのツバメに關しての調教報告

西 川 理 一

一年を振り返ってみて、本当に調教というものを自分はやってきたのかどうかはなはだ疑問ではあるが、反省の意味を込めて経過を書いていきたいと思う。

最初一月に乗り始めた時は、靱帯を切った自分の左足首がまだ歩きのにも痛む程だったので、乗ってもアブミをまともには踏めず、当然脚なんかも思うように使えなかった。その頃僕がやったのは、常歩中心で停止、発進、後退、そればかりだった。特にツバメは粘るし、後退も頭を上げてバタバタしたのでその事はっきり考えていた。しかし、先聲からは前に出せない状態で停止が出来ても仕方がないと言われたりもしたが（今から考えれば当り前の事なのだが）、その頃はそうは言われても四ヶ月のブランクの後、まだケガも治っていないくて（今でもその当時無理したためか走ったりする時や、寒

い時には痛むが）思うように脚を使えない自分が、それを認めざるを得ない自分が腹立たしいやら、みじめやらでどうしようもない状態でスタートを切った。

その僕が出来ない部分を木村さんや吉田、中島らがカバーしてくれたこと感謝しています。特に木村さんには羊蹄という難しい馬を調教しながらの二頭乗り、すまなく思います。

その頃は、体力作りということでキャパレティを高さをつけてやったり、雪の中を歩いたりしていた。ようやく速歩ができるようになって、まだアブミに乗ることができず不安定な状態で、馬の口に満足についていくことさえできなかった。

3/6 ツバメで初めての経路回り（最高90cm）。まだまだアブミに乗り切れず緊張しっぱなし、細かい事はほとんど覚えていない。この頃から回転が悪くなり、また左を向くことが多くなる。人の方も随分伸び上がる癖がつく。

4/3 半沢杯へ向けての経路回り。左回転で遠くからまっすぐ真中に向けることができず二反抗。初めての一メートル以上の障碍という事で緊張していて、人が馬の上で暴れていた。半沢杯では複合に出て四位、少しは乗れるようになってきたし、障碍前での脚も長屋さんに言われてわかるようになってきた。しかし、その後恥しい事に鞍傷をつくり、一ヶ月程満足に乗れない状態が続いた。鞍を乗せられるようになった時も、毛布を二枚にし、ゼッケンも二枚重ねキ甲の部分を作り抜いた奴を使ったが、それでも日に一時間しか鞍をつけなかったの思うように乗れなかった。しかし、回転なんかは徐々にではあるが良くなってきた。

このようにあまり満足のいく順備が出来ないまま北日本学生の試合に臨んだ。障碍一日目、初めての中障碍。障碍の大きさに圧倒さ

れ必死でただもう帰らせようと拍車をいれるのがやっとで、全くつめたり伸ばしたりという余裕もなく、ただただ障碍に向けるので精一杯。結果は八落下で十位。といってもゴールを切ったのが十頭だった。第二走行。第一走行で押せば絶対帰ってくるという自信とどうか、馬に対する信頼みたいなものが出てきて、二日目は出来るだけ落とさないようにと考えたが、結果は六落下で八位。しかし、一生懸命走ってくれたツバメがうれしかった。

総合は調教審査は意外と落ち着けてまあまあ。耐久は準備練習では落ち着けることと体をほぐすことだけにし、A区間で伸縮をやり、いよいよD区間スタート。ツバメはほとんど止まろうとせず、調子良かったのだが、ゴール寸前、泥水の濺からの飛び上がりで飛ぼうというよりもはい上がりとしたけれど、バーに足がかかりそのまま僕だけが障碍を飛び越え、あわてて泥沼の中に戻り再行。また止まられる。もう後がないと思ひバーを折ってでもいくんだと拍車を目茶苦茶入れたら、本当に障碍を壊しながら通過。ゴールは切ったものの大幅なタイム減点を食らう。三日目の余力は人馬共にへとへとで、特にツバメは思うように足が上がらなかったが、二落でゴール。九位になり、全日本学生、総合、中障共に権利を得られるようになった。

その後の道体では練習中に人馬転し、また左足首を痛めて棄権。人と馬の歯車が少し狂う。岩見沢公認大会では複合で十位。全日学では障碍で同輩二人が相ついで失権し、急に団体成績どころか団体を組みめるかどうか危うくなってきたため人の方があせてしまい準備馬場で止まられたり、初めてひっかけられたりしたまま、試合場に入り二拒止三落下、二日目は四落下で何とか帰ってきた。総合は、中障後気が抜けたのか、熱が三十八度出て、そのまま調教審査。

フラフラした状態でドロドロの馬場で落馬しそうになったりで点数の方はメタメタ。耐久は、誘導ミスで止まられたり、水濺飛び越みで人馬転するなど三ケタの減点を食らう。余力では何とか満点で帰りたいと思って前の日から経路を何度も頭の中で回ったが、結果は二落。全日学に関しては、満足いくような結果ではなかったが、初めての東京でとにかくゴールを切れてうれしかった。

今改めて一年を振り返ると、前半は人と馬が交互に故障し、本当に調教を始めたのは今年になってからのような気がする。やはりツバメの性格みたいなものがわかってきたし、乗ってる時でも今一体どういう風に思っているんだろうという事もなんとなくわかるようになってきたため、一つ一つの扶助に対して、出来ればほめ、出来ない時にはレベルを下げわかりやすいように教え、さぼってやらない時や反抗する時には音声や拍車でしかるようになっていくうちに、停止、後退が逆鞭で頭を下げてやるようになってきた。そのため、発進、回転中でもつっぱらない時間も多くなり、力は弱いがハミをかんで引っぱって歩くようにもなり、口も体が少しずつではあるが柔らくなってきたような気がする。

しかし、まだまだ他の馬に比べて体も固く後肢の踏み込みが悪いし、急回転なんかまだまだ出来ない。それに他の馬に乗って感じる事だが、ツバメはものぐさなのか自分ではあまり体全体で動こうという気がなく、強い脚を使っても気だけあせて前肢だけがバタバタし、後肢が引きずられるような所があるが、これももっと脚を使ってハミに出せば体全体で大きく動くようになると思う。

去年の試合で大きく反省することの一つに人の未熟さがある。不安定な騎座の為、障碍上でハミをはずしたり、ステイプルで落馬

したりで余計な減点を食らうことが多く、一生懸命走ってくれたツバメに悪いと思うが、今年は何とか恩返しをしたい。

それと鞍傷の事だが、キ甲があるのかないのかわからないような背中なので、何度か鞍を替えたりしているが、あまり合わないのので下級生にはまだまだ安心して装鞍はまかせられないし、自分でやってもやはり気になる。

これからの課題としては、力強い安定した歩様（↓ガタガタのキヤパレット）、スムーズな回転、力強いハミ受け（↓強い脚）、障碍の尊重（↓固定障碍、バラージュ等）、持久力（持続した駆歩）、正確な凶形（↓蹄跡外での運動）、その他あらゆる所の馴致等いろいろあるが昨年以上の成績を上げる為にも頑張りたい。

北楽院号調教報告

騙 サラ 鹿毛

昭和47年4月6日生

静内郡静内町産

父 ミンシオ

母 ジュラルディンツ

体重 554 Kg

三 好 功 悦

尻に残った傷跡を目にする度に、試合直前の息苦しさと、終わった

後のやるせない思いが胸にこみあげてくる。

Qはケガをしても飛んだ。未熟な騎手を乗せても、ひたすらゴールを目指して走った。ただ馬よりも、騎手にとって困難が多かったために、Qを栄光で包んでやることはできなかった。

騎手にとっては、試合に勝とうとか、調教してやろうとかの意識よりも、なんとかしてQと一諸に飛んでゴールを切りたい、それだけを思っていた一年だった。

Qにも、僕にも初めての馬事公苑の芝馬場で、騎手は恐怖で足もすくむ思いでいたのに、Qは一つも嫌わずに、障害をぶち壊しながらも、飛んでくれた。僕は、彼の素直さに、感腹するのみだった。感傷に流されない内に本文に入ろう。

北楽院に乗り始めて二年目になった昨年二月末、除雪車によって作られた大きな雪山のため見通しが全く悪い馬場で、他馬と衝突してしまった。左前肢管に、ひどい裂傷をつくり約一ヶ月の馬休。この半年後の八月、北日学中障でやってしまった、右臀部肉離れによる約一ヶ月半の馬休、そしてチーフが代ってからの今年一月、他馬に蹴られ左後肢の骨折による馬休等、この一年、本当に大きなケガにつきまとわれてしまった。これらのケガは全て、騎手管理側側の責任によるものであり、クラブに非常な迷惑をかけてしまったことをお詫びすると共に、一日も早く元気になって、再び活躍してくれることを心から祈ります。

さて、幸い、一時懸念された跛行などの後遺症も残らず、四月初めから再び騎乗し始めた。

大目標は、八月の北日学総合として、それまでの半沢杯、道自馬は、目標までの一段階とするように大まかな計画を組む。

練習の柱としては、輪乗りによる前後左右の柔軟性の追求、キャパレティ、低障害の連続通過による踏み切りの安定と障害馴致、街乗での野外馴致の三つとした。

具体的に、輪乗りは準備運動を兼ねて毎日のように続けられたが、根本的に口を柔軟にすることはできなかった。

騎手に際して、常に頭頸の伸展低下に注意を払い、馬口とのコンタクトは、練習時間の大半は、なるべく軽くするように心がけた。「顎をゆるる」ということについてはあまりこだわらず、つばっいては良いから、まず銜を真直ぐ引けばよしと考えていた。顎をウンヌンするのは、この状態が安定してからのこととしていた。

個々の運動についても、一つの運動にこだわらず、習うより馴れろとはかり、気長にかまえていた。結局、特に減脚では、満足のいく結果は得られなかったが、騎手が馴れた程度には、Qも上手くなってきたと思う。これは、未だ新馬であること、また、騎座、拳が未熟であることを考え合わせた上、いちばんリスクの少ない方法として採用したものである。

障害練習については、主目的を飛越自体に馴らすこと、並びに障害の種類に馴らすこととし、低障害の数をこなすように努めた。

Qの場合、飛越自体ぶっさばうなこと、障害を見たらつつ込むように走りだすため、踏み切りが安定しないことなどで、よく低障害でも肢をひっかけていたが、これをやはり馴れによって解決しようと思った。また、この「つつ走り」は、将来、難度の高い障害飛越において、拒止につながると感じていたこともあり、飛越前に特に脚を強く使い、騎手を意識させるように心がけた。しかし、この時、むしろいたずらに、Qを刺激しすぎたことも否めないが、それ以上に、拒止されるのが怖かったのも本心である。

ある程度飛越が安定してきた時、特に気を使うべきは、リズムだと思いが、僕の場合、騎手の方からリズムをこわすような脚を使用したことは、結果的に余計にアセラセルことになり、試合場では落下につながってしまった。

また、障害練習に於て、将来拒止につながるような要因は極力避けるべく、その場の難度の高いものを、無理にこなさないよう気をつけるに伴い、銜はすぐに投げられるように心がけた。従って、よく飛越中に銜がはずれることを指摘された。当初、練習時では、踏み切るまで極力銜を受け、踏み切り後は、思い切った馬にまかせることによって、楽に飛越させようと考えていた。

障害を、たった一つだけ飛越させる中では、この方法に誤りはな
いと思うが、やはり連続した障害の中の一つを飛越する時は、飛越
中も銜を受けていられるよう、拳を訓練すべきである。

銜を投げることによって、飛越後に走られることになったが、これを痛切に感じ、積極的に手を入れたしたのは、全日学を控えた秋の練習からだ。方法としては、二・三本のキャパレティとその後の単一を利用し、キャパレティの入口付近から速歩にし、通過後即座に停止。この初歩的な、単純なことへの繰り返しを、一ヶ月間続けることによって、随分変化したと思っている。まず120cmぐらいの垂直なら、二・三歩の速歩で飛べるという自信が騎手について。そこで、障害前で刺激しすぎることが少なくなったと伴い、Qが落ち着いて飛越する分、減脚が良くなった。当時、北日学でやった肉離れにより、運動は限られたものしかできなかったが、毎日この運動を飽きずに繰り返したことは、非常に効果があったようだ。

街乗では、「向けた所はどこでも行く」という基本的なことを目標に、野外障害を飛越するよりも、むしろ水たまり、小さな溝、枝

などをなげなく、またいでいくというところで馴致を進めた。勿論、総合を目指していたので、恵迪裏の障害、濠も利用していたが、それよりも、どんな試合場でも、物おしせず力が出せるように、目新しい場所、目新しい物に馴らす事を重視した。

野外騎乗を頭に置いて、野外障害を連続して通過すると、やはり馬が走ってしまい、拒止することそなかったが、ひたすら走り減脚、回転が困難であった。

七月に入ってから、下級生が頑張って作ってくれた野外障害を利用して、二度、2km程の野外騎乗の経路廻りを行った。一回で、懸念していた、馬をおさえられず、回転させられずの一反抗をとられてしまった。反面、減脚、回転に難があるものの、野外障害自体の馴致については、一度通過したものは、次からは、比較的楽に通過し、初めてのものも、充分注意深く、強い緊張の中で向ければ、多少つまり気味ながらも通過していたので、ある程度の自信はあった。しかし、二度目の経路廻りでそれは大きく崩れ、石を頭にたたきつけられる思いをした。農場の脇の小川を利用した川渡り、いつも通っている所と違うとはいえ、三拒止。テコでも動かない。確かに前々から、水を嫌っていたが、そのために、場所を変え時を変え水に肢を入れる練習をしてきたのに……。翌日から川・橋・水の音、臭いのある場所を集中的に歩く。三日後、フロンティア乗馬クラブでのクロスカントリー。川に飛び込む障害がある。水は濁っていて底は見えず、流れも速い。一見、かなり恐い。最初からこの障害に賭けていた。川の前で銜を強く持ち、拍車を入れる。多少見ながらも、一発で飛び込む。これで救われたが、本番北日学を前に不安は解消されなかった。

結果的に、北日学中障でやった肉離れのため、一番の目標として

いた総合に出場することができず、従って本格的な野外騎乗も経験しなかった。確固たる自信こそなかったが、このために練習してきたのであり、成果を試したかった。特に全日学総合で、Qさえ丈夫なら団体を組めたこともあり、返すがえすも残念なことである。

さて、水の馴致以外は、ほぼ順調であったが、やはり、失敗もあった。恵迪裏の閉鎖障害で、騎手は大したことないと思い、放棄手網の速歩で向けて止まられた。その後、銜を持って向け直しても拒止。懲戒後通過。これは、完全な騎手の油断によるものであるが、新馬で新しい障害を通過する時には、出来る限りの緊張を作るべきだという全くの基本を改めて思い知らされると同時に、何がおこるか解らない馬では、一つの予備手段として、拍車、鞭など対処する道具を備えるべきだと思った。要するに、拍車、鞭は、必要のない時は、持っていて、使わなければよいだけである。

以上述べてきた、輪乗り、低障害、街乗は、この一年間、一貫して変えることのなかった、三本の柱であった。

つづいて、一年間の試合を通して、感じたことを書いておく。Qにとって、どの試合もいろいろな意味で「初めて」であり、それゆえ、普段とのギャップをなくすことが最大の課題だった。なるべくQと一諸の時間をつくり、騎手を意識させるようにし、また、試合場付近の馴致につとめた。跨っては、脚でほとんど前に出すこととによって、Qの気持ちを集中させるよう努め、試合場では必死に前に出すばかりだった。しかし前述の通り、試合場でひたすら前に出よとばかり、イタズラに刺激すぎたため、セッカチな飛越、あるいはバカ飛びをさせてしまい、結局落下につながるようになった。試合でもっとリズムを大切にしたり、結局落下しては、違った結果が得られたかも知れないが、僕にとっては、ただ目の前の障害を飛

北姫号調教報告

牝 サラ 鹿毛

昭和49年3月27日生

静内郡静内町産

父 アステック

母 ヤマニンザザ

体重 470 Kg

国 枝 保 幸

ばせることに精一杯であった。その最たるものは、北日学中障であり、肉離れをおこしたとはいえ、二回走行で十八個も落してしまった。また、この肉離れも、力を抑えずに走り廻り、バカ飛びしたところによるところが大きいと思う。

全日学を控えて、この反省に立って、経路中の伸縮とリズムを考えて練習したが、所詮つけ焼き刃、やはり競技場に入ったら騎手の方が無中になってしまった。

第一走行では、初めての馬場で初めての障害ということもあってか、Qがかなり注意深く飛んでいたことにたすけられて、三落にとどめることができた。しかし、第二走行ではQが安心したのか、障害をぶつきらぼりに越えていったという感じで、七つも落下してしまった。疲労や肉離れの影響もあったろうが、この時こそリズムを大切にしていたらと悔まれる。

低障害では、ある程度満足できるリズムを掴めるようになったが、やはり、大きな障害に向ってもそれが崩れないような練習が、もっと必要だった。その意味でも、普段から経路を想定した練習を、積極的にとり入れることにより、人馬共にそれを掴んでしまうことは、試合につながる大切なことだと思ふ。

以上、一年間の反省を踏まえて書いてきたが、結局この一年、Qの素直さに支えられて障害を飛び越してきた、という感が強く、なお、口、体の硬さなどの課題が残されている。今後このような課題を乗り越えて、北大馬術部を支える一頭として頑張ってもらいたい。とにかく、骨折を一日も早く治して、再び元気な姿で走りまわってくれることを願って、この報告を終わりたい。

ひょうきんな容貌と華奢な身体、わがまま放題のおてんば娘といったところか……。人に怖じる事なく(人を人と思っていない面もある)それでいて乗っても降りても素直な可愛い(やっぱりこの言葉が一番合う)娘である。

去年の一月に付き合いが初まり一年以上が立ち、その間ほとんど毎日、だれよりも多くの女に乗り、だれよりも多くの女に接して来たわけでやはりここに調教報告を書く立場にある。ところがその際月のほとんど毎日が調教とはほど遠い時点でごめいていたにすぎず、特に8月末まではその一切が山川姉が頼りであり、正直言っておろそかにしていた事は、現在にも尾を引いているし反省している。9月になって一人で乗って行く事になった時、まだその事に気が付いていなかった。8月の道体小障に山川姉でデビューを一逃避ではあるが帰ってきたせいもあり、それ以前まで障だけほどの馬よ

りも多く飛んでいたし（どういふ状態で飛んでいたかが問題なのだ）駈歩飛越もかなりこなし、（馬自身がその練習を覚えてしまったのか）興奮して障碍に向かつて突進していく事もほとんどなくこれなら大丈夫だろうと十月岩見沢の公認大会に臨んだのです。これが甘かった。甘すぎた。

試合当日、練習馬場で準備運動をした後で待機馬場へ入るとどうしようもないほどに興奮。北大の馬場で練習している時でも駈歩で他の馬が近づいてきたりすると耳を伏せ逃げようとする事があり、多くの見知らぬ馬が駈けめぐる待機馬場で興奮は当然の事でありその興奮になす術もなく運動不足の状態です。試合場に向つた僕はチーフとして失格だと言われても何も言えない。その結果第一障碍に驚き、数メートル手前から前へ出ず拒止、第一第二を強引に通過後、バランスを崩し、第三に向い左へ切られ落馬、手網が切れて棄権。この試合の反省として人間の姿勢（特に体を起こす事）と銜受けの必要性を痛感させられたが、銜受けに関してはただ漠然と興奮状態で脚と拳で充分馬をおさえられるような人間の技術と馬の柔軟な口向きという事が頭にあるだけで、実際試合後どのように調教しているかという事に関しては、突然特別新しい方針が立つわけでもなく、それまでやってきた事を遵守し、再考しながらやっていくしかなかった。

それでは今までのどのような事をやってきたのか書かなければいけないが、軽い接触を保ちつつ平場と障碍運動を、そして馴致を毎日繰り返しただけで、時とともにその要求が高まっていたにすぎない。障碍や馴致に関しては、それでも繰り返す事で、初期調教的な課程は順調に進んだと思う。ミヨコの障碍前での前進氣勢と素直さ人なっごく、人の行く所なら大体何処へでもついて来るので馴致し

易い点で、ヘタクソ3年目にとっては大きな助けであった事はいうまでもなく、この点で自馬自賛する事を全くはばかるものでない。しかしあまりに下手すぎた。向上心にも欠けていた。平場で停止・突進に初まり駈走までの運動に関しては、騎手が上でバタバタと暴れるばかりで、暴れば暴れるほど状態は悪くなり、乗り始めた頃脚反応が鈍いものの銜を引く感じがあったのがいつのまにか失われ頭を上げて銜に全く出ない状態であった。その上、脚そのものをよく知らぬ馬に乱暴な脚で無理矢理出そうとすれば興奮気味となり、ますます頭が上るばかりであった。停止・後退も悪く回転も体が硬く肩から入る回転がほとんどで平場の運動に関しては調教上進んだ点は9月まで全く見出し出せないし、色々な運動課目をこなせるようになったが、上手にこなせる課目が一つとしてなくそういう意味で乗り初めの、監督が面倒を見て下さった頃よりかえって後退してしまつたといった方が当てている。そして全ての原因は、かの女に最も多く跨がって来た人間の乗り方にある。

こういった暗澹たる状況から得たただ一つは、簡単な事を教多く繰り返す事は、その課業が簡単な事であればあるほど効果があるという事である。そういうわけで9月に入って初めた事は、脚による回転と三十センチメートル程度のバー跨ぎで足を折る事を教える事を放棄し手網で繰り返す、その後で輪乗りをしそれからキャバレティを多用した障碍運動とその合間に馴致をする（つまり銜乗）。障碍に関してはバーを跨ぐ事で、障碍前での冷静さと前肢を折る事を覚えた為飛越体勢が相当安定してきた。銜を噛んだ状態で運動してはいない為馬体が伸び切る事、飛越後の減却が問題となるが、これは輪乗りや平場での運動で銜を噛んだ状態でこなす事ができるようにならないとどうしようもない。

平場では夏の試合から10月までの間、相当乱暴な練習になってお
り拍車で無理矢理前へ出す事が多かったので丁寧な運動する事を一
番の目標にし鎧にバランスよく付重して、絶対に踵を上げないよう
に努めた。拳は出来得る限りついていく事は当り前だが意識して前
へ前へ送り出すように努めた。そんな具合にして十一月頃までには
輪乗りであれば頭を下げ銜を引きながら運動する事が出来るようにな
ったし、停止も良くなり、回転において馬体の硬さがとれた。伸
縮も常歩では良く銜を前下方に引いてくれたし速歩でもある程度の
伸縮が銜を噛んだ状態で要求できた。しかしこれらの状況は輪乗り
の中でしか作り出す事が出来ず、輪乗りを崩して運動を初めると歩
度はのびない、頭は上る、回転で肩から入るで、あまり前進が見ら
れなかった。

もっと強い脚、もっと強い接触がなければ打開できない局面であ
る事はわかってもらうにもならず輪乗りの状態を平場へなんとか持
ちこもうと固執するばかりでその日その日の状態の良し悪しに一喜
一憂する毎日が続いた。特に一年目を乗せるようになると銜を噛ま
せて運動していかないが為の欠点がはつきり自分の目で見れたし、脚
反応の悪い事も同様である。一年目にとってミヨは重く、真直ぐ走
ってくれない馬なのだ。

周りからも強い接触の必要性を指摘されたし軽く持ってどんどん
前へ出して銜に出す事も試みたが強い丁寧な脚のなさが状況に変化
を与えてくれなかった。

そんなこんなで逆鞭を持ってはと言われるようになった。特
に西川には強く言われたが逆鞭に対して興奮してしまふ事、騎手自
体が、逆鞭を持ちなれていない事で、積極的に使えなかったが西川
に何回か乗ってもらい、停止、発進、後退を繰り返すだけの運動で

あるが、その中で特に後退で徹底的に頭を下げる事で銜を前下方に
引く感じがあり、それが契機となって運動し易い状態になった。逆
鞭を使う事で輪乗りをはずれた運動でも頭頭の伸展低下が得られ、
銜にもよく出るようになった。一月ぐらいいは頭を下げ軽く銜を引
いた状態で、常歩・速歩運動・速歩飛越えできるようになり回転で
もよく頭を下げハミを引くようになった。しかし、充分銜に出てく
る感じはなかなかつかめなかった。軽い接触である程度の運動はこ
なせたが、強い緊張を作り出せずその為伸暢速歩が単に歩度の速い
速歩という感じで障碍前でも銜に強く出てくる感じがなく、従って
飛越も馬体がのびきってしまう。要するに、全ての運動中馬体のの
びきっていてその状態で運動しているため強い緊張を必要としない
運動をこなせても、それ以上のレベルの運動（速歩で高い障碍に向
かったり、駈歩及びその飛越）で手の内から出てしまう。強く銜に
出して銜と脚の間に緊張を貯えたような状態がなかった。この状態
を如何に作り出すか。この事が冬の練習の大きな課題となったが、
なかなかつかむ事ができなかった。それが2月になって輪乗り中に
榊井兄より「うんと詰めて、前へ出ないように庄迫脚を丁寧に使う」
ように言われやってみたところ、それまで感覚していた拳と違った
感覚——銜を噛んでいるという実感——が得られ、その時「これ
だな！」というひらめきがあった。特に立つ時に脚を軽く使うよう
に指摘された事が大きな進歩につながった。それまでも軽く持って
そこへ脚で押し出して銜を受ける事は、乗り初めの頃から言われて
いた事で、それが一年たってやっと実感できた気がしたのである。

この日の銜を噛んで来る感じを常に維持して乗るように、毎日努
めるよう注意した。そして一定の歩度の速歩の中でつかめるように
なってから、伸縮ができるように徐々に徐々にやっていった。それ

に従って少しずつ少しずつ、前後の銜受けが軟くできるようになり伸縮も充分ではないが銜を噛んだ状態でできるようになったし、飛越前中後、銜を噛んだ状態を維持できるようになったため、飛越姿勢も伸び切ってしまうわずかなり変わって来たと思ひ。従って減却も額がつっぱってしまふ事なく良くなってきた。

だいたい現在の状態はここまでである。常歩・速歩運動についてしか書かなかつたが、駈歩は馬場の状態が悪く2月はほとんど運動ができない状態で、ほとんどやっていたくない。たまにやっても、勝手に前へ出てしまつて、落ち着いた状態でできなかった。馬場の状態が少しよくなり駈歩を維持する事が可能になつた今でも一定のペースで駈歩させる事ができないのだが、数をこなす事、脚で銜にどの押し出し運動する事で、落ち着いた状態を作つていこうと考へている。常歩・速歩では現在の噛んだ状態から強い脚によつて除々に譲らせて強い緊張を作れば、ミヨコは障碍前で自分からつっこんで行く所があるので、手の内に入れた状態でアブローチできるようにすると思ひ。歩度を繰り返して変えてやれば、自然に、譲つてくると思ひ。

この一年を振り返ると、一年もの間乗ってきたもののあまり進歩がないというか、今できる事は考え方次第でもっと早くできるよゝうになつていた気がしてならない。この調教報告を書きながら岩見沢での試合を思い出し、新たななるシーズンへの不安感をかくせずにはいられません。試合まで後一ヶ月、どこまで持つていけるかはわからないけれども馬場の状態も良くなつてきたし、馬も若く体力があるので許す限りの運動量をこなして馬との関係を強いものにしていきたいと思ひます。

今まで乗つてきてミヨコに対してなしてきた事を思ひと、済まな

い気持ちで一杯ですが、振り返らず、その気持ちを真直ぐ新しいシーズンに向けるべく、今僕燃えてます。「落馬したつていいや…」と力強い意志表明を持って北姫調教報告第一部のペンを置きます。

北将号調教報告

牝 サラ 芦毛

昭和49年2月14日生

浦河郡浦河町産

父 フォルティノ

母 マツノミドリ

体重 548 Kg

矢 田 明

思ひほどには事はうまく運ばないもので、三好主将から新馬の調教の手伝いを依頼されて以来ちようど一年、騎乗した事になりませんが、その結果は、あまり好ましいとは言えないようです。

自分なりに最善を尽したつもりでしたが、決して上手な調教師ではないために、誰が乗つても良く動くというところまでは進歩しなかつた点についてはお詫びを申し上げます。試合経験もようやく小障害に手を出した所で終つてしまつたが、野外馴致には、多くの時間を費して来たので、この先、良い成果の得られるものと後継の者に期待しておるところです。

作業課目として重視した事を列記します。

- 一、曳き運動（音声調教）
 - 二、野外騎乗と、街乗
 - 三、常歩での施回（後駆の進出）
 - 四、その低下と柔軟を速歩の不斉地騎乗で養う。
 - 五、キャパレットイとインアンドアウト
 - 六、駆歩での連続飛越
- 良い馬とは、良い練習馬であり、その条件は丈夫であり、良い口向きを持ち、人間を信頼し、十分に馴致されている事であると信じている。

何はともあれ一年間お世話になり、ありがとうございました。

北騮号調教報告

牡 鹿毛
昭和51年2月23日生
北大馬術部産
父 ドン・ホッパー
母 羊蹄
体重 505 Kg 体高 152 cm

島 村 努

53年10月より、僕が北騮の調教に当たることになりました。それ

まで、北騮には、一人の人間が長期間彼に騎乗するというのもなく、人間を人間とも思わず、人間に乗りかかるともしばしばで、下級生は全く手が出せないという状態でした。手入れは、おとなしくさせるものの、曳馬は満足に出来ませんでした。これは、彼が育った環境の悪さ、すなわち、仲間となるべき仔馬が居らず、運動不足がたたり、また、部員は、最初、溺愛し、その後彼の成長とともに、彼がじゃれついてくるのに恐怖を覚え、今までと違って、なぐる蹴るなどの態度に出たということに起因するものと思われます。そしてその態度が徹底していれば、まだよかったです。ところが、どこか逃げ腰だったと思います。

初めて彼に騎乗した時に思ったことは、とにかく我ままで、騎手を全く無視しているということでした。今まで古馬にしか乗ったこととかなかった僕には、全く思ひようなコースをとらせることができず、舌は出し放して、ぐるぐるまわし、ハミはガチャガチャ遊び放してました。

まず、思い通りのコースをとらせることが先決であると考え、順鞭と脚を使用し、勝手な方向へ行かせないようにしました。朝、乗り始めが非常に困難であり、馬場への入場や、出入口付近では、ごねられました。乗り込めば乗り込む程、言うことを聞くようになりました。低障害は、今まで曳馬の際に通過させては、エサをやっていたためか、要求もしていないのに勝手に通過し、勝手に停止してエサをねだりましたが、これも勝手な方向へ行きそうになったら、懲戒してやるようにすることによって直りました。しかし、毎日、馬とケンカすることが多く、また、勝手に走られた時にあまり口を引っぱりたくないと思ひ、あやふやな態度をとってしまったことが彼を甘やかす原因になり、以前よりは、思い通りのコースをと

らせることができたものの、ちょっとの隙につけこまれ、勝手な方向へ走られるということが一日のうち何回もありました。脚に対する反応は、ある程度までは反応するものの、いい動きをさせようとすると頭を上げたり、口先を上に向けたりしていやがるだけで、脚を動きに反映させることができませんでした。常歩・速歩をしていて、彼は、あっちを向いたり、こっちを向いたりし、その首の動きに對し、手綱をたるませないようについていくようにと小栗さんから言われましたが、うまくついて行くことができず、また、彼を運動に専念させるだけの脚をもちあわせておらず、強い脚を使えば前述した通り反抗され、結局、一層、口について行くことができないうという状態でした。停止は口笛を副扶助とし、こぶしを止めることにより教えました。

10月中旬に、装蹄したのですが、装蹄後の運動量を少くしなかったためか、右前肢に跛行をきたし、下旬まで馬休にせざるを得なくなっていました。

10月下旬より騎乗を再会しましたが、また、やり直しという状態でした。人間には噛みつくことは勿論、乗っかかってくることもしばしばでした。しかし、前の状態にすることは、その時間はかかりませんでした。外乗も平行して行ないました。ある程度馬場で運動して従順にさせてから行きました。この時感じたことは、新馬にしては、それほど興奮することもなく、割合に度胸があるということでした。曳馬は、ハミをかけて行きましたが、一人で行くとき、すぐに噛みついたり、人間に向かって立ち上がったたりされ、できるだけ二人で行くようにしました。人間に對しての不信感を持っているようで、この様な時に、徹底的に懲戒していいものかとも思いましたが、噛みつくことは別にしても、立ち上がられた時は危険でも

あり、また、自分の思い通りに行かない時に人間に對し立ち上がったので、完全に甘えていることは明白でしたので鞭で懲戒しました。しかし、学校の関係から毎日曳馬に行くことができず、行く時は必ず反抗されるということの繰り返しでした。

11月になって、僕は全日学に行き、下旬までの間は、二年目に騎乗してもらいました。全日学から帰ってきた後も、騎手の徹底した懲戒とていねいさに欠け、また、彼の反抗に對しいら立つばかりで毎日ケンカしてしまいました。

12月にはいり雪が降り、地面も凍るようになりました。雪が溶けて黒い部分とか、ぐちゃぐちゃになっている所などができ、ひどく下を気にして、真直、思い通りのコースをとらせることはよけいできなくなっていました。拍車や鞭を使って、できるだけ思い通りのコースをとらせるようにしましたが、騎手の技術のなさからうまくいきませんでした。また、この頃から、駈歩の発進を本格的にやり始めました。最初は速歩から強い脚をどんどん使うことにより馬が耐えられなくなるといふことから始めました。最初は頭をふったりして反抗し、なかなか駈歩をしませんでした。拍車を入れてみましたが反抗して止まってしまう、そこで、尻鞭を使って出しました。駈歩維持も難しく、すぐ勝手に落ちてしまいい、そこでまた鞭を使うという具合でした。外を利用して駈歩をやらせることもしました。その結果、駈歩はすぐやるようになりましたが、外での落ちつきがなくなっていました。そのうち地面がいよいよ硬くなり馬場内では運動ができなくなり、外の軟い所を利用せざるを得なくなりました。しかし、ある程度運動した後でないとすぐ走り出し、思うような運動をさせることができず、毎日やっていたら、そのうち馴れるだろうと思いましたが、毎日、走

られてばかりでした。運動不足と馴致不足だろうと思ひ農場で走らせましたが、今度は、へたに興奮させるばかりで、農場へ行くと必ず興奮して走るようになってしまいました。そこで、他馬といっしょに行くようにしましたが、今度は、他馬にじゃれつき、蹴られそうに思うようにいきません。

雪が積もつて下が軟い日がでてきました。下がいいと割合まじめに歩き、速歩でも舌を出すものの、少しハミを引く感じがありました。特にキャパレットや不整地など起伏のある所では注意するせいか、舌も出さずに運動することができました。ところが、今冬は例年より雪が遅く、降ってもすぐに融けてしまいガチガチになると、古馬と違って慣れておらず、彼自身がぐくくして歩くのをいやがり、そこで強い脚を使うと頭を上下に振って反抗し、イライラしてくる始末でした。

一月半ばになり、ようやく根雪になると、馬場内でも思う存分運動できるようになりました。しかし、左右の脚で、はさみ込むようにして思い通りのコースは何とか通すことができるもの

①前進氣勢の欠如、②ハミをかまないで、舌を出して遊んでいるため安定感がない、③人間に対する甘えと不信感、④馴致不足、という問題が依然として残っており、恥ずかしながら、乗り始めてから全く進歩していない状態でした。②のために口と脚とのハミウケ関係が全く成立せず、また、成立させるだけの脚を人間が使えていないことも反省せずにはいられませんでした。③については、この時期において最も重要な問題であり、前述した通り彼の育成環境に起因し、かなり、ひねくれておりました。一年位前、人間が彼に対し、それまでと違って恐怖心を抱き始め彼を叱り始めた時、彼は人間に乗りかかり、怒られるといじけるといいう行動を繰り返していた

のです。これを矯正するためには、第一に悪いことと善いことの區別をハッキリわからせること、つまり、悪いことに対する徹底的な懲戒と善いことをした時の徹底的な賞讃を実行することだと考えましたが、それが今までうまくいかず、一歩まちがえると徹底した懲戒が彼に人間不信を抱かせ、賞讃が甘えを招く結果となり、経験の少ない僕は、懲戒と賞讃の難しさをひしひしと感じました。④については、雪におおわれた外界の変化のために外へ行っても走られるばかりで落ちつけることができませんでした。

彼を運動させるにあたってもう一つ難しいことは、彼をいかにあきさせないか、そして、いかに反抗の機会を避けるかということでした。まず、ハミをすぐくいやがることから、口をもつ時間を短く区切ること、課業にできるだけ熱中させるために不整地やキャパレットを多く用いること、すなわち、馬の能力と騎手のできる範囲内のことを繰り返すようにしました。これは栗東に行った時に添田さんから聞きました。この時、同時に明4才の彼にとって今の運動量は少なすぎるといふことも感じました。小栗さんからもハミを遊ぶことなど気にせず、とにかく脚を使って前に出し、くたくたになるまで運動させ、甘えの入る余地をなくさせないとよくなっていかないと注意されていましたが、全くハミに手応えのない状態でやってみても僕には馬がどんどん不安定になっていくばかりでうまくいきませんでした。舌を出すだけならいいのですが、舌をぐるぐる回すので、手には雑音ばかりはいってきて、その状態ではハミを口にあてるばかりだったのです。

そこで、一日の内少しでもハミを噛んでいい動きをさせた方がいいのではないかと思ひ、彼があきる前に馬場内で運動をやめ、外乗へ行ったり、切り上げたりして、前進氣勢を持たせた状態のみ運

動をやるようにしました。しかし、これによってケンカすることは少なくなったものの、馬を思い通りに動かしているという感じはなく、馬も従順というよりは、馬が運動したい時だけ運動しているといういわば、馬の全く勝手であり、表面だけケンカしていないというだけであることに気づき、岡田監督に相談して騎乗していただきました。相変わらず舌は出していましたが、それでも横を向いたり頭や口先を上に向けて反抗することもなく、また、巻乗りなどもスムーズでした。初めて後退をやり、その後、少しの間は舌を出していませんでした。監督が乗った後、以前から、とうらくの怪革が少し長くてハミが少しゆるいのではないかと思っていたので聞いてみたところ、やはり少しゆるいのではないかといいことで一穴短くしました。この後騎乗してみると確かに前よりも安定した感じで手応えがあったのです。今思えば、全く初歩的なミスでした。北離にしてみれば、支点を求めたくても、ハミがゆるく、騎手の拳こぶしの悪さが、このためにより大きく影響してしまったようでした。恥ずかしい話です。岡田監督も忙しいらしく、二度騎乗していただいただけでしたが、天の助けを得たという感じで、アドバイスを参考にしてみましたが、①ハミ受けを覚えさせるために停止・後退・発進を多くとり入れる。②輪線運動を多くとり入れ、内方脚を強く使う。③外乗は、人間に頼ってくるまでは行なわない。馬場内でイライラさせないように、運動を工夫する。④に関しては、特に後退からの発進を素早く、スムーズに、そして大きく出すことに注意しました。ここで騎手が馬上で小さく丸くならないように腰を張り、少しの体重の移動に反応するようにしました。このような方針で行なってもくと次第に動きもよくなり、舌でガチャガチャとハミを遊ぶこともなくなり、あちこちを見回すこともなくなり、ある程度、運動に集

中するようになってきました。乗っけても以前のようどこへ行かかわらないという不安定な感じもなくなりました。

また、同時に、人間への信頼感と従順さを養うために調馬索を始めました。調馬索の方は二年目の北畑が西川や成田の協力を得て行ないました。最初はかなり手をやいたようですが徐々に言うことをきくようになり、以前、練習前での曳馬では人間にかみついたり、立ち上がったたりして、まともに歩かすことができなかったのが、最近ではようやくスムーズにできるようになってきました。

このようになってくると、速歩・駈歩と運動量も増えていき、運動に集中している時間も長くなっていました。駈歩は、最初、いつも拍車を入れていないと持続せず、強く入れると反抗して止まったりしましたが、そのような時には尻鞭を入れ、とにかく前に出しました。強く拍車を入れられないようにしてやっていくうちに駈歩もスムーズに行なうようになり、発進も持続も拍車を使わなくても歩度伸縮（幅は小さいが）もできるようになりました。駈歩の回転も徐々に小さな巻乗もできるようになりました。

外乗もこの頃から、馬場内で運動した後に行くようになりました。行動範囲もどんどん広がりが、大学構内ならどこへ行っても興奮して走ることなくなりました。

舌でハミを遊ばなくなると、思い通りのコースもとれるようになってきたので、今度は逆鞭で頭を下げさせることを行ないました。初めはいやがったものの、下げたらほめてやるようにすると理解し始め、動きもよくなり、少しはハミを引くようになり、回転も頭を下げさせることにより、より安定しました。

この頃より低障害を始めました。以前もやっていたのですが、基本的運動が思うようにできなかつたのでやめていたのです。彼に最

低限求めていたのは方向とある程度のスピードをもった前進氣勢です。ガタガタのキャバレッティや低障害は以前より常にまたがせていたので反抗することもありませんでした。低い単一を馬場のあちこちに作り、ある程度のスピードを持たせ、回転を多く入れて、速歩・駈歩で通過させました。現在（二月下旬）慣れてきたので、下を注意させ首を使わせるために、平行や、その他変化をつけたものや、キャバレッティからの単一、低いダブルなども通過させています。駈歩飛越はいいのですが、速歩でやや力強さに欠けます。

現在、目標にしているのは、首の伸展低下とより正確な、前進氣勢をもった運動、障害・Soft Contactによりハミを引かせることです。正確な運動をするために一年生の部班にも加わったりしています。北雕は、まだ舌を出すこともしばしばで、ようやく軌道に乗ってきたばかりです。僕の技術の悪さと経験の浅さのために、このように大きくまわり道をしてしまいました。最近少しずつよくなっていることは確かです。また、疾風の腱炎の回復と共に北雕の運動の一部を北畑に任せていく予定です。

紳士服・洋品
大特価市

お気に着た

3階

暮らしを豊かにする

目池内

水曜定休日

南1西2 281-6161代
土・日曜6時30分迄営業

焼鳥
みねちゃん

札幌市北区北17条西4丁目 カネサビル1F
TEL 741-0717

美しい環境づくりがモービル石油の願いです。

Mobil

3つの味とワインの香り。

ワインケーキ

 ロバパン

株式会社ロバパン
札幌市白石区本通7丁目
電話:861-8131



喫茶パド

札幌市北区北18条西5丁目
本通り南向
戸川ビル2F
TEL 742-5336

離廐報告

ハイエイムの思い出

昭和五三年卒 山本裕介

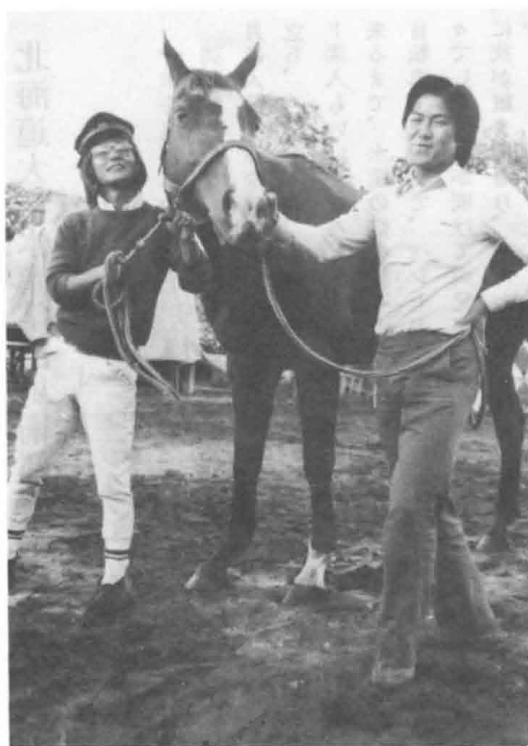
三月十九日に遠野のハイエイムと再会した。腱断裂を起こした右前肢は結合組織ができ、異常に太くなってはいたが歩行には何の支障もないようで安心した。怪我には強いエムがまさか歩けなくなるとは意外であったが、回復後はやはり元気で七百kg近くもあるうかと思われるほど肥り、耳を伏せたり馬房を蹴ったりして例のうるささを取り戻していた。

ハイエイムは昭和五十年一月に大阪服部乗馬クラブより入厩、水野兄が調教に当たられていた。小粒の馬が多い部馬の中で一際大きく目立つ体軀は馬の目から見ても脅威だったらしく馬場に放牧中は他馬は一步も近づかず不整地の方に固まって小さくなっていった。ただ一頭だけ大好きな馬が二枚目天龍山で、二頭が一つ飼桶に頭をつっ込んでいる姿がよく見かけられた。競技会でもエムは良きにしろ悪しきにしろ人目を引いた。少々粗雑ではあるがその飛越はハンターらしく豪快で底知れぬ力を見せつけるがブレーキがほとんど効かない。さすがの水野兄、平野兄も常に疲労感と恐怖感を強調されていた。エムにまつわるエピソードは多々あるが何とんでも脳裏から離れないのは北日本地区中に知れわたった「馬転」の事である。この災難（本当は騎手に責任がある）に遭ったのは実に水野兄を始めとする四人の調教担当者全員である。もともと足さばきが不器用なところに大きな体とそのスピードでは無理もないのかもしれない。

ギブスをはじめ跛行を余儀なくされたのは約三名である。

馬術的にも欠点が多く何かと日常管理にもいろいろ部員の手を煩わした馬ではあるが、それ故よけいに可愛いく、しかも行く行くは部にとっては頼りになる中堅馬の一頭になっただろうと思うと大変残念である。しかし他の多くの再起不能馬が廃用馬として去っていくことを思えば、繁殖牝馬として言わば第二の人生を送ることができるのは不幸中の幸いと言うべきであろう。ハイエイムの世話をしておられる菊地氏の話では四月にグランドマーチスを交配するそうである。どんな若駒が生まれてくるか想像できるような気もするが、今後誕生するハイエイム二世三世に断ち切られた「高遠なる目標」達成の夢を託し、できる限り応援してやりたいと思う。

ハイエイム号と山本兄(右)、中島兄(左)



元気な、ハイミー（遠野にて）
山形県遠野市松崎町光興寺二一六
菊地栄一



北海道大学水産学部馬術部活動報告

漁業学科三年 大 目 慶 一

一年を振り返って…。

調教報告だなんて。胸にぐざりと毒矢がささる思いです。昨年十月に入部するやいなや、藤原、児玉両兄は、二ヶ月の南方航海へ旅立ち、パレードは、東山の乗馬クラブに領ってもらった。俺なんぞド素人もいいところだから両兄が帰るまで、来年本学から中島君が来るまで、水産の灯を微々ともし続けてみようと思ひ、日曜日毎に自転車で東山まで、パレードに乗せてもらいに行つた冬の初めの日々でした。年が明けて両兄が無事航海を終え、パレードも久し振りに我が厩舎に帰り、一九七八年は始まった。一月半ばに、俺と同じアパートの植木、山本を部に入れ、五人で当番をかわるがわるし、主にパレードの調教というより両兄の指導の下に、我々三名の練習台となつてもらつた。それから、二月末、宮村、船越、畠山が加わり、一挙に両兄を除いて六名になった。パレード一頭では全員が練習するのは不可能なので、土、日に函館競馬場の乗馬用馬で練習させてもらつたりした。年老いた名馬と水産学部馬術部のOBの苦心のたまもので手にした学外にある借厩舎、ニセアカシアの木々にローブをはつたパドック。所々にコンクリートののぞく練習馬場。先人の馬術部繁栄の夢をたくされた施設であり、精神であった。しかし、俺は、先人の夢をこの一年間破ろうと思つた。俺には俺の今の馬術部に望む活動をしよう、先人の非難を甘んじて受けてみよう。幸い両兄が特設専攻科に進まれ、また一年指導を受けられ、週三度の当番日が練習日で、航海に出る漁業生がいない時は、食品生が助

けて夏が過ぎて行った。その頃、宮岡が入部。そうして日々は過ぎ、大会などに臨む事もなく、秋を迎えた。秋晴れのある日、第一回水産学部内馬術大会を開いた時、パレード、君は我々七名を乗せて頑張ってくれた。内輪の競技大会が終わり、乾杯していると、我々の中へ君がトコトコ駆けて来た時の君のいじらしさ、君の肌のぬくもりを我々は忘れることはないだろう。そして十月初旬、一週間の合宿をして、一年振りに開く事になった本年度我部最大の行事である弘前大戦に備えた。たった一週間だったけど、一番練習した日々であった。いよいよ十月十五日、君には寂しく厩舎に残ってもらい、競馬場で两部五人戦の貸与馬による障害であった。一年間未熟な我々を指導された両兄が就戦試験のため不在で、「とにかく全力を尽くせ、勝てる勝てる」という含みのある励ましの言葉を受けて、いざ、競馬場へ。水産学部応援団のすばらしい声援を受けスタート。「うしくそ。」「ちくしょう。」「そうだ。いいぞ。」「がんば。がんば。」「よし。よし。」「ひえい。」「日頃練習している半自馬であり、我部有利な点は、大目に見てもらうことにして、なんと戦前の予想をくつがえして我々は勝った。大優勝カップは、津軽海峡を渡ることなく、今、学生掛に、さん然と輝いている。そして、今二名の新移行者、沼田、水沼を加え、「来年は道自馬、北日へ」と意欲滞々なものもいて、水産学部馬術部史上最もいかげんな主将であったことを自他共に認める私は、おろおろしている今日この頃です。本学の皆様には、これからもいろいろとお世話になったり、御指導してもらったり、御迷惑をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

おふくろの味

食堂
まこと屋

札幌市北14条西4丁目

TEL 742-7794

ラーメンなら

北
龍

北18条西6丁目

TEL 742-1376

先輩寄稿

馬術部ペナントについて

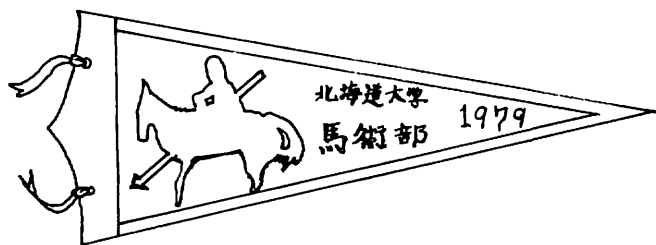
昭和二八年卒 芥藤善一

馬術部ペナントが希望者に販売されるという案内を戴きましたが、主将だけに贈られると聞いていたので、つい遠慮してしまいました。この伝統あるペナントが故太奏康光先生に贈られていることは部の記録にもないかと思えますので紹介致します。

太奏先生が御退官の折、永年の部長としての御功績に感謝する意味で、異例ではあるがペナントを贈呈することが出来るならば何よりの御礼と考えました。学内、市内に居られた諸先輩に御相談、というよりは御許可をお願い致したところ、皆様大賛成ということで早速準備にかかりました。先輩（半沢先生であったと思えます）のペナントを見本にお借りし、製作を原島洋裁店にお願い致しました。年号も西暦ではなく皇紀にいたしました。見本通りの一枚をお願いしたのですが、原島つる子先生は、ししゅうで作ると立派になると言われ、見本通りのと豪華なししゅうのと二枚を用意して下さいました。ししゅうは、つやのある文字がふくらんだ様になっていて実に見事な出来栄で、特に配色の良さは息をのむ程でした。松本久喜先生にお話したところ、あれはししゅうで作るものではないから見本通りのを贈呈せよ、と言われました。規格外というのであれば、小生が貰ってしまおうかと考えたことを憶えております。しかし、数日後、実物を持参したところ、教授室の黒光りのするデスクの上

に二枚を広げ、眼鏡を外してしげしげと見ておられたが、小生を見上げてニヤッと笑い、ししゅうの方を人差指でトントンとたたかれ「太奏先生送別会の折に主将から贈呈したところ、包をあけ、「これは」と絶句されたが、相好をくずし本当に嬉しそうな御様子でした。見本通りの一枚の方は、その年の忘年会の席で岡田光夫先輩に贈呈致しました。

此等のペナントは、OBから寄附をつのって差し上げる予定であったので、前もって代金を支払いに参上したところ、いらぬと言われ、結局は原島先生の御好意に甘えてしまいました。それだけ多くの方々の心がこもったペナントであったと思えます。



卒部にあたって

思うこと

三 好 功 悦

これを書きあげると、原稿書きは全て終り、また一つ馬術部との絆が切れることになる。滞納金はまだ残っているが……。

部報は、客観的な報告の場だと信じ、主観に流されないように努めてきた。しかし、どうやら最後に主観が許されるらしい。いっそ、メロメロに書いてやろうか。

僕のクラブ生活で、一大転機になったのはボーズの死だった。今さらボーズの話なんて、と思われるかも知れないが、どうせボーズの話が部報に載ることはもう無いだろうから、最後だと思って許して欲しい。

忘れもしない、二年目の冬、十二月二十日、月曜日

ボーズが、後に致命傷となる、顎を蹴られた日であり、夜のミーティングで僕がボーズのチーフとなることが発表された日である。この時には、骨折の事実を知らない。ボーズは、僕にとって初めての責任を負った馬であり、結局、ボーズにとつて、僕は最後のチーフだった。夢はふくらんだ。

翌日、家畜病院へ、診断は骨折

チーフとしての仕事は、看病に明け暮れた。当然ながら、チーフとして乗ったことは一度もない。しかし、一ヶ月の看病で、彼から

教えられることは多かった。それが、後にQとつき合う上で、大きな糧になった。

技術以前の、そう、部員と部馬の関係についてだった。

信頼関係という言葉をよく耳にするが、これほど漠然としたものはないし、また僕らにとつて、これほど重要なこともないと思う。

この根拠のなき、危っかしさは、人間が馬の態度からそれを察するよりないことによるのだろう。

骨を折ったボーズと、他の部員との交流が少くなると、ほとんど毎食、オカユを作って与えることによつて、明らかに僕を認め、甘え、何かを言いたそうにしているのを感じるようになった。曳き馬も街乗もできなかったけど、馬房の中でお互いに認め合った。

僕は彼の代弁者になりたかった。いや、なりつつあると思っていた。同時に、日を追うごとに瘦せ衰えていく姿を見て、信じなくなかったけど、クラブでの彼の地位が薄らいでいくことを感じた。つまり、クラブは福祉施設でもなければ、養老院でもないのである。ある投げ草の晩、先輩にはっきりと、部馬の経済動物的性格を言われ、反撥しながらも、認めざるを得なかった。

「手遅れである。」という判断によつて、ボーズの死は、やってきた。その意味では、傷つきながらもその生を、精一杯生き抜いたと言えるのかも知れないが、僕には、死の決定は違う意味を持った。

馬を愛することには無限の可能性があるが、しかし、人間にはあくまで部員としての制約があり、馬には部馬としての制約がある。信頼関係がいかに強くなるうとも、個人の問題であり、クラブにとつては、練習、試合の場で実現されなければ意味を持たない。

雑感

中島 孝 幸

代弁者になりたかった僕は、最後に彼の生を否定する一人となった。部員として、チーフとして、最後の注射の場で、彼の頭を通路の床に押さえつけた。アバレないようにと。

たとえ死ぬとわかっていても、親友の死を早める奴がどこに居よう。本人が死にたいと言うならいざ知らず、まして、最後の生への執着を見せているのに。

だから、Qとは本当の友達になりたかった。信頼し、尊敬し合える友達に。互いの制約の中でも、練習中も、試合中も、彼から降りた時も、矛盾することなくつき合いたかった。

彼の、北大での存在が否定されることのないように、試合ではゴールを切り、練習ではよい練習馬となり、何よりも皆から愛される馬になるように努力することが、責任であり、彼への友情だった。

馬との友情なんて所詮繰り言と言われたら、返す言葉を持たない。やはり、これも個人の内に留まるのだから。ただ、僕は信じているだけだ。

この間、Qが蹴られて左後肢の骨を折った。なにか運命的なものを感じる。幸い、六月にはカムバックするそうだが、現役のみんなには、自分のたった一つの間違いが、馬を殺すに充分なのを肝に命じておいて欲しい。

血沸き肉踊るといふ経験は、人間、生きていて、それほどあるものではないと思うのですが、総合馬術の野外走行などというのは、見ているだけでも、胸が熱くなるものがあるのに、実際に馬上にあって、その主体になった時の気持ちは、言うに言われぬものです。高い視点からの眺望、頬にあたる風、心地よい振動。いやいや、それだけではない筈。耳に入るのは、馬の息づかいに、蹄の音。なぜこんなにも馬って走るものなのだろうという感動が、まず第一にあるのでしよう。そこからすべてが始まり、延いては、馬との一体感に浸ることができるとは、そこに馬があって、人間があり、まわりをとりまくもののなかで、その二者だけの世界に入ることができるとは、そして双方からの語りかけがある。

私が、馬術部での生活を思い返して、いちばん感動的に胸をうつのは何かと、問いかけてみて、感覚的に生き生きと甦ってくるのはやはり、羊蹄との、そして、ドンホッパーとの野外走行です。

障害も何もない地点では、頸にだきつくようにして、ただ馬にすきなように走らせるのです。そうすると、それまでの、牧場のバイトの苦しかったことも、試合のために奔走したことも、そこでは、すべてが凝縮し、甘美な、馬と二人だけの世界に浸ることができるとは、

馬術部員たるもの、下級生のときに野外走行を見たときの感動を忘れずに、育てあげ、上級生になって、自らその一体感に身を置くことが大きな喜びなのです。

去り際の思い

木村 憲子

またたく間に過ぎてしまった日々の楽しい思い出も、最後の一年の痛痕の思い出に全てかき消されてしまう。馬と一緒に歩いたあの原始林の道。あそこを歩くのが大好きだったのに、トポトポと歩いた日々の記憶の方が多くなってしまった。トキに蹴られた芝生ももう彼と歩くことはなくなつたし、ドンにひきずられた道も、自転車に乗っていくばかりかの視線を向けるだけにきつてしまった。柔らかな日差しの中、羊子と駈け抜けた小径ももう通ることはないだろう。そして、その情景を思い浮かべるとき、いつも悔恨の情が執拗に迫ってくる。

四年間の部生活で馬達に教えられたことはあまりに多かつたが、教えられたままでそれる馬に返すことが出来なかつたのは残念でしょうがない。四年間に多くの馬達が去っていった。私達が自らの手で殺した馬もいた。去る時の彼らの瞳は、何を訴えていたのだろうか。心の底から、「長い間、ごくろうさま。」とお礼を言えることができたのだろうか。馬という生き物を扱っていながら彼らについて無知であつたし、彼らを通して教示される「馬術」に対して私は真摯であつたろうか。馬を酷使したの一言で片付けられてしまうのではないだろうか。彼らとの思い出に浸ろうとする時、いつもこの暗い雲が翳りを落としてしまう。

男性の多い馬術部生活での四年。部員としてチャンスを与えられた最後の一年も思うようにできなかった。こうした私ができることではないかもしれないが、女子も部員として同じ目で見たいと

いいたい。女子も部員としての意識を常に持って欲しい。私の失敗を良い見本として、頑張っていて欲しい。私のような反省を残すものが、二度と出ない馬術部であって下さいと今は願うだけである。今後の北大馬術部の活躍を願ひ、ペンを置きます。

出 世 兜
記 章
記 念 品
手 拭
タ オ ル
メ ダ ル
ト ロ フ イ
バ ッ チ
カ ッ プ
附 属 品
旗 幕 幟
腕 章

各種製造販売元

禮式国旗掲揚器発売元

株式会社 禮 山

〒060 札幌市中央区南1条西7丁目

TEL 札幌(011)大代表241-1641番

受信略号 「サツポロ」ヤマレイ
取引銀行 拓 銀 本 店
振替口座 小 樽 2 9 0 9 番

[卒部生]



左より 木村姉、中畠兄、三好兄

[3年目]



左より 吉田姉、成田兄、西川兄、国枝兄、島村兄

〔2年目〕



上段左より 北畑兄、石黒兄
下段左より 高橋兄、松岡兄、篠田兄

〔1年目〕



上段左より 門脇兄、井上(京)兄、雨宮兄、根岸兄
下段左より 折橋姉、今姉、糸山兄、井上(淳)姉、横井兄、大久保兄

馬達



北燕号



北将号



ドンホッパー号



北騮号



羊蹄号



北楽院号



北姫号(左) と 天龍山号(右)



疾風号



スターライト号



部犬キョン




北美号

コンパ、クラス会に
雪印パーラーの
三階会合席を
ご利用下さい。

1,500円より種々調製
致します。

5.6名様より70名様まで

 雪印パーラー

中央区北3条西3丁目
☎251-3181

環境測定調査（大気・水質）
測量調査・海洋観測調査
都市計画・交通計画

日本データサービス株式会社

本社 札幌市東区北十三条東十五丁目
高木ビル2F
TEL 七八二一六六五

日本中央競馬会

札幌競馬場

札幌市北14条西19丁目
TEL (721) 0461~5

場長 大野喜啓

自己紹介・他己紹介

卒業生の部

木村 憲子 姉

四年目

中島 孝幸 兄

四年目

眩しい太陽
馬の汗と私の汗
もう過去のことはすなの

どうして日焼けって残るのでしょう。

私が姉の紹介を書けるなんて。ああ、なんと光栄な事だろう。今の私の胸は感激にうち震えています。姉はとにかくスタイルがいいのです。特にアンヨが長いのです。姉のあとに馬に乗ってショックを受けた男子部員も多いことでしょう。しかし、そのアンヨは、めつたに我々にお見せくださらないのです。これはそのまぶしさに我々の目がつぶれてしまうのではないかと、姉の暖かい配慮なのでしょう。か。数少ない四年目の中で、紅一点として頑張ってこられた根性はみあげたものです。本当に御苦労さん。来年も学校に残られるなら、ぜひ遊びにいらして下さい。

我がクラブにおける女子部員の理想の姿を、姉の中に見つける事ができる。何に対しても妥協することがなく、作業などでも、男が

顔負けするくらい熱心にやられ、かつ、女性としての魅力を十分に持ち合わせています。と私は思うのですが、他人の事なので、本当はどうなのかわかりません。とにかく四年間御苦労様でした。

とうとう、部報に出るのも四回目。まあ、他の人が、どんなことを書いているか、篤と読んで下さい。

ジャイアントの王選手が偉大だとは日本人々皆言いますが、北大馬術部の中島兄も王選手のように偉大なのであります。

昨年の北大馬術部の成績は少々不振気味でありましたが、その中で中島兄はただ一人、国体、全日本、全日学とドンホッパーに乗って活躍され、まさに我がクラブのエースでありました。

誰からも好かれて、敵を作らない温厚な人柄といい、青白く静かに燃える闘志といい、ひたむきに練習に励む姿といい、がっしりとした容貌といい、まさに兄は北大馬術部の王卓治でありました。

まさに馬術部のお父さんという感じ。ドンちゃんに乗って、障害を飛ぶ姿は、そのお身体と共に雄大そのもの。下級生をつつむ優しさ、作業、当番にかけける情熱は、見習わなくてはなりません。一年目の日高合宿に、わざわざやって来て下さった時のあの笑顔は決して忘れられないものです。

粗忽な生活が終ってみて、こんな僕でも結構、学生生活にも溶け込めそうです。おまけのあと一年は、深く静かに潜行して、やせたソクラテスでも目指しましょう。

そういや、大飯も食べられなくなったし、肝臓をこわして酒もダメになりました。

三好兄は、北大と畜大の一年目の箱番競争に、男のメンツをかける、とてもユニークな人であります。しかしながらふだんの練習では、兄は私たちにとても大きな存在感を与えます。兄にどなられると、すごく恐いのですが、何故か安心感が残るのです。最近兄もあまり練習に来られなくなったので練習が寂しく感じられます。兄に匹敵するような大声の持ち主はなかなか表われそうもありません。パレンタインの日に生まれたかわいそうなかかわいそうな人。今年もきっとダメだったでしょう。来年こそ花を咲かせてあげましょう。めがねの奥の小さい目がキラッとうれしそうに光ります。

現役員部の部

国枝保幸兄

三年目

強い意志の下に入部したわけでもないし、今まで部活動に熱心だ

った方ではないけれども、離れられずにここまで来てしまった。ミヨコは好きだけれども、馬術を追求する気があるわけではないし、一人一人の部員は好きだし、クラブをやめようと考えた事はないけれども、クラブ活動には喜びよりも辛い事の方が多かった。そして今が一番辛い時期かも知れない。

下級生としてクラブに生きた時期、自分のしていた事に大きな後悔はないけれども、上級生となった自分にギャップを感じざるを得ないし、このギャップを乗り越えられるまでは僕の口は重いままだろう。

まことちゃんは、愛車レオーネに乗っていますが、愛馬ミヨコにはあまり乗りません。(きつい冗談)よくほけっと他の事を考えながら運転するので、いつ事故を起こすかわかりません。まことちゃんは、こんな頭で何故、医進に入れたのでしょうか。今回の期末試験では、いっつになく必死で勉強していましたが、所詮、頭の悪いのはどうしようもなく、受ける試験がみな(いや失礼ほとんど)不合格なのです。まことちゃん、がんばって/どんなに苦しくてもくじけてはいけません。あなたは恐しくも、医者になるかもしれないのです。お願い/世の人の為に医者になるのだけはやめて/でも医者になれなかったら、あなたは何にもなれないのね。かわいそうな人。まことちゃんは、主務というとてもまことちゃんには酷な役職についていますが、持ち前のいい加減さで何とかやっていますね。今年、ミヨコちゃんといっしょに東京へ行きましょうね。サラバ。

ズベツといおうか、ヌボーといおうか、はたまたポケタンといおうか、あの顔つきがなんともいえません。ときおり知性の片鱗をの

ぞかせることもありませんが、あれは本物なのでしょうか。

やさしい人です。けど何気なくきついこと、シビアなことも口にします。

島村 務 兄 三年 目

今年が最後のチャンス。とにかく一発、どでかいことをやってやりたい。

時折見せる奇行には目をつぶることにして……人当りはかなり良いようで、馬を見つめる目も人一倍穏やか。とても優しい人です。どんな獣医になるのでしょうか。

アッ、ガキデカだ。ちがうよ助清君だよ。なんだ島ちゃんじゃないの。どうしたの？その足……

彼、獣医学部ストレート。かしこいんだよね。ほら、頭大きいだろう。

自称フェミニスト、ロマンチスト。確かに、純情なんだね。だから台に登ってスポットライト浴びたりして……

馬術部のトラボルタと呼ばれている。ディスクに行けば見れるよあのタコおどり……

こんな事書いても顔を真赤にして「よしてくれよ。俺の人格って、ものが……」と言いつつ、笑って許してくれる人です。そうだろう島村！

成田 慎 二 兄 三年 目

入学してから早三年。なのに教養一年生。この違いに最近ようやく気づいた。そのとたん、これは大変だ、ヤバイ、どうしよう、不安な日々を過ごした。でもそれは東の間の事だった。ある日、ひょっとしたら自分はバカなのではないだろうかという考えが、ひらめいた。そうだ、自分はバカなんだ。それなら万年一年生もあたり前だ。なあんだ、そうだったのか、バカだったんだ。あーよかった。というわけで、また平和なワンパターンの生活が始まったのであります。

彼もついに最上級生。ピンクレディの小さなバックを持って喜んでいた彼も、今では下級生にとって怖い存在。馬場から彼のどなり声が聞こえますよ。今までの経験を生かして頑張って欲しい。スターライトと共に飛翔せんことを。

「いつもニコニコニコリと」のイメージから脱皮を計るかのよううに三年目角刈りトリオの一角として鬼の副将をつとめられる。がしかし、練習が終われば、一年目を遊園地やスケートに連れて行ってくれるなど優しい兄です。練習の時と他の時とはまったく態度を変え一年目の理想の先輩像としてあがめられています。

西川 理 一 兄 三年 目

いろいろやりたい事はあるけれど、結局一つの事しかできないみ

たいです。

弱冠22才にしておなかの出っぱりが気になるこの頃です。

愛馬北燕にまたがり、恵迪裏を走るその姿は、ジャングルの中を牛に乗ったゴリラが動物達に彼の豪快さを見せているようである。兄は、その豪快な感じのする反面、とても細かな神経をもって部員を見つめてくれる優しい人である。馬場の中で、雷のごとく大きな声はあまりに大きすぎ、僕らの耳を右から左へつつ抜けていくようである。そんな大きな声で、コンパの時には、寮歌の前口上をやる。秋に学部移行なされてからは、以前とは違って、きれいな服を着るようになったとか：お酒をたくさん飲む時は、おしめをして下さいね。

現在、馬術部の総大将。迫力もでてきたようです。あのツバメ君も、兄が乗ると、目をキラキラさせて、鬼気迫るような雰囲気、漂わせています。

華麗さという言葉は、あてはまらないけど、デカイずう体と、せり出した腹のおかげか、力、力のオンリーパワー。

でも、フランス語の単位は、早くとったほうが、身のためですよ。

吉田 円 姉

三年 目

時期はずれの厄病神にとりつかれ、何やかやと皆々様に御迷惑かけております。特に三年目諸兄には心より感謝しています。最後の

一年、初心に返って張り切りたいと思っています。

冬の間は、凍傷ガールになって、苦しんでおられたが、今は、全快。毎日頑張っているようです。四年目の紅一点なのに、なぜか、それを感じさせないのは、他の男がだらしないうからでしょうか。アホな男どもを相手にして、どこかさめた知性的な視線を感じるのです。

冬の間、持病の凍傷のせいで、ずっと姉の顔を見ることができなかったのですが、春とともに、真赤なほっぺをしたまんまる顔の明るい姉の姿が戻って来て、ほっとしています。何となく頼りなさそうな(失礼！)三年目諸兄ががちり支える緑の下の力持ちといった観が有ります。にこにこにこっとした笑顔の下に隠されているのは、一体何ぞや、と感じさせられることもしばしば。数少ない女子部員に良きアドバイスをお願いしたいものです。

石黒 直 秀 兄

二年 目

優柔不断で意志薄弱でずぼらでルーズで無頓着で無愛想で礼儀知らずで鈍感・横着でものごさでどんつくで眠たがりで寒がりで恐がりで甘ったれで鼻ったれのへこき虫で無責任で不真面目でちゃらんぼらんで不潔でだらしなくて中途半端でいいかげんで貧欲で意地蔵くて食いしん坊で頭の回転がとろくて間抜けて唐変木で朴念仁でむつつりすけべでええかっこしいで……

だから俺、自己紹介って嫌なんだ。

最近は、兄のトレードマークであった、サングラスとひげが無くなって、ちょっとさみしい気がします。

兄は、クラブの為に、ただそれだけのために、とうとう留年してしまいました。真相はどうか知れませんが。それほど、クラブに対して情熱を持っているのです。それから、兄は、本当にいい人です。お酒が大好きですが、すぐ寝てしまうので、ちょっといけません。

兄が面倒を見はじめてから、天ちゃんものんびり、落ち着いてきたようです。そう、彼の長所は、細々したことにこだわらない、ノんびリというかズボラだと思ふのです。いつもカリカリしては馬も敏感に感じるものです。

でも、もうちょっと、顔の、特にヒゲの迫力だけでなく、練習中に体の芯からにじみでる迫力に期待したいですね。

そうしたら、天ちゃんも、もっと力強く答えてくれることでしょう。

北畑 裕 兄 二年 目

自己紹介なるものは難かしい。何故なら私が今私をどういふ人間かを論じようとしたとき、あるいはこういう人間だという結論に達したとき、その結論はすでに誤りであろう。というのは私はこういう人間ではなく私がこういう人間であると考え人間だから、しか

しそういう瞬間に私はもはや私がこういう人間であると考え人間ではなく、私がこういう人間であると考え人間だと考える人間であろう。この過程にはきりが無い。以上の理由によりなかなかうまく書けない。「マア」ちょっといいのを書きたかったが、ダメだ。

前略、北畑様、私はあなたのような人間が好きです。たまりませんね。一見ニヒル、実は役者、ジェームズ・デインが柱三枝か、あなたはほしいどちらなの。思いやりがなさそうで、実はある。気が大きそうで実は小さい。何も考えない楽天主みたいで、実は悩み多い。だから頻繁にアルコール油を経口投与してあげないと、すぐ、錆びついちゃうそう。内に秘めた言いたい事をやっと思いで口に出せば、先天的言語障害のためか、誤解を招く。三年目の言語障害者と話すと、回りの者はチンプンカンプン。

昔は、駅伝にのみ生きる男かと思っていました。最近、馬術に對する内に秘めた情熱を感じます。まあ、ちょっと外に出して下さればいいのですが。でも、いつかはきっと何かやってくれろと信じております。

一言で言えば、いい奴です。

コンパでは他人の迷惑返り見ず、やめろと言うまで歌い続ける（実際は、やめろと言ってもやめないのだが）、マラソン大会では卒先して走りまくる彼です。今年クラブでもガンバッテくれると思います。

身長体重は去年と変わっておりません。生年月日も変わってないのです。したがってようやく二十才になったのです。そして性別もやっぱり牡のまんまです。しかし、中身は少々変わってきたようです。酒も飲むようになりました。コンパの時の歌のレパートリーもぐんと広くなり、目下、「演歌の篠田」で売り出し中です。住んでる所も馬場から歩いて三分のゆり荘に移りました。しかし、馬の上では、あんまり……(?) いったはいけねえ。

ところで、僕のアンネ○○○○薄型はどこにいったのでしょうかね。

演歌の星を目指しているのですね、お爺さん。お爺さんが腰をしつきと伸ばして騎乗している姿はなんと初々しいのでしょうか。馬上体操はもっと柔らかくいきましようね。

冬にそなえて、馬場の近くに住居を移された兄。部に対する情熱は、並々ならぬものを感じます。

しかし、一体あのスリムな体のどこからあれだけのエネルギーが出て来るのでしょうか。駅伝で、花のアンカーをつとめられた兄のゴールを切る姿は、感動的でした。

コンパでは、演歌一筋の兄。でもその地位もあぶなくなっています。一年目に演歌の星が現れました。演歌の帝王を目指して、頑張ってください。

最近、精神的にも肉体的にも疲労を感じます。もう先も長くはないでしょう。皆さん、私は一生懸命やっています。手を抜いてやるようにみえるかも知れませんが、年なのですすからいたわってやって下さい。一九七九年は、私にとって厄年です。北日学のステイプルで、人馬転でもして大惨事になるのでは……。その時は、ドン・ホッパーだけは無事であるように祈っています。そうすれば、誰からも恨まれないでしょう。

兄は、一年目男子の間では、「仏の高橋さん」と言われて、絶大の人氣を持っているのです。僕は兄の怒った声や、人の悪口を言っているのを聞いた事が一度もありません。本当に良い人です。やっぱり部内の最年長の余裕を持っている為でしょうか。

去年の兄は、石黒兄と共に、運転手として東奔西走、大活躍でした。今年は三年目として、試合に頑張って、我がクラブの未来を背負って下さい。おしまいに、同じ年寄同士の石黒さんと老人のじゃれ合いは、ほどほどにしましょう。もう年なんですから。

今や部内一の老人。通称「おじん」。年に不相応な若づくりの頭(外見のみ)。好きな事は、アンマをもらう事と、熱いお茶をすすする事。特技は、運転。免許歴五年のキャリアを持ち、馬運車の高橋として、馬術部内外に定評もあり、運送会社から声もかかっているとか……。

松岡 功 兄

二年目

昨年の自己紹介で、私の生い立ちを報告したので、今回は、クラブ内における自分を紹介します。私は、奇人変人ぞろいと言われる二年目の中で、唯一の一般型の人間であります。これといって悪い所はなく、あまり目立たないのです。朝の練習はさぼらず、もちろん遅刻もせず、学校の方も熱心で、授業はさぼらず、まるでクラブの鏡のような人間……数々の理想は高けれど、現実は厳しく、自分が生身の人間であることを痛感しています。しかし、やればできるの気持ちをおさえ、他人に花を持たせる心は美しいではありませんか。人間、陰の実力者として、緑の下の力持ちになれなくては……ね。

そろそろ競馬から乗馬に関心が移って来た様に見えますが、如何ですか。それとも、競馬の話し相手がいないだけかなア。
忙しい薬学部との両立、大変でしょうが頑張ってください。

松岡功。訳すと、松が岡にいましく立っている、となる。その通り、柔道で鍛えた、特有の足で、しっかり立っている。丸い顔と体を支えている。そして、しっかりと二年目諸兄を支え、将来クラブを支えていく事でしょう。

雨宮 俊之 兄

一年目

春、…春眠暁を覚えず、夏、…夏バテ、秋…秋の夜長
冬、…ナポレオンも冬將軍にはかてなかつたそうだ。今年は改めて次のごとく過ごしたい。

春…春はあけぼの。 夏…若者の季節。 秋…スポーツの秋。
冬…冬はつとめて。

一見するとヒッピー風のいかれぼんち。長髪でギターを弾く人間は、まあ大抵は麻雀狂いの遊んでばかりいる大学生。

当たらずとも遠からず………ってところでしようが、彼がそんないかれぼんちとちょっと違う点は、何と言っても馬術部なんてクラブに入ってるって事でしょう。

髪が長く、後ろから見たら女の子と間違いられやすいのですが、兄の足を見れば、ガニマタで小マタにスタスタと独特なスタイルで歩くので遠くから見てもすぐ兄だとわかります。兄は、とても人が良くいつも友だちがいっぱいいます。でも、子どもの頃からの学校嫌いが今だにぬけ切れず、回りの者が心配で心配でしょうがないのに、本人は平気なもので、下宿でふとんの中で丸くなっているのです。獣医目ざして北大来たんだからもう少しがんばってください。

糸山 光紀 兄

一年目

糸山です。ただ一言、ぼくは決して怠慢ではありません。

追信、大久保よ、互いに怠慢と言ひ合うのはやめよう。みじめになるだけだよ。まあ、君が怠慢と言へるのは僕だけだろうが。

糸山兄は、恐らく馬術部の中で一番怒鳴られている人間でありましょう。何しろ練習風景のものすごさ。三好兄でもいようなものならもう常人が正視できないほどの被攻撃ぶり。ところでこれは練習中の話。練習が終わると彼は一転して神様、仏様になります。何故なら我が部には煙草を吸う人がたくさんいるのに自分では買わない人が多いのです。彼はそのような愛煙家にとってイエス・キリストの再来とも言うべき救世主なのであります。

彼は武田鉄也のファンである。そして武田鉄也と同じく坂本竜馬が大好きである。彼が酒を飲むと、(普段でもそうだが、)愚痴やら不満やら文句がやたらと飛びだし、「頭っ来た」というせりふが幾度となく繰り返されるのである。しかし、一見してわかるように彼は決して怒れる若者などというタイプではない。実にやさしいかよわい男である。そんな彼が、武田鉄也と同じ九州男児とは絶対見えないのである。

井上淳子姉

一年目

さあそろそろ、どっこいしょっと。それでは、そうね、よいしょっと、事あるたびにかけ声かけて、あーあ、ふうっとため息つかつにはいられない日々を送っています。

ウフフ。彼女は何事もこのように笑ってごまかすのです。顔に似あわず、いやいや似あって、神経が体のように図太く、当番も遅刻したり、さぼるのですが、いっこうに気にしないのであります。ウフフ。しかし、思い出されるのは、岩見沢での関門飛越競技のゴール前の直線で、北燕に鞭をひとたたき入れた時の闘士。一年目の男子には見られない迫力がありました。あの時のツバメの焦った顔、そして彼女の誇らしげな顔。ウフフ。まさに人馬一体、お見事三位入賞ノ(ホメすぎ)南国宮崎の太陽を浴び、すくすくと育ったたくましい体。お馬さんの為にも、飛び乗りを手伝うか弱い上級生の為にも、ごはんは必ず、小さなチャワン一杯にしましょうね。ウフフ。

彼女の十八番御存知ですか？ 料理？ いえいえ歌？ なかなか 実はず々々、お酒なのです。恐いですねえ。一年目の中では男の奴よりも強いと思える程。なにせ家から送ってくるのがウイスキーなんですから。コンパで彼女に酒をつぐのがもったいなくて。いやほんま。

井上京兄

一年目

ヘソは体の中心であります。そしてヘソが出ていることが鞍上でのバランスを得るについていかに有利なことであるかを証明しようと、私は日々研究しているのであります。この証明が成された既には、私の出ペソは、誇るべきものとなるでしょう。

昔々、インドネシアの森深くに、まっ黒な赤ん坊が生まれました。まゆがこく、目があまりにも小さく、そのみにくさに母親は驚いてしまいへそをおを切るのを忘れてしまいました。彼は一日にごはん10杯食べ、すくすくと育ち、おなかも出てきました。彼はこれではいけないと思って、畜大馬術部に入って一日中、飛び乗りをして、やせようと思いましたが、それが、不幸の不幸に、コンピューターのまちがいで北大に受かってしまい、今にいたる・・・

世の中の醜いことは全然知らない、という雰囲気を持つ、典型的好青年です。いや、見ていても、持ちまえの素直さで消毒してしまふのかも知れません。非常に素直で、丈夫な新馬といった所です。これからの調教だけで、すばらしい可能性を秘めていますよ、彼は。今は、脚を使ったら一生懸命走り、障害に向けたらとにかくまくぐ、という段階で、ハミ受けはまだまだこれからです。

二年目になると、いろいろ軌躑が生じると思いますが、素直に大らかに伸びて下さい。期待してます。

大久保 道男 兄

一年目

困った、困った。自己紹介といっても自慢できることはないし、かと言って自分の欠点をさらけ出すのは我がプライドが許さないし……。何しろ車の運転適性検査でも「自分を良く見せようとする傾向あり。」と出て来た位だからかっこいい事を書きたいのだ。

まあ、自分を素直に書くとすれば、自分では真面目なつもりだが

人から見れば怠慢で、一番の楽しみといえば睡眠で（そのせいかよく当番に遅れて……）要するに欠点だらけなのでこれ以上墮ちる心配が無く、つまり将来が非常に有望に有望な弱冠一九才の少年であります。ん？

彼を語るに多くの言葉はいりません。いつも部室の隅のふとんの上に、三千八百円のジャンパーを着たまま、煙草をふかしながら、ポケーとしている様子が目に浮かびます。彼にはどこか悠然と構えた、大陸的な、悪く言えば抜けた所が感じられるのです。やっと仮先にも通ったのに、もうすぐ自動車学校に入って六ヶ月、放校にならないようがんばって下さい。

沈座し、ジッと一点を見つめる彼の表情に、計り知れぬ知性と深い思慮を期待する事は大きな過失であるという命題を入部数カ月で証明してくれた。夏の合宿に際しては、怠慢トリオの欠かす事のできぬ存在として活躍、今だに衰えを見せずその名声を頑に守り続けている。しかし、同クラスの馬術部のホープであるK君との点取り合戦に於いて常に勝利を収めている事に関し、最近部内より秘かな非難を受けているようだ。

折橋 由美子 姉

一年目

身長は、といえば、クラブで最小。体重は、たとえば、なぜかクラブで2番目に最小。

特技は飛び乗りに大好きなマラソン。

スカートをはいたら、「普通の女の子みたいで似合わない」といわれて以来、ごくまれにしかはかない。いつ、少女とよばれる日がくるのか、まちこがれているこの頃……

クラブにユミコと言う名のオ・ン・ナの子が二人いる。そしていま一人ユミコと名のつく人がある。この三人目のユミコが折橋ユミコである。筆者はここで第三のユミコの性別は問題にせぬ事にしよう。さて、本題に入ろう。このユミコさん、幼い頃外国で育つ。そのせいではないと思うが、他の人とは違った歩様である、又人並みに走る事が出来ない。しかし英語、フランス語、日本語の三ヶ国語をこなすと言うからうらやましいかぎりだ。現在獣医を希望し着実に歩みつつあるようだ。又今年の一年目の中で鞍数は、現在トップ。

ものうげで、けだるさと眠気をおびた瞳が人を感わします。見かけによらず、なかなかの才女です。もちろん英語はバッチリ。でもそんな彼女にも大の苦手なものがあるのです。合宿中は気のせいでしょうかもひきつっているようです。そう、恐怖のマラソンがあるからです。走り終わった後は息も絶えだえ、死にそうな顔をしています。折橋さん、まだまだ先は長いですよ。頑張ってくださいませ。

加藤 夕美子 姉

一年目

クラブにあまり顔を見せません。冬が越せるかあやぶまれており、

最近も某OBに「なんだ、加藤、まだやってたのか」と言われました。怠慢です。ときどきウツ病の症状があらわれます。ぶきっちゃんです。女の子がこれじゃ困りますね。ただいまツバメ君に片想い中です。

仔猫ちゃんか、部内のペット犬、キョングキか。でも、それじゃあいけません。もっと強く生きなさい。あなたの下半身のごとく、しっかりと地球の引力に任せて。キョングキのように、しっぽを振って隅に隠れていてはダメなんです。もっと自分をぶつけてもらいなさい。きつとうまくいきます。そうしないと、小池先生に実験動物として獣医へ連れて行かれちゃいますよ。そしたら、コンパで、ダンスをいっしょに踊れなくなっちゃうじゃないですか。

注・キョングキ……愛犬キョングキが生んだ仔犬で、だれかが加藤と名づけた。

愛知県は刈谷の産、かわいいい声でいつもみんなを魅了しています。作業など、手を抜くことが大きらいで、ひとりでモクモクと働いている姿をよく見かけます。(ちょっと、もちあげすぎかな?)

これ以上、何を紹介しましょう。へたな事を書いて後で何と言われるか、それが恐い。

他の馬などみ向きもせず(?)ひたすらツバメくん恋している彼女です。ツバメくんとはじゃれ合ってる時の楽しそうな顔といったらありません。

矢田部ギルフォード性格検査の結果、自分は典型B型と判定された。B型の主たるファクターを挙げてみると、情緒安定性は不安定、社会適応性は不適応、向性は外向となっている。ちなみにB型は、「ブラックリスト」の頭文字「B」を採っている。日本語で云えば「暴力型」であり、やはり頭文字は「B」となる。少年鑑別所に送られて来る人々は、このタイプが圧倒的多数を占めるという。

ここで予め断っておくが、自分は行動科学科に移行する計画はない。あくまで歯学部狙いである。

門脇陽二、生まれは島根県だと言うがきつとウソだろう。彼が生まれた頃はそのような地名等はなかったろうから。どんな具合にしてか知らないが、間違って現在にやっ来てしまった。当初はさぞ現代社会に戸惑ったことだろうが、人間の環境に対する順応性は恐ろしいもので、今では結構現代人並みの生活をしているようだ。しかし、皆さんも気づいておられようが、彼の言動の端々に時々現われる私たちには理解できない物は何か？私はこのことについて考えた結果前記のような結論に達したが、皆様はいかがかな？

自称十七才。愛称「陽ちゃん」。島根弁保存友の会会員。竹内まりやファンクラブ札幌支部長。演歌の星。あだ名付名人。等々、数々の肩書きを持つ。

その私生活は、彼の過去と共に謎に包まれている。

その容姿、生きた化石のごとし。ついこのあいだ直立二足歩行を始めたばかりの足を、せわしなく使って歩く姿が印象的。一年目唯

一の文類。騎乗日誌の初期作品に迷作多々あり。少々ずうずうしいのが欠点。しかし、その心海のごとし。いったい、どんな先輩になるのやら。

川 越 マ ヤ 姉 一 年 目

山陰の片田舎から、北海道にアコがれてはるばるやってきました。人並みはずれてひどい運動オンチと自他ともに認めていたはずなのに、なぜか馬術部にはいってしまいました。

馬は大好きですが、なかなかうまくつきあっていけないのが、悩みの種です。

ひき馬でいく農場で、夕日を見ながら、北海道は広いと感激している、そんな人間です。

現在、一年目女子の中で、唯一人、かの有名なドンホッパーに飛び乗れる人があります。一見、おっとりしているようにみえますが私の飛び乗りをバカにする所など、なかなか鋭い所もちあわせているようです。水族館に就職するのが夢だという水産類の女の子です。

一年目女子の部で唯一跳乗りができるらしい。一年目水産類のなかではすんなり移行できそうな唯一の学生。

「……………視よ、蒼ざめた馬あり、これに乗る者の名を死といい、黄泉これにしたがう……………」

―ヨハネ黙示録、六章七節―

部犬キョンの子で、まだ一才になっていません。身体は細身ですが、このクラブで果食えば何でも食べられるようになりますから、いまに遅しくなります。歩き方を覚えたばかりでヨチヨチヨタですが、いつの日にか野山を自由に駆け回ることができるようになると毎日頑張っています。最初のころは、思い切りジャンプしても馬に乗れなかったのですが、最近は低い馬なら乗れるようになりました。将来の私を楽しみにして下さい。

キョンの子、コンでした。

夕張出身の道産子。耐寒性がきわめてよく、冬に元気になる子。少女マンガが大好きで、いつも、もうこれでやめると言いながら、今だに読んでいる。腕立て伏せが全くできない細い腕と、垂直ジャンプが30センチしかできない細い肢をしていて、かよわそうに見えるが、気は強く、キツイ事を平気でポンポン言う娘。とにかく筆で書きつくせぬ味があります。一度おためしを。

この一年自己紹介ばかり。今度もまた、根岸泉、桐生出身、得意

なことはくしゃみをする事、好きなものは馬……………。よろしく。

美しきもの、彼の歩く後ろ姿、醜きもの、彼の笑う前姿。これは冗談だが、彼の特技は、自分の名前を言いながらくしゃみをする事とと、ぼやきである。何かにつけて、素直でなく、おつおつとぼやき、「ネギシー。」とくしゃみをするのである。一年目の中では、本当はどうだか知らないが、なかなかの秀才だそう。学問に対する熱意もなかなかのものだ。その熱意を他の人にも少し分けてあげれば、ドッペリも少なくなると思うのだが。また彼は、なかなかの運動神経の持ち主で、部内の運動大会ではけっこう活躍している。ただ、乗馬に対する運動神経がまだ開花していないのが残念ですね。

二代目成田兄のごとくいつもニコニコニコリとした態度で人と接しています。だが外面とはうらはらに非常にしっかりとしており、獣医の星になろうとがんばっていました。しかし、このごろ他の一年目に染められてきており、だんだんと変化してきました。でも私に言わせれば本来の姿の現れと思えます。先日島村兄のよく行く所へ行ってすぐショックを受けていたようでした。そんな純粋な青年です。

山が好きで、北海道に渡ったはずなのに、なぜか今は、馬の散歩係。家に帰った時、犬の散歩をさせたが、どうも物足りない。

この前、ひき馬をしていたら、前から来た女の子二人が「馬と話してみたいね。」と、笑いながら側を通っていった。幸せなひととき。でも、早く散歩係から昇進せねば。

私がまだ青年寄宿舎という寮にいたころ、同室に入舎してきたのが彼です。そして肉体労働部としての馬術部の姿を見たはずなのに、入部させてくれと言ひ、私が勧めなかったにもかかわらず、入部してしまっただから、かなりの変人です。彼の容貌は一口で表現すると「ヌボー」という感じです。最近はその犬キョンとの間に息子ができたようです。そのとばけた容貌にもかかわらず、仲々のプレイボーイなのです。ダンパで知り合った女の子とデイスコに行き、別の女の子とチークを踊り、東京に遠征で行けば、女の家から馬事公苑に通ったという。人は見かけによりませぬな。

遠くから見ても、近くから見ても、横から見ても、前から見ても、後ろから見ても、ヌボーとした兄。あの厚いレンズの奥でやさしく光る彼の瞳を見ることがあります。ほそほそとはにかみながら話す彼の慎重さを知っていますか。きよんに飯を食べさせている彼の姿を御覧下さい。それが正しく彼の真の姿なのです。気はやさしくて力持ち、彼にびったりの言葉です。

横井 太兄 一年目

四国は香川の高松から、海越え山越え北海道へ、やって来ました

この私。人付き合ひの悪さもあって、寮のベッドでゴロゴロと。ついに嫌気がさしてきて、忘れもしない十月半ば、ひょんなことから馬術部に、入部したのは良いけれど、寝起きの悪さと怠慢癖で、鞍数未だに××足らず。それでもどうか自己紹介を、部報に載せていただくことに、相成りました次第です。フトシちゃん感激!!

十月に入部した彼は、いつも控え目で、目立つ存在ではありません。コンパの席では歌もよく飛び出し、かなりのレパトリのようです。酒はいつも控目（実際にはかなり強いのでしょう）。まだまだ馬術部の色には染まっていけないようで、本人と周囲の一層の努力（？）が望まれます。

黒緑のメガネに学生服姿で、部室に立っている彼を見たとき、あれ、高校生が見学に来ている、と思った。したら翌朝練習も見学に来ていた。したら高校生じゃなくて北大生だったので。しかも恵迪寮生とは：とても信じられなかった。寮生だけあって、Y兄やN兄のように変人で、学校の方も先輩方に逆らうことなく、順調に寮プラス馬術部ペースを進んでいます。

馬の自己紹介・他己紹介

スターライト号

えっ、私の自己紹介がほしいですって？いいですわ、私の姿が目
に浮かぶように紹介してあげますから。私の名前はスターライト、
あの美しい山々と緑の牧場が広がる日高で生まれましたの。歳？そ
んな質問、私のようなレディーに対して失礼でございますわよ。（と
言って耳を伏せる。）私の毛は輝く栗色、だけど冬の間のあんな乾
草ではせっかくの毛並みも衰えてしまいますわ。もっとおいしい乾
草はないのかしら。（と行って歯をガチガチいわす。）それに昼間
は狭い馬繋台に繋がれたままだし、たまに馬場に出してもらおうとま
わりはうるさい人（馬の間違いか？）ばかりだし、私もういやノ
（とうとうヒステリーを起してしまう。）

羊蹄号

みなさんこんにちは。自己紹介させていただきますわ。私の名前
は羊蹄です。年は10才。これでも一児の母ですのよ。前まで、クラ
ブきっての美女の木村さんの世話を受けていましたが、今年からあ
のしの山さんのお世話になりますの。しの山さん、どうぞよろしく
ね。それからみなさん、私がひき馬のときあばれるからとこわがっ
ていらっしやるけど、最近は大変おとなしいのよ。でも、クローバ
ーが出てくるとどうなるかわからないけど……。昨年は出る試合ほ
とんど、ゴールを切らなかつたけど、今年はみんなといっしょに東
京へ行きますわ。きつと。

疾風号

皆、僕のことトキ、トキって呼びます。悲しそうな顔をしてるか
らと言って、皆僕の顔を見るとエサをくれます。僕ちっとも悲しく
なんかないのにー。だから、エサをくれる人は、優しくなめてあげ
るけど、そうでないと、服をボロボロに破ってやるんだから。曳馬
だって、草いっぱい食べさせてくれなかったら、メチャクチャ暴れ
てやるんだから。僕、元氣いっぱい、ガッツなんだぞ。今、足が
痛くて思うように運動できないけど、直れば、僕だって強いんだか
ら。

天龍山号

僕、天ちゃん。クラブで一番いい顔だと自信を持っています。ただ
最近、悩みの種が、ネックレスをいつもつけているので、髪の毛が
はげてきたこと。それでひげのおじさんにアートネーチャー買って
くれと頼んだら、何も悪いことを言っていないのに、僕を殴るので
す。それでも、僕、ひげさん好き。

ドンホッパー号

ぼくはドンホッパー。昨年の全日学ではぼくがあと10センチいや
5センチ長く跳んでいたら優勝できたのに、と思うととても悔しい。

今年は絶対優勝するからみんな期待してくれよ。ところでぼくの息子の北離だけど、ちゃんといいい馬に育ててくれよ。あいつとてもいいやつなんだ。ピートルズの「ジョンとヨーコのバラード」ならぬ「ドンとヨーコのバラード」を作ってくれたんだぜ。ぼくとヨーコのために……。今年優勝したら聞かせてやるよ。

北燕号

初めまして、北燕です。愛称はつばめです。しらじらしい名前です。蔭でうしと言われていることは知っています。ああ、角が欲しい！

オレは目方も重い動きも重いと定評があり、是非拍車を入れる必要があります。

若いので障碍馬としてこれからまだまだ伸びるだろうと自負しています。近いうちに満点に戻って来ましょう。

さあ、愛される馬、愛される人間をめざして、今日も元氣だ飼付がうまい。ではまた。

北楽院号

自己紹介させていただきます。僕の名前は北楽院、通称キユウ、です。皆キユウ、キユウといっただけかわいがってくれますが、うるさ

い割には何もくれません。僕がこうやってブヒヒヒと愛想よく呼びかけても、鼻の下に指を持ってくるだけで、（こうすれば僕の上口びるが条件反射のように空を向いてしまうのです。）ポケットにはおいしそうな燕麦の音がしているのに、何もくれずに行っちゃいます。というのも、この前、馬場でSおばさんの気にさわるような事をして足を蹴られてしまったからです。だから毎日退屈な一日です。食べる事が唯一の楽しみなのです。だからにんじんとりんご、僕の飼桶にたくさん入れて下さいね。あゝあ、だけど青い牧草の上で思いつきり駆けまわりたいなあ。

北姫号

私は北姫、ミヨコって呼んで下さい。トレードマークは額の三角おにぎり。犬から産れたなんて悪口を言う人もいますけれど、愛嬌があるという点ではだれにも負けないつもりです。入部当時(?)は怪我ばかりしてたけど、最近はそのもなくなって、元氣に馬場の中を走り回っています。私、北大馬術部に特に不満はないのだけれど、朝夕の飼いつけ、もっとはやく、食べさせてくれたらと思うのよ。でも、私北大のホープだから、がんばらなくちゃな。

北将号

みなさんは悪臭を放つ腐敗物を見ると、どういう目つきをしますか？ そう、それは私がみなさんを見る目つきと同じでしょう。私のいいたいことはこれでわかっていただけたと思います。私は声毛の馬です。WHITE HORSEです。きたない所には合わないのです。私はポロ色の馬とは違うのです。部員のみなさんはここをどうもわかってくれないのです。子供達を見てください。私を見て「シルバー、シルバー」と熱きょうします。そしてあのチビ君を「クロベークロベーク」といってばかりします。子供は正直です。みなさんもみならって下さい。

北 騷 号

ぼく、ボクちゃんです。チビだったぼくも、今では背中に人をのせて毎朝、元気に走りまわっています。からだはヨーコママに似て小さいけれど、ぼくも早くドンパバのようにたくましくなって男をあげたいなあなんて思っています。最近、人を襲って遊ぶなんて子供じみたことはもうやめようと思ってるんだけど…、やっぱり、ぼく、ガキなのかな、だれか遊んでほしいな、ね、殺したりしないからぼくと遊んで。

北 美 号

メール、素敵な名前でしょう。私はメール、メールエクспレス、そしてここでは北美と呼ばれています。毎朝練習が終ると私はミヨちゃんや天ちゃん、ツバメ君と一緒に馬場に放されます。だけど私は一人でいるのが大好きです。そして一人で私の育った青いまきばのことなど思い出したりするのです。

毎朝私は小栗さんに乗せて大きな大きな障害を一生懸命飛んでいます。そんな時の私の美しい体を、金に光る立髪を、スラリと伸びた頸を、ぜひ見に来て下さい。

太 田 装 蹄 所

札幌市東区伏古十条一丁目
十五番五号
TEL 七八二一六〇八四

和洋酒・煙草・食品

川端商店

札幌市北17条西4丁目

TEL 七四二・〇三八八

寿司、鍋もの、天ぷら（出前迅速）
各種御宴会・御会合等承ります。

大将 鮓

北区北十八条西四丁目
TEL 七四二・七二〇二

つちの酒店

12 PM

TEL 711-2575

月曜定休日

集いやご会合に御利用下さい

軽食・喫茶

林 道

北19西5
TEL 711-9295





銀座屋

■工場 札幌市西区発寒 8 3 4
 電話 (661) - 1 0 9 2
 (夜間) (664) - 4 3 8 6
 ■本社・売店 札幌市中央区南1条西17丁目
 電話 (621) - 0 7 0 1

庄内齒科

院長 庄内貞夫

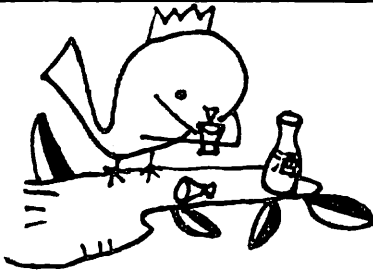
札幌市白石区本通二丁目北七二
 TEL (八六一) - 二五〇四

江戸考

割烹一品料理

政壽司

本店 小樽市 物見河原
 電話 ① 〇〇 二 〇 〇 一
 支店 札幌市南七条西小路
 電話 ② 〇 〇 〇 〇 〇 一
 (511) 二 〇 三 七



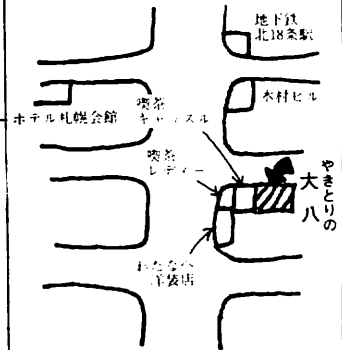
ボリューム満点
コンパもできます。

やきとり きよた

札幌市北区北17条西5丁目北向 電話 742-7000

やきとり界で常に躍進する大八グループ
やきとりの大八 地下鉄北18条店

地下鉄18条店 札幌市北区北17条西3丁目 TEL721-4908
本店 札幌市東区北10条東1丁目 TEL742-7364
本町店 札幌市東区本町1条3丁目 TEL782-8992
栄町店 札幌市東区北41条東1丁目 TEL751-8689



MAYCRAFT

メイクラフトはオリエントのマーク



馬具総合メーカー
オリエントレザー株式会社 オリエント商事

習得しませんか 本格的乗馬技術



素晴らしい馬達と共に...

北星乗馬クラブ

●銀鞍会 ●少年騎馬隊 会長松岡靖雄
札幌市豊平区里塚484 TEL 882-0886

中央競馬会 11時発表 中間オッズ掲載!

競馬ブック

中央競馬専門紙

第5回 中山 6
宮城昌康の 勝負馬券

有馬記念

第22回

6R タカフリート 9R トウショウボーイ 7R ギフジ
4月26日(日) 札幌競馬場 2500m

真の実力日本一は?
晴雨を問わないテンポイント



テンポイントが天啓の馬券を叩き出した。この一歩を踏み越えれば、中山競馬の歴史は書き換わる。中山競馬の歴史は書き換わる。中山競馬の歴史は書き換わる。

中山競馬の歴史は書き換わる。中山競馬の歴史は書き換わる。中山競馬の歴史は書き換わる。

中山競馬の歴史は書き換わる。中山競馬の歴史は書き換わる。中山競馬の歴史は書き換わる。

レース	出走馬	オッズ	結果	タイム
6R	タカフリート
7R	ギフジ
8R
9R	トウショウボーイ

平和食堂

ラーメン・焼魚・焼肉・定食、各種
出前迅速

北区北一八条西五丁目
☎七二一―二六七

COFFEE-PRO-SHOP



Hungry Horse

地下鉄北18条駅前(木村ビル2F)

さと

お好み焼
焼そば
おでん
定食

北区北18条西4丁目
☎742-0010

ボリューム
のある店

キャッスル

北区北17条西3丁目

編集後記

い。

(編集責任者 根岸 泉)

時は十月、

西川兄、「お前部報の責任者だ。しっかりやれ。」

私、「えっ僕が。はい一生懸命やります。」(心の中で、い

やだなあと思いつつも、四月発行の大事業を…)

それ以来、原稿集めの多忙な毎日が始まった。(実は、集まらなくて暇なのだが…)

十一、十二、一月原稿が集まるのをじっと待った。寒い冬だった。

ああ、早くしないと雪が解けてしまう。当初の目標「四月発行」は崩れてしまった。

×兄姉、「部報、いつできるの。」

私、「五月です。」いや、「六月には何とかか。」

こんな有様で発行が大幅に遅れた事を深くお詫び申し上げると共に、発行に際し、御協力下さった半沢先生、小池部長、岡田監督や諸先輩、現役部員諸兄姉に心から御礼を申し上げます。

まことに残念なことに、我が部にとって思い出深い馬であるハイエイム号が足の故障(右前肢腱断裂)のため離厩いたしました。今は、岩手県遠野市に繁殖牝馬として元気に毎日を送っているのとことです。

諸大学から続々と部報が届く中、ようやく校正が修了しました。部報発行がこんなに大変な事だったとは……。次号の編集委員どの、前号が出る前に編集にかかることが大切ですよ。頑張ってください。

編集委員 一年目全員
表紙カッター 大久保道男

部報 第二十四号

昭和五十四年六月 発行

発行者 北海道大学馬術部

札幌市北区北十七条西六丁目

北大体育会内

TEL(〇一一)七一―一二一一

内線五五九七

編集者 部報編集委員会

印刷所 北大生協プリント部

非売部

安全・親切・快適

全日空限定乗合・一般観光貸切・一般乗用の

北都交通株式会社

取締役社長 武田忠幸

本社 札幌市豊平区月寒中央通り11丁目7-46
☎853-2191
バス手配 営業☎853-2181
総務・経理☎853-2191
ハイヤー営業所 札幌市西区八軒10条東5丁目
☎代表711-4181
バス営業所 札幌郡広島町字大曲184の8
☎01137-7-3855
貸切バスセンター 札幌市北区北7条西4丁目東センビル
☎代表721-6371

大地は、母。

豊かな稔りの母ともいうべき北の大地、北海道。ホクレンは、この日本の食糧基地を背景に、土づくりからはじまる農業生産を手がける一方、農畜産物の加工、流通に取り組む、生産から消費にいたる新しいトータルシステムの確立に力をかためています。全国の食卓へ、新鮮でおいしい食品をお届けするために…。

